特別史跡及び特別名勝　厳島

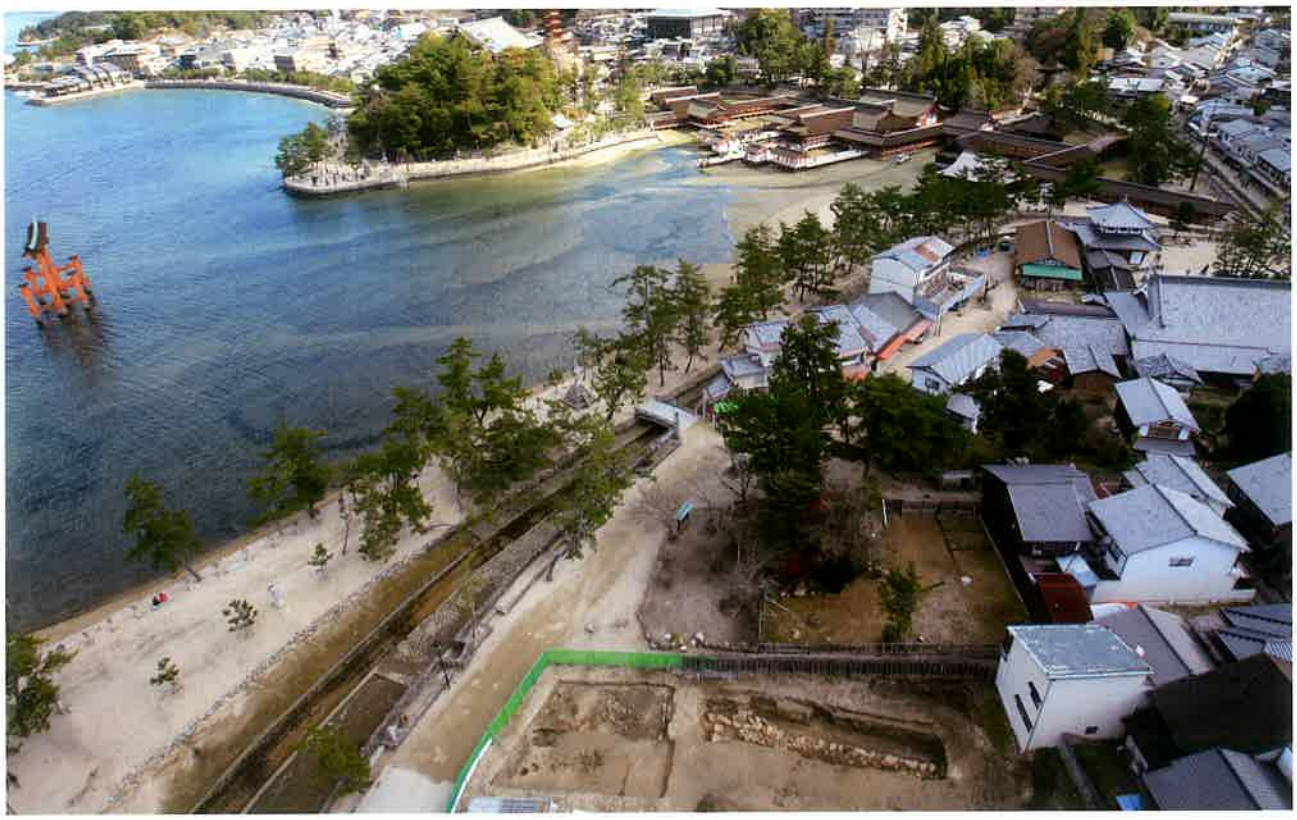
宮島町屋跡 西大西町 第1地点 発掘調査報告書3

—(仮称)厳島美術館建設に伴う発掘調査の記録—

2012年

甘日市市教育委員会

巻頭図版



調査地近景（西から）

石積み（北東から）

序　文

本報告書は平成20年（2008）7月に行った（仮称）厳島美術館建設に伴う発掘調査の継続として建設予定地が拡張されたため、その部分を含めた範囲で、平成23年8月から実施した発掘調査の記録です。

厳島は、昭和27年に全島が特別史跡・特別名勝に指定されました。現在、文化庁のホームページで確認すると、特別史跡そして特別名勝の両方に指定されている文化財は、厳島を除いて金閣寺庭園・旧浜離宮など6箇所が知られています。しかし、いずれも部分的な指定であり、厳島のように全島が指定されているものはありません。そこには、多くの皆さんの暮らしと生活があり、文化財の保護と活用を円滑に進めるための理解をいただくことが大きな課題となっています。

また、自然公園法（瀬戸内海国立公園）や都市公園（宮島公園）、森林法など様々な法律により全島が保護の対象となっています。また、平成8年(1996)12月には「厳島神社」が世界遺産に登録され、島全体が遺産保護のための緩衝地帯（バファーゾーン）になっています。

ところで、厳島神社周辺の狭い地域に住民の民家が集中している厳島において、発掘調査の事例は数えるほどで、平成2年（1990）の宮島歴史民俗資料館収蔵庫建設に伴う発掘調査、平成7年（1995）の祝師屋敷跡の調査と多くありません。このため、町屋の成立や形成の過程を示す資料は僅かです。

今回の(仮称)厳島美術館の建設に伴う埋蔵文化財調査は、平成２０年度から始まり現在1500㎡に及ぶ調査が実施され、この地区の町屋形成以前から、市街地や町屋の形成と住民の暮らしの変遷などを解明する貴重な資料を得ることができました。

最後になりますが、この発掘調査にあたりましてご指導をいただきました広島県教育委員会や調査の意義をご理解、ご協力いただきました地元住民の方々に対しまして深く敬意と感謝の気持ちを表します。

平成24年（２０１２）3月

廿日市市教育委員会
教育長　今　橋　孝　司

例　　言

1　本書は、平成23（2011）年 8月から翌年3月にかけて実施した宮島町屋跡西大西町第1地点（廿日市市宮島町大西）の発掘調査の報告書である。

2　発掘調査は、廿日市市教育委員会文化スポーツ課が担当し、文化財有識者の協力を得た。

3　調査に当っては特定非営利活動法人広島文化財センター（平成24年2月に特定非営利活動法人ヒロシマ文化・健康サポートセンターから改称）に遺構実測、写真撮影を委託した。

4　遺物の実測、トレース及び撮影は特定非営利活動法人広島文化財センター重森正樹、濵岡大輔が行った。また、挿図や図版の作成は重森正樹が行った。

5　本書の執筆は、藤田広幸（Ⅰはじめに・Ⅵまとめ）、重森正樹（Ⅱ位置と環境・Ⅲ調査の概要・Ⅳ検出遺構・Ⅴ出土遺物・Ⅵまとめ）が分担した。

6　本書の編集は重森正樹が廿日市市教育委員会文化スポーツ課と協議、調整をして行った。

7　出土陶磁器（北東調査区及び東調査区出土分）の鑑定は佐賀県立九州陶磁文化館 特別学芸顧問大橋康二氏に、石製品の石材鑑定は考古地質学研究所の柴田喜太郎氏に、動物遺存体同定は山口市教育委員会 嘱託職員　沖田絵麻氏にお願いした。

8　なお、本書作成までの過程で次の方々からご協力、ご教示を賜った。また、広島県内の文化財関係者からもご協力を賜った。記して謝意を表したい。

　　船井向洋・乗岡実・松下真実（50音順 敬称略）

9　遺構埋土分析、鉄滓分析は株式会社古環境研究所に依頼した。

10　現地調査については有限会社新竹建設の作業員各位の協力を得、遺物整理については特定非営利活動法人広島文化財センター臨時職員の川崎智恵が行った。

11　発掘調査に係る資料（遺構・遺物実測図、写真、遺物等）は、廿日市市教育委員会及び廿日市市郷土資料室で保管している。

凡　　例

1　本書で使用した遺構名及び番号は第1回調査(2009年刊行)、第2回調査(2010年刊行)の名称と番号を引き継ぐもの(新検出遺構は新番号)としたが、石垣については本書では石積みとした。

2　本書は図中に座標北を示し、標高は全てT.Pに準拠した。

3　遺物実測図の断面は土製品、石器、骨角器を斜線に、金属器を網掛けに、その他を白抜きとした。

4　遺物法量のうち、推定復元した値と現存値については（　）付きで記した。

5　挿図と図版の遺物番号は一致する。

6　第1図及び第2図は廿日市市教育委員会『厳島神社門前町－廿日市市厳島伝統的建造物群保存対策調査報告書－』2007年より抜粋した。

7　第3図は国土地理院発行の1：50,000の地形図（広島・厳島）を使用した。

8　第4図及び第42図は1：2,500の廿日市市宮島地域地形図を使用した。

9　第39図は廿日市市大西町発掘調査団『特別史跡及び特別名勝 厳島 宮島町屋跡 西大西町第1地点発掘調査報告書―（仮称）厳島美術館建設に伴う発掘調査の記録―』2009年より抜粋した。

１０　第43図は『広島県史　古代中世資料編Ⅱ』巻頭図版を複写し使用した。

本　文　目　次

Ⅰ　はじめに・・1
Ⅱ　位置と環境・・2
Ⅲ　調査の概要・・6
Ⅳ　検出遺構・・・11
　1　北東調査区第１面（主に近世の遺構）
　2　南調査区第１面（主に近世の遺構）
　3　東調査区第２面（中世から近世にかけての遺構）
Ⅴ　出土遺物・・27
　1　北東調査区遺構出土遺物
　2　南調査区遺構出土遺物
　3　東調査区遺構出土遺物
　4　包含層出土遺物
Ⅵ　まとめ・・・53

付編　自然科学分析調査報告書・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・61
付表　・・・81

図 版 目 次

巻頭図版　調査地近景（西から）
　　石積み（北東から）
図版１　a. 調査前遠景（西から）
　　b. 調査前近景（東から）
　　c. 調査区全景（西から）
図版２　a. 北東調査区完掘状況（南から）
　　b. 北東調査区完掘状況（西から）
　　c. 北東調査区土層断面（南から）
図版３　a. 北東調査区土層断面（西から）
　　b. SK24 完掘状況（北から）
　　c. SK24 完掘状況（西から）
図版４　a. 埋甕 11 半裁状況（南から）
　　b. 埋甕 11 内部完掘状況（西から）
　　c. 石列７検出状況（南から）
図版５　a. 石列８検出状況（南から）
　　b. 石列８検出状況（西から）
　　c. 石列９完掘状況（南から）
図版６　a. 石列９完掘状況（西から）
　　b. 南調査区調査状況（南東から）
　　c. 南調査区北端土層堆積状況(南西から)
図版７　a. 南調査区西側完掘状況（北から）
　　b. 南調査区中央調査状況（北から）
　　c. 南調査区南東側完掘状況（北から）
図版８　a. 南調査区北東側完掘状況（北から）
　　b. 南調査区北側完掘状況（北から）
　　c. SK30 貼床検出状況（北から）
図版９　a. 南調査区中央遺構検出状況（北から）
　　b. 南調査区中央調査状況（北東から）
　　c. SK40 土層堆積状況（東から）
図版 10　a. SK44 完掘状況（東から）
　　b. SK45 完掘状況（南から）
　　c. 石組 15 検出状況（北から）
図版 11　a. 石組 15 内部完掘状況（北から）
　　b. 石積み検出状況（南東から）
　　c. 石積み検出状況（北東から）
図版 12　a. 石積み土層堆積状況（北から）
　　b. 石積み北東端検出状況（北から）
　　c. 石積み北東端矢穴痕（北から）
図版 13　SK24 出土遺物１
図版 14　SK24 出土遺物２
図版 15　SK24 出土遺物３
図版 16　SK24 出土遺物４
図版 17　SK24 出土遺物５
図版 18　SK24 出土遺物６
図版 19　SK24 出土遺物７・埋甕 11 出土遺物
図版 20　SK26・SK27・SK29・SK30・SK31 出土遺物
図版 21　SK32・SK33・SK35・SK36・SK37・SK38 出土遺物
図版 22　SK38・SK39・SK40・SK41 出土遺物
図版 23　SK42・SK45・石組 15・石積み出土遺物
図版 24　包含層出土遺物１
図版 25　包含層出土遺物２

挿　図　目　次

第１図　大願寺絵図トレース ・・・・・・・・ 3
第２図　吉田家絵図トレース ・・・・・・・・ 3
第３図　宮島町屋跡 西大西町 第一地点と周辺の主な遺跡 ・・・・・・・・・・・・ 4
第４図　西大西町第１地点位置図・・・・・ 5
第５図　調査区位置図 ・・・・・・・・・・ 6
第６図　遺構配置図 ・・・・・・・・・・・ 7
第７図　調査区土層断面図１ ・・・・・・・・・8
第８図　調査区土層断面図２ ・・・・・・・・・9
第９図　SK24 実測図・埋甕 11 実測図・・ 12
第 10 図　石列８・石列７・石列９実測図・・ 13
第 11 図　SK26・SK27・SK29・SK30・SK31 実測図・・・・・・・・・・・・・・・15
第 12 図　SK32・SK33・SK34・SK35・SK36 SK37 実測図 ・・・・・・・・・・・17
第 13 図　SK39・SK42 実測図 ・・・・・・・19
第 14 図　SK38・SK40・SK41・SK44・SK45 実測図 ・・・・・・・・・・・・・・21
第 15 図　石組 15 実測図・・・・・・・・・・22
第 16 図　垣塀１実測図 ・・・・・・・・・・23
第 17 図　石積み実測図 ・・・・・・・・・・25
第 18 図　SK24 出土遺物実測図１・・・・・・28
第 19 図　SK24 出土遺物実測図２・・・・・・29
第 20 図　SK24 出土遺物実測図３・・・・・・30
第 21 図　SK24 出土遺物実測図４・・・・・・31
第 22 図　SK24 出土遺物実測図５・・・・・・33
第 23 図　SK24 出土遺物実測図６・・・・・・34
第 24 図　SK24 出土遺物実測図７・・・・・・35
第 25 図　SK24 出土遺物実測図８ ・・・・・36
第 26 図　SK24 出土遺物実測図９ ・・・・・37
第 27 図　埋甕 11 出土遺物実測図 ・・・・・38
第 28 図　SK26・SK27・SK29・SK30 出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・39
第 29 図　SK31 出土遺物実測図 ・・・・・・41
第 30 図　SK32・SK33・SK35・SK36・SK37 出土遺物実測図・・・・・・・・・・42
第 31 図　SK38 出土遺物実測図・・・・・・・43
第 32 図　SK39・SK40 出土遺物実測図 ・・・44
第 33 図　SK41・SK42 出土遺物実測図 ・・・45
第 34 図　SK45・石組 15 出土遺物実測図 ・・46
第 35 図　石積み出土遺物実測図 ・・・・・・47
第 36 図　包含層出土遺物実測図１ ・・・・・48
第 37 図　包含層出土遺物実測図２ ・・・・・49
第 38 図　包含層出土遺物実測図３ ・・・・・50
第 39 図　吉田家絵図 ・・・・・・・・・・・54
第 40 図　中世遺構実測図 ・・・・・・・・・55
第 41 図　石積み北東部詳細図 ・・・・・・・56
第 42 図　石積み想定図 ・・・・・・・・・・57
第 43 図　厳島社頭屋敷圖 ・・・・・・・・・57

表　目　次

第１表　土器・陶磁器観察表（北東調査区 SK24）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・82
第２表　土器・陶磁器観察表（北東調査区 埋甕 11）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・84
第３表　土器・陶磁器観察表（南調査区 各遺構）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・84
第４表　土器・陶磁器観察表（東調査区 石積み裏込め）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・85
第５表　土器・陶磁器観察表（遺物包含層）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・85
第６表　土製品観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・86
第７表　瓦製品観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・87
第８表　石製品観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・87
第９表　金属製品観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・87
第 10 表　古銭観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・88
第 11 表　骨格器観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・88

Ⅰ　はじめに

調査に至る経緯

本市は、宮島地域における地域振興の一環として美術館誘致を行い、建設予定地である西大西町「ふれあい花広場」において平成19年度から平成20年度にかけて試掘調査や発掘調査を実施した。この結果、上層から近世から近代の建物跡・石組などの遺構が検出され、さらに下層から中世の石積みなどが確認された。中世の石積みの取り扱いについては、文化庁・広島県教育委員会（以下「県教委」という。）が協議した結果、現状保存することとし、さらに遺存状況を明らかにするための調査を平成21年度に実施し、この結果、石積みが建設予定地の中央部を東西方向に延びていることが判明した。また、建設予定地の北東にある財務省所有地を借用することとし、借用部分の試掘調査を行うため平成23年1月5日付けで中国財務局に対し掘削の承認を求めるとともに、同日付けで文化庁に対し現状変更届けを提出した。試掘調査は、平成23年1月14日付けで中国財務局から承認を、さらに平成23年1月31日付けで文化庁より現状変更（試掘調査）の許可を受け、県教委の指導により2月22日に実施し、近世以降の町屋跡に係る遺構（石組溝及び石列）を確認した。

平成23年度は、試掘調査の結果を受け廿日市市教育委員会（以下「市教委」という。）が発掘調査を実施することとし、平成23年6月1日付けで土地所有者である中国財務局に対し発掘調査の同意を求めるとともに、平成23年6月6日付けで、文化庁に対し中国財務局所有分土地（136㎡）と中世石積み部分（15㎡）の延長確認を行うため現状変更届（発掘調査）を提出した。発掘調査は、平成23年6月15日付けで中国財務局から同意を、平成23年7月15日付けで文化庁より現状変更（発掘調査）の許可を受け、平成23年8月22日から9月30日にかけて実施した。結果は、中国財務局所有地で近世末と考えられる面において、石組溝及び石列などを確認するとともに、中世石積み部分については、屈曲し南に向かって構築されている可能性があることが判明した。

平成23年9月15日に県教委と中世石積み部分に関する取り扱いについて現地で協議し、平成23年10月26日付けで文化庁に対し、中世石積み部分が南に向かって延びているのかを確認するため、許可を受けていた現状変更の計画変更（発掘調査範囲の変更）を提出（100㎡）し、平成23年11月29日付けで文化庁より計画変更の承認を得て、平成23年12月8日から12月27日にかけて発掘調査を実施した。結果は、中世石積みが直角に屈曲し南側に延びることが判明し、12月26日に県教委と中世石積み部分について方向・規模の確認を行うとともに石積み内側の取り扱いについて協議を行った。

県教委との協議を受けて市教委から平成24年1月20日付けで文化庁に対し、中世石積みが確認されたその西側部分（試掘調査未実施部分）に中世遺構の存在が想定されることから、さらに計画変更（発掘調査範囲の増加160㎡）を提出し、平成24年2月7日付けで文化庁より計画変更の承認を受け、平成24年3月6日から3月30日にかけて発掘調査を実施した。結果は、近世末の遺構面を確認し調査後、深掘りを行った結果、さらに下層に遺構面が存在していることを、3月26日に県教委とともに確認し、平成23年度の現地での調査を終了した。

Ⅱ　位置と環境

宮島は厳島神社の鎮座する島として世界的に有名であるが、人間の生活は厳島神社創建（推古天皇元 (593) 年）以前から行われていたようである。島内採集遺物として後期旧石器時代、縄文時代、弥生時代の石器・土器片の他に、奈良時代から平安時代にかけての製塩土器、緑釉陶器、瑞花八稜鏡などが挙げられる。

推古天皇元 (593) 年創建と伝えられる厳島神社であるが、その後、平清盛をはじめとした平家の後ろ盾により海上寝殿造りの社殿をもったものに整えられていくことになる。その後も幾多の自然災害、戦乱を乗り越えながら、反橋（弘治３年 (1557)）や能舞台（延宝８年 (1680)）などの施設を増設し現在に至っている。

今回の調査地は厳島神社の西側に位置する西大西町にあり、調査地の南西側には平清盛が一字一石を納めたと伝わる経尾経塚（標高約 20 m）が岬状高地として存在する。南側には弥山山系に連なる山麓部に狭小な平野が広がる。北側は紅葉谷川と白糸川が合流した御手洗川が流れている。

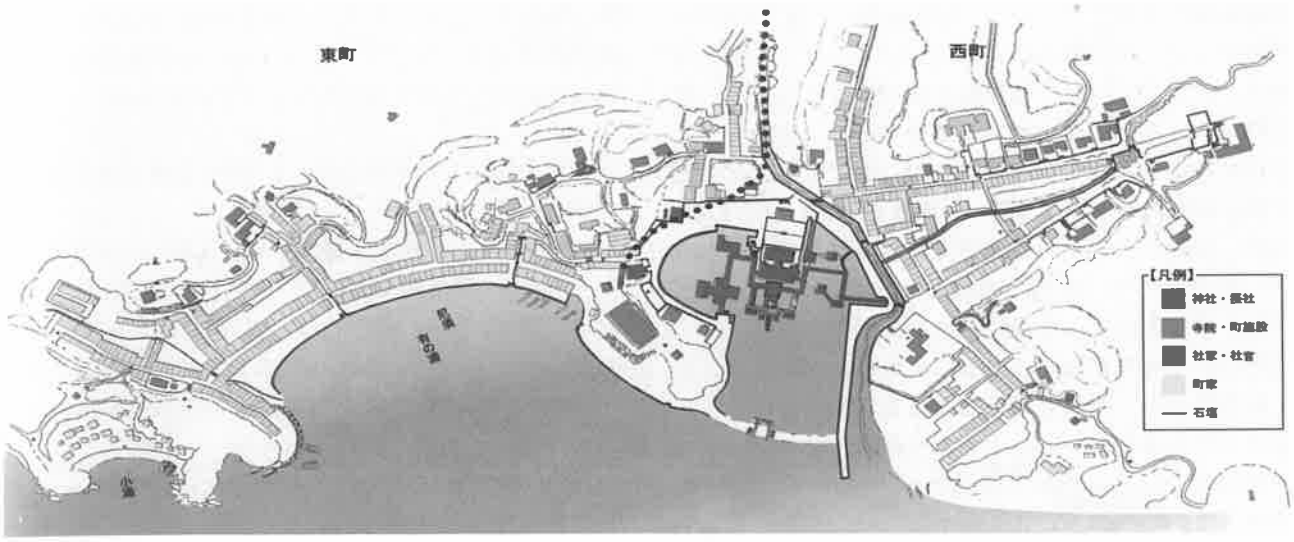
本遺跡は上層には近世の遺構面が、下層には中世の遺構面が存在することが分かっている。下層の中世遺構面では東西に約 35m の長さの石垣が検出されており、当地周辺では現在の地割とは違った形で土地利用が行われていたことが分かっている。

また、島内では中世の遺跡として本遺跡の他に菩提院遺跡などの発掘調査が行われている。他には大規模な発掘調査は多くはないが、全島が特別史跡及び特別名勝に指定されており、文化財保護法による現状申請に伴って小規模な確認調査が日々行われている。

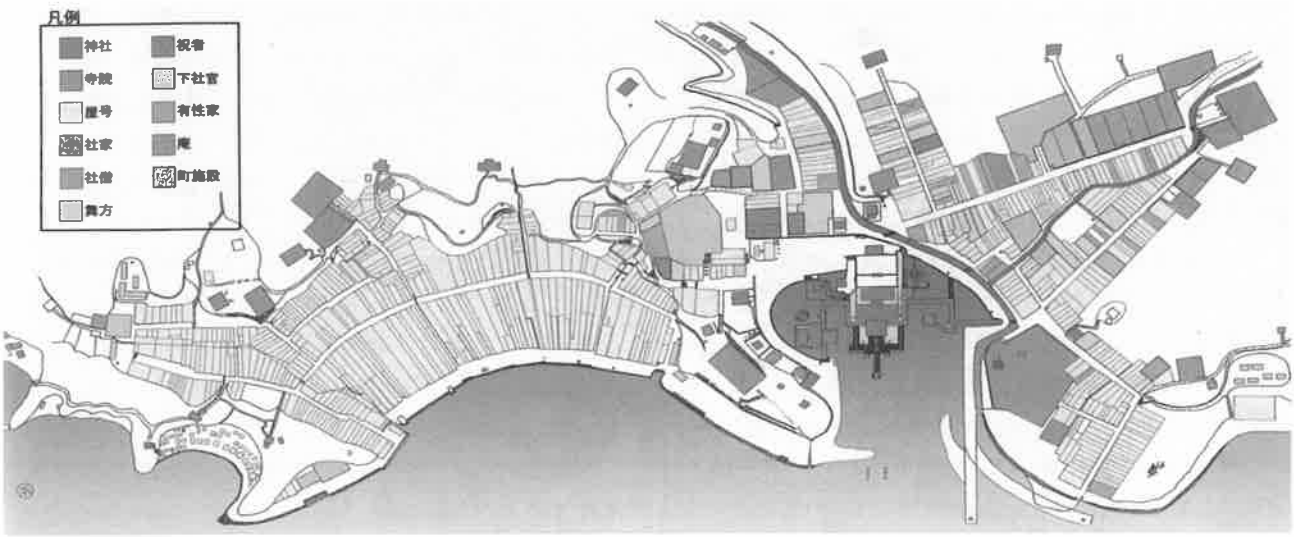
近世になると調査地周辺は大西町と呼ばれ、大願寺、大蔵坊（明治初期移転）があり、現在の厳島神社回廊出口から西に続く道沿いには間口の狭く奥行きの長い地割の町屋が形成されていた。宮島の近世を描いた絵図としては大願寺絵図（寛永２年 (1625) ～ 17 世紀末成立か）、吉田家絵図（天明３年 (1783) 成立）が存在する。大西町の町屋の成立については明らかになっていないが、文禄期 (1592~1596) のものが反映されているものと考えられている。また、調査地の北側隣接地は大願寺絵図には州浜（熊毛州）として描かれており、知新集（文政５年 (1822) 成立）には寛保３年 (1743) に「厳島社前新堤五十余丈築出し」とあることから、この頃に御手洗川の右岸 (西松原) が築堤され、吉田家絵図には現在の地形に近い形の護岸として描かれていることから、18 世紀第３四半期頃までに御手洗川の左岸にあった熊毛州を護岸として整備されたと考えられている。

その後、近代に入ると明治政府が幕藩体制下で行われてきた社寺への資金援助を見直したことで、社寺を中心とした商業街でもあった門前町は大きな変革を迎えることとなった。また長距離貨客船航路、鉄道の発達に伴い、中継海運を軸としてきた港町としての機能は徐々に失われていくこととなったが、参詣地から近代観光地に変貌を遂げていく中で宮島細工をはじめとする木工業の興業は衰退しかけた宮島門前町の経済に新たな活力を与えることとなった。

現在宮島でよく姿を見る鹿であるが、約 820 年前に宮島を訪れた西行法師の撰集抄に宮島には鹿が多いと記載されていることや、江戸時代の厳島絵図などにも鹿が描かれていることから、元々宮島に



第 1 図　大願寺絵図（17 世紀初期～末期）トレース



第 2 図　吉田家絵図（1783 年）トレース

は鹿が存在していたようである。

参考文献

広島市『新修広島市史』第 6 巻（知新集）1959 年

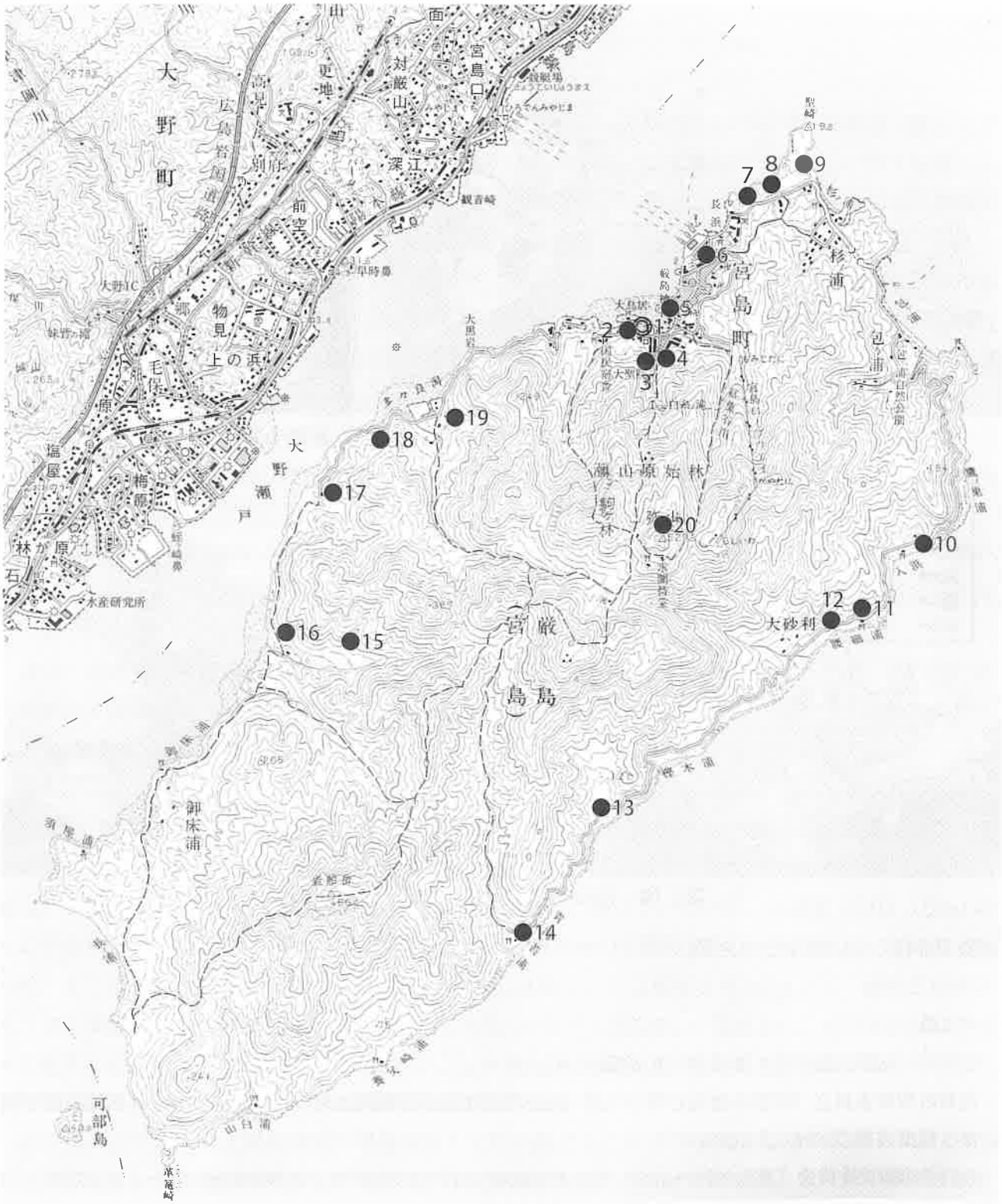
宮島町教育委員会『特別史跡及び特別名勝 厳島 菩提院遺跡発掘調査報告－宮島町立歴史民俗資料館建設に伴う発掘調査の記録－』2005 年

廿日市市教育委員会『厳島神社門前町－廿日市市厳島伝統的建造物群保存対策調査報告書－』2007 年

廿日市市『宮島地域シカ保護管理計画』 2009 年

廿日市市大西町発掘調査団『特別史跡及び特別名勝 厳島 宮島町屋跡 西大西町第 1 地点 発掘調査報告書―（仮称）厳島美術館建設に伴う発掘調査の記録―』2009 年

廿日市市大西町発掘調査団『特別史跡及び特別名勝 厳島 宮島町屋跡　西大西町第 1 地点　発掘調査報告書 2 ―（仮称）厳島美術館建設に伴う発掘調査の記録―』2010 年



1．宮島町屋跡 西大西町 第1地点　2．経尾経塚　3．菩提院遺跡　4．祝師屋敷跡　5．御笠浜遺跡　6．宮尾城跡(要害山)　7．小なきり遺跡　8．大なきり遺跡　9．姥ヶ懐遺跡　10．入浜遺跡　11．腰細浦東遺跡　12．腰細浦西遺跡　13．藤ヶ浦遺跡　14．青海苔遺跡　15．大江浦洞窟内貝塚　16．大江遺跡　17．下室浜遺跡　18．上室浜遺跡　19．多々良潟遺跡　20．弥山山頂遺跡群

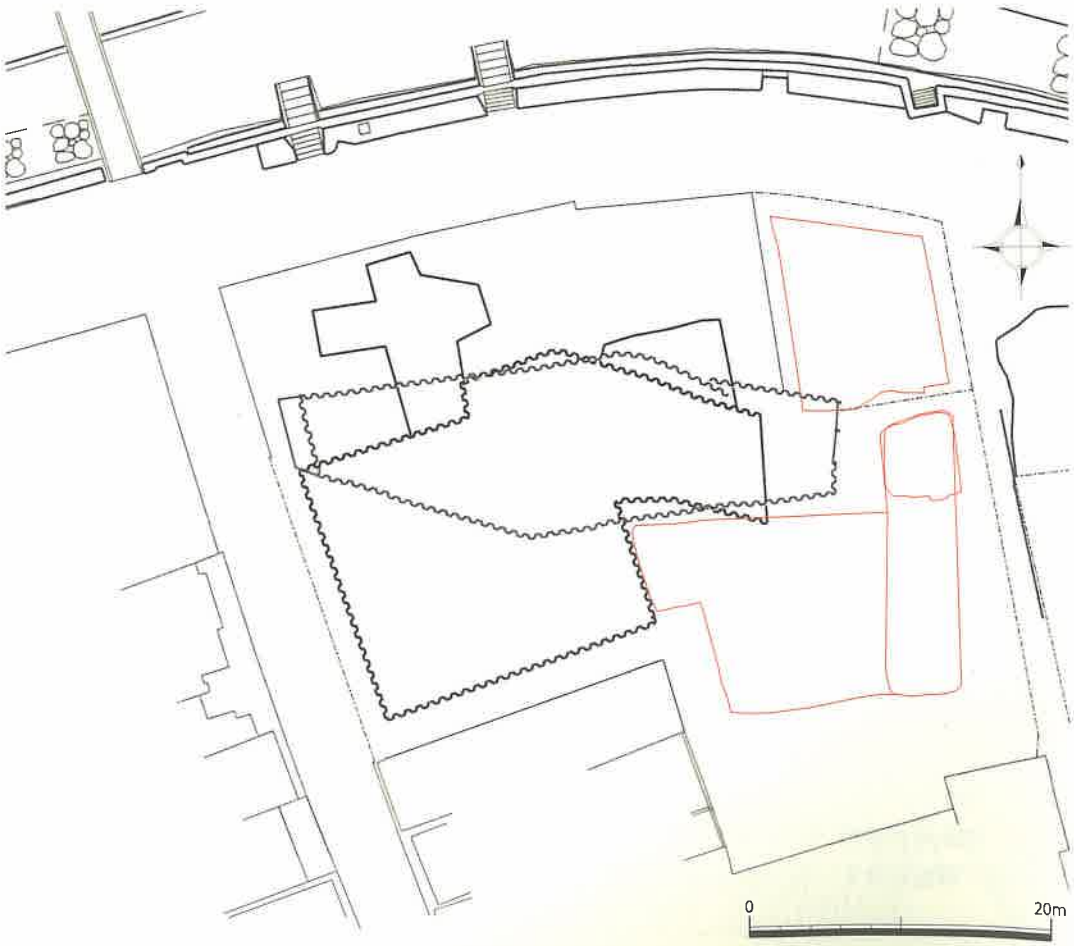
第3図　宮島町屋跡 西大西町 第一地点と周辺の主な遺跡（1：50,000）

第４図　西大西町第１地点位置図（1：2,500 斜線箇所）

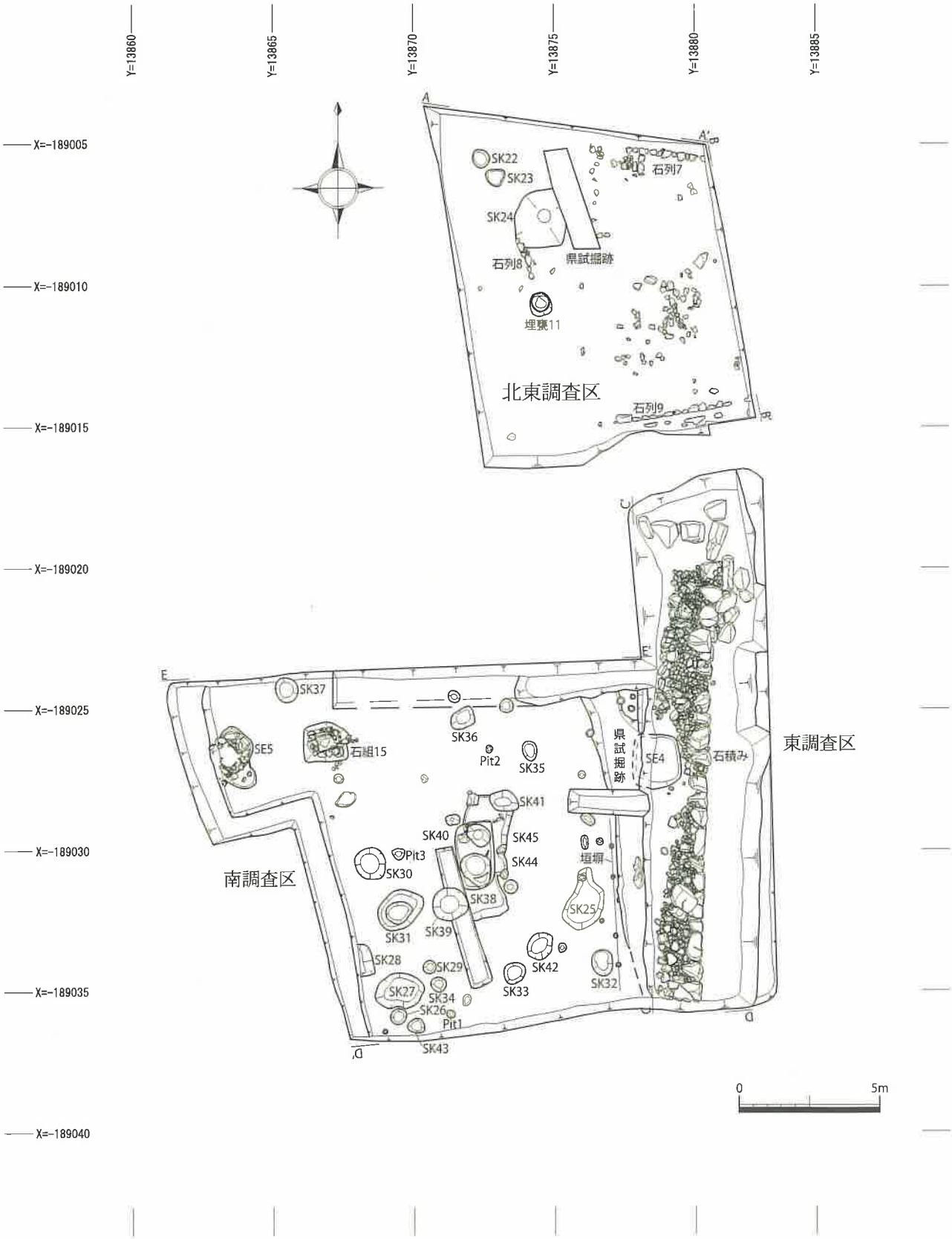
Ⅲ　調査の概要

今回の調査は平成23年8月より同年10月にかけて、美術館建設計画の設計を一部変更するにあたり、敷地の北東側（以下「北東調査区」という）で近世の遺構の確認調査を、前回の調査で検出した中世石垣（城郭に伴うものではないという考え方から以下「石積み」という）が敷地の東端まで延長しているかどうかを確認するために敷地東側（以下「東調査区」という）を発掘した。北東調査区では主に近世の遺構面が地表面から約40cmの深さで確認された。主な遺構は江戸時代後半の遺物を多量に含む土坑や埋甕、石列、石組溝などが検出された。また、東調査区では前回の調査で検出した中世石積みの延長部分を検出したが、石積みが南側に曲がり構築されている可能性があることが判明した。そこで、石積みが直角に曲がり、本当に南側に延長しているかを確認するために平成23年12月に発掘調査を行った。その結果、調査範囲の南北をまっすぐに石積みが構築されていることが判明した。さらに、中世石積みの後背地となる敷地南側（以下「南調査区」という）で遺構の有無を確認するために平成24年3月に調査を行った。その結果、近世の石組、土坑、垣塀跡等を検出した。

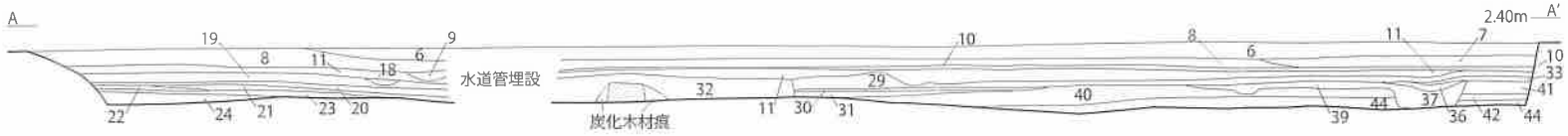
平成23年度内の3度にわたる調査の室内整理作業を平成23年11月より平成24年3月末日まで行った。

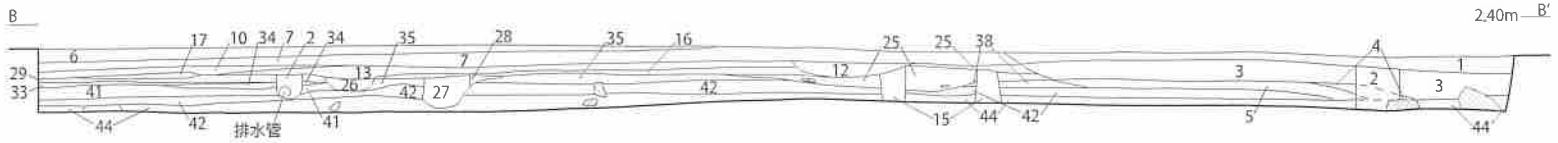


第5図　調査区位置図（黒色は既往調査、赤色は今年度、1：500）

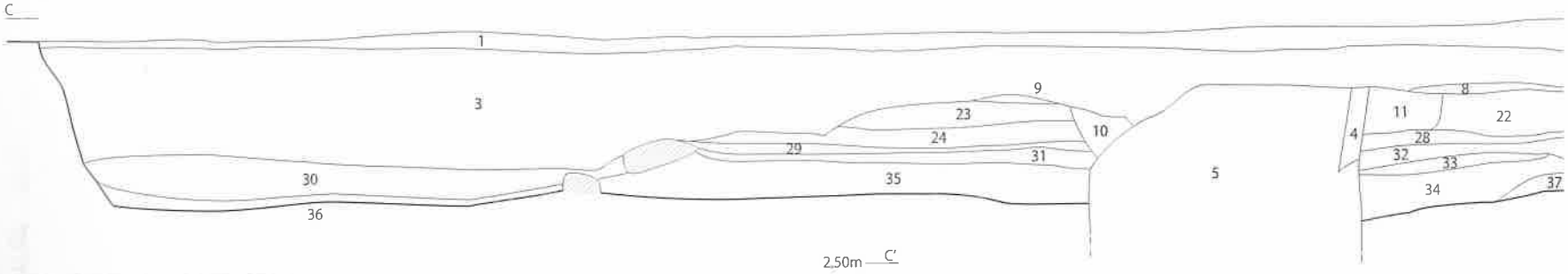


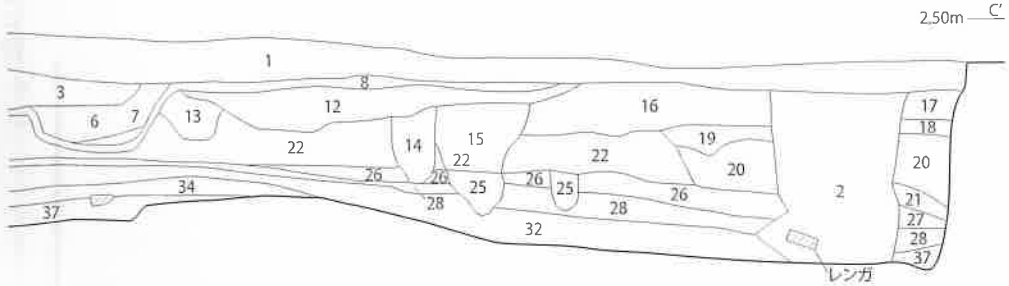
第６図　遺構配置図（1：200）





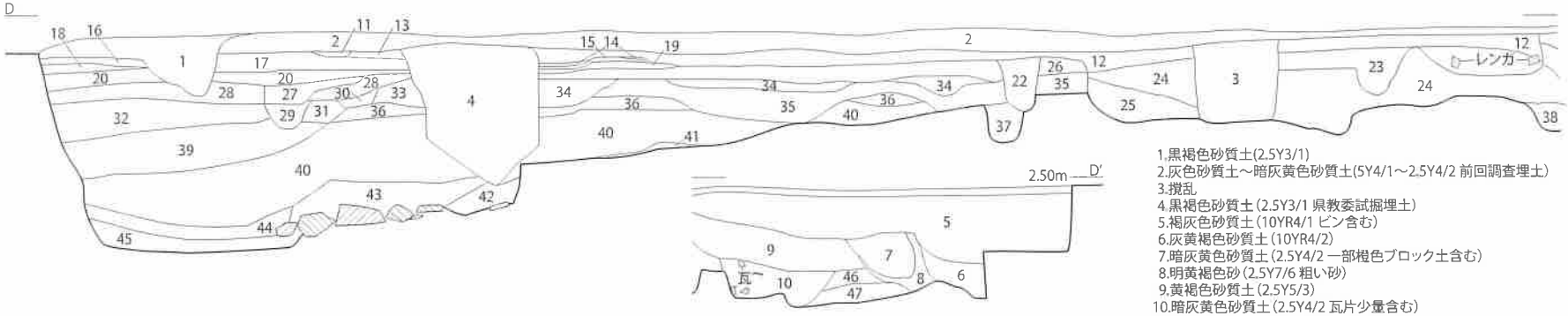
1. 暗褐色砂質土 (10YR3/3 表土)
2. 黒褐色砂質土 (2.5Y3/2 排水管埋設土)
3. 暗オリーブ褐色砂質土 (2.5Y3/3)
4. 黄褐色砂 (10YR5/6)
5. 褐色砂質土 (10YR4/4)
6. 褐色砂 (10YR4/6 表土・マサ土混入?)
7. 褐色砂 (10YR4/4 表土・マサ土混入?)
8. 暗褐色砂 (10YR3/3 貝片含む)
9. 褐色粘質土 (10YR4/4 粒子細かく粘土に近い)
10. 褐色砂質土 (10YR4/4)
11. 黒褐色砂質土 (10YR3/1)
12. 黒色砂礫 (2/0 アスファルト?)
13. にぶい黄色砂質土 (2.5Y6/4)
14. 黄褐色砂質土 (10YR5/6 砂粒含みかたい)
15. 黒褐色砂質土 (2.5Y3/2 バイラン土含む)
16. 暗灰黄色砂質土 (2.5Y4/2)
17. 褐色砂質土 (7.5Y4/6 しまり有り)
18. 黒褐色砂質土 (2.5Y3/2)
19. にぶい黄褐色砂質土 (10YR4/3 砂に近い)
20. にぶい黄褐色砂 (10YR4/3)
21. 黄褐色砂質土 (2.5Y5/3 シルトに近い)
22. 褐色砂質土 (10YR4/4)
23. 黄褐色砂質土 (10YR5/6 砂粒含みやわらかい)
24. オリーブ黒色砂質土 (5Y3/2 砂に近い)
25. 黄褐色砂質土 (10YR5/6 砂粒含みかたい)
26. 褐色砂質土 (10YR4/4 炭含む・しまり有り)
27. 黒褐色砂質土 (2.5Y3/2)
28. 黄褐色砂質土 (10YR5/6 砂粒含みかたい)
29. 暗灰黄色砂質土 (2.5Y4/2 砂に近い)
30. 暗褐色砂質土 (10YR3/3)
31. 褐色砂質土 (10YR4/4)
32. 暗褐色砂質土 (10YR3/4)
33. オリーブ黒色砂質土 (5Y3/1)
34. 黄褐色砂質土 (10YR5/6 砂粒含みかたい)
35. 黒褐色砂質土 (2.5Y3/1)
36. 暗灰黄色砂質土
37. 褐色砂 (10YR4/4)
38. にぶい黄褐色砂質土 (10YR4/3)
39. 暗灰黄色砂 (2.5Y4/2)
40. 黒褐色砂質土 (2.5Y3/1)
41. 暗オリーブ褐色砂質土 (砂に近い)
42. 暗褐色砂質土 (10YR3/4)
43. 黒褐色砂質土 (2.5Y3/2 砂に近い)
44. 黒褐色砂 (7.5YR2/2 目が粗い)



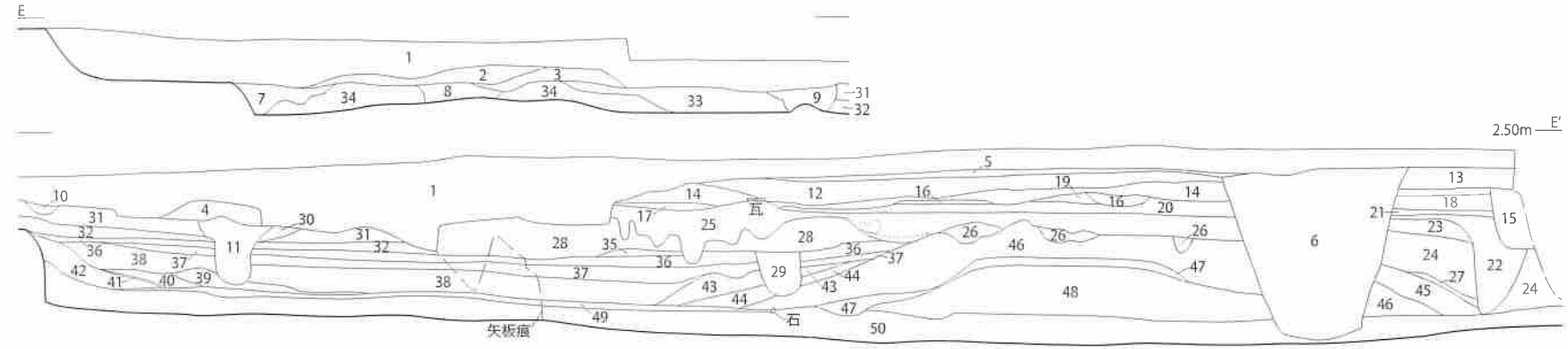


1.灰色砂質土～暗灰黄色砂質土 (5Y4/1～2.5Y4/2 前回調査埋土)
2.黒褐色砂質土(10YR3/1)
3.黒褐色砂質土 (2.5Y3/1 県教委試掘埋土)
4.暗青灰色砂礫土 (10BG3/1+7.5Y3/2 暗褐色土混入)
5.オリーブ黒色砂質土＋礫 (5Y3/2 近現代の井戸)
6.にぶい黄褐色砂質土 (10YR4/3 締まりあり)
7.灰黄褐色砂質土 (10YR5/2 目が粗い)
8.褐色砂質土 (7.5YR4/6 近現代遺構面)
9.灰黄色砂(2.5Y7/2)
10.にぶい黄褐色砂質土(10YR4/3)
11.黒褐色砂質土 (10YR3/2 瓦含む・締まりあり)
12.黒褐色砂質土(2.5Y3/2)
13.黒褐色砂質土 (2.5Y3/1 締まりあり)
14.黒褐色砂質土 (10YR3/2 小貝片少量含む・砂層を縦方向に含む)
15.黒褐色砂質土 (10YR2/3 貝片含む・砂層を縦方向に含む)
16.黒褐色砂質土 (10YR3/2 小貝片・炭片含む)
17.黒褐色砂質土(10YR3/1)
18.灰色砂 (5Y6/1 締まりあり)
19.黒褐色砂質土 (2.5Y3/2 比較的目が細かい土)
20.極暗褐色砂質土 (目が粗く砂層に近い・下部に貝少量含む)
21.黒褐色砂(2.5Y3/2)
22.褐色砂質土 (10YR4/4 小貝片少量含む)
23.オリーブ褐色砂質土 (2.5Y4/3 貝層含む)
24.オリーブ褐色砂 (2.5Y4/4 一部黒色の層含む)
25.黒褐色砂質土 (10YR3/2 貝片含む)
26.にぶい黄褐色砂 (10YR5/3 小貝片を少量含む・目の粗い土と細かい土の互層か)
27.褐色砂(7.5YR4/4)
28.浅黄色砂 (2.5Y7/3 貝片多く含む)
29.貝 (暗褐色砂質土10YR3/3を含む)
30.貝 (暗褐色砂質土10YR3/4を含む)
31.黄褐色シルトと黄灰色シルトの互層(2.5Y5/3+2.5Y5/1)
32.オリーブ褐色砂 (2.5Y4/3 1cm前後の目の粗い砂と0.5mm前後の砂の互層)
33.にぶい黄褐色砂 (10YR5/4 1cm前後の目の粗い砂と0.5mm前後の砂の互層)
34.褐色砂 (10YR4/4 目の粗い土を含む)
35.オリーブ褐色砂(2.5Y4/4 砂層の割にはしまりあり・少量の貝片と一部砂礫層を含む)
36.オリーブ褐色砂 (2.5Y4/4 砂層の割には締まりあり)
37.にぶい黄褐色砂(10YR4/3)

第７図　調査区土層断面図１（1：50）



1.黒褐色砂質土(2.5Y3/1)
2.灰色砂質土～暗灰黄色砂質土(5Y4/1～2.5Y4/2 前回調査埋土)
3.撹乱
4.黒褐色砂質土(2.5Y3/1 県教委試掘埋土)
5.褐灰色砂質土(10YR4/1 ビン含む)
6.灰黄褐色砂質土(10YR4/2)
7.暗灰黄色砂質土(2.5Y4/2 一部橙色ブロック土含む)
8.明黄褐色砂(2.5Y7/6 粗い砂)
9.黄褐色砂質土(2.5Y5/3)
10.暗灰黄色砂質土(2.5Y4/2 瓦片少量含む)
11.暗緑灰色砂質土(10GY4/1)
12.黒褐色砂質土(10YR3/1)
13.黄褐色砂質土(2.5Y5/3)
14.褐灰色粘質土(10YR6/1)
15.にぶい黄橙色砂質土(10YR7/4)
16.黄褐色砂質土(10YR5/6)
17.オリーブ黒色砂質土(5Y3/1)
18.灰白色砂(5Y8/1)
19.灰色粘質土(N4/)
20.黒褐色砂質土(2.5Y3/1)
21.黄灰色砂質土(2.5Y4/1)と浅黄色粘質土(2.5Y8/4)の互層
22.褐灰色砂質土(10YR4/1 一部炭化物含む)
23.黄灰色砂質土(2.5Y5/1)
24. 暗灰黄色砂質土(2.5Y5/2 淡黄色土がブロック状に混じる)
25.褐灰色砂質土(10YR4/1 貝を少量含む)
26.灰黄褐色砂質土(10YR6/2)に明黄褐色砂質土(10YR7/6)が縞状に混じる
27.黒色砂質土(2.5Y2/1 焼土・炭片多く含む)
28.黒色砂質土(2.5Y2/1 貝片少量含む)
29.黒色砂質土(2.5Y2/1 貝片含まない)
30.暗褐色砂 (炭片含む・貝片少量含む)
31.暗灰黄色砂質土(2.5Y4/2)
32.黒褐色砂質土(2.5Y3/2 貝片含む)
33.黒褐色砂質土(10YR2/3 貝片少量含む)
34.黄褐色砂質土(10YR5/6)
35.灰黄褐色砂質土(10YR4/2 貝片を少量含む)
36.灰黄色砂(2.5Y7/2)
37.灰黄褐色砂質土(10YR4/2)
38.暗灰黄色砂質土(2.5Y4/2)
39.暗オリーブ褐色砂(2.5Y3/3 貝片少量含む・締まりなし)
40.貝(暗褐色砂質土10YR3/4含む)
41.褐灰色粘質土(10YR4/1 貝を含む)
42.オリーブ褐色砂(2.5Y4/4 締まりあり)
43.暗オリーブ褐色砂質土(2.5Y3/3 貝を少量含む・石積み裏込め土)
44.暗灰色粘質土(3/N 貝を一部含む)
45.暗オリーブ灰色砂質土(2.5Y4/1)
46.暗灰黄色砂質土(2.5Y5/2)
47.暗灰黄色砂質土(2.5Y4/2 一部橙色ブロック土含む)



1.表土(第2回調査時埋土)
2. 暗灰黄色砂質土(2.5Y4/2)
3.にぶい黄褐色砂質土(10YR4/3)
4.褐色砂質土(10YR4/6)
5.灰色砂質土(第1回目調査時埋土)
6.試掘トレンチ跡
7.黒褐色砂質土(10YR3/2)
8.褐色砂質土(10YR4/4)
9.灰黄褐色粘質土(10YR4/2)
10.灰黄褐色砂質土(10YR5/2)
11.褐色砂質土(10YR4/4)
12.にぶい黄橙色砂質土(10YR7/4 粗い砂を含む)
13.黄灰色砂質土(2.5Y5/1)
14.褐灰色粘質土(10YR6/1 橙色粘質土が縞状に混じる)
15.浅黄色砂質土(2.5Y7/3 下側に橙色粘質土が縞状にはいる)
16.黄灰色砂質土(2.5Y4/1)
17.灰白色砂(10YR8/2 貝含む)
18.にぶい黄色砂質土(2.5Y6/4 粗い砂含む)
19.浅黄色砂(2.5Y7/3)
20.にぶい黄橙色砂質土(10YR7/4)
21.黄灰色砂質土(2.5Y4/1)
22.暗灰黄色砂質土(2.5Y4/2)
23.浅黄色砂質土(2.5Y7/3 貝含む)
24.にぶい黄色砂質土(2.5Y6/3 粗い砂含む)
25.灰黄褐色砂質土(10YR5/2 貝を少量含む)
26.暗灰黄色砂質土(2.5Y4/2 締りあり)
27.黄灰色砂質土(2.5Y5/1 有機物含む)
28.にぶい黄橙色砂質土(10YR6/4)
29.褐色砂質土(10YR4/4 締りあり 貝片を少量含む)
30.にぶい黄褐色砂質土(10YR5/4 締りなし)
31.明黄褐色砂質土(10YR6/6 締りなし)
32.にぶい黄褐色砂質土(10YR5/4)
33.にぶい黄褐色砂質土(10YR5/4)
34.明黄褐色砂(10YR6/6 粗い砂)
35.にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3)
36.にぶい黄褐色砂質土(10YR4/3 締りあり)
37.貝
38.明黄褐色砂(10YR6/6)
39.貝
40.粗い砂と細かい砂の互層
41.根跡
42.浅黄色砂(2.5Y7/3 粒子細かい砂)
43.灰白色砂(10YR8/2 粗い砂)
44.灰白色砂(10YR8/2)
45.にぶい黄色砂質土(2.5Y6/3)
46.にぶい黄色砂質土(2.5Y6/3)
47.浅黄色砂質土(2.5Y7/4)
48.にぶい黄色砂質土(2.5Y6/4)
49.黒褐色粘質土(10YR3/2 有機物含む)
50.浅黄色砂(2.5Y7/3 粗い砂含む)

第８図 調査区土層断面図２（1：50）

北東調査区の土層は近世の遺構面から現在まで一部水道管などを埋設した箇所があるものの、基本的には土層が数 cm ごとに堆積していることが判明した。ちなみに石列 9(石組溝) は浸透桝排水管 (B-B′第 2 層) 埋設時に一部削平を受けている。

東調査区及び南調査区では過去の調査時に当調査区の上に排土の移設を行っていることと、広島県教育委員会が実施した試掘坑が残存していることが判明した。試掘坑跡の下部には近現代の遺構面（井戸 (C-C′第 5 層) や貼り床 (C-C′第 8 層)）が存在し、それらの下位に貝を含む浅黄色砂 (C-C′第 28 層) やにぶい黄褐色砂 (C-C′第 26 層) が堆積している。当初これらの層 (C-C′第 26・28 層) は中世石積み構築時の遺構面に相当するものと考えていたが、調査終了前に南調査区の北端に東西方向の試掘坑を設定し、土層を確認したところ、貝層（E-E' 第 39 層）・砂の互層（E-E' 第 40 層）で国産磁器片や陶器片 (273) が確認されたため、近世のものと確認された。その貝層、砂の互層の直下では黒褐色粘質土が砂層の上に堆積しており、近世前半の遺構面と考えられる。さらに試掘坑の床面で土坑が検出され、中世もしくは近世初頭の遺構の存在が考えられる。土坑上面では土師質土器皿 (274) が出土している。

南調査区及び東調査区の南端調査壁（D-D'）では西側が近現代に大きな撹乱を受けていることが判明した。東側は中世石積みの上部の石を抜き取った後に埋められたと考えられる貝層（D-D' 第 40 層）や褐灰色粘質土（D-D' 第 41 層）から近世初頭のものと考えられる土師質土器皿や鍋、国産陶磁器片などが出土している。また、中世石積みの裏込め（D-D' 第 43 層相当）から土師質土器皿、瓦質土器鍋と釜、瀬戸美濃天目茶碗、備前焼擂鉢や土錘、鹿角の加工片などが出土している。この裏込めは石積み構築時の遺物のみでなく、石積み上部に積んでいたであろう石材を抜き取った時に混入した遺物も入っていると考えられる。

ちなみに SE5 は SE4 と同様表土を除去した段階で検出されたことから近現代のものである。

Ⅳ　検出遺構

北東調査区では第１面で石組溝、石列、埋甕、土坑などを検出した。また、南調査区では第１面で土坑、石組、垣塀跡を検出した。東調査区では第１面に該当する遺構面が、過去の試掘で削平を受けて消失しており、第２面で中世に構築されたと考えられる石積みを検出した。主な検出遺構には、次のようなものがある。

１　北東調査区第１面（主に近世の遺構）

標高が約 1.8 m前後で、石組溝、石列、埋甕、土坑などの遺構を検出した。

SK22（第６図）

北東調査区の北西部で検出した。径 60 × 64㎝程の円形の土坑で、30 ～ 36㎝の深さをもつ遺構である。埋土は貝を含むにぶい黄褐色砂質土の単層である。出土遺物は陶器碗、土瓶、擂鉢、磁器碗、皿、土師質土器皿、鍋、甕、瓦質土器片、鉄片が出土している。出土遺物から第二次大戦後の遺構とみられる。

SK23（第６図）

北東調査区の北西部で検出した。径 68 × 61㎝程の円形に近い形状の土坑で、24㎝程の深さをもつ遺構である。埋土は締まりのある黄褐色砂質土の単層である。出土遺物は陶器片、磁器碗、土師質土器片が出土している。出土遺物から第二次大戦後の遺構とみられる。

SK24（第９図、図版３）

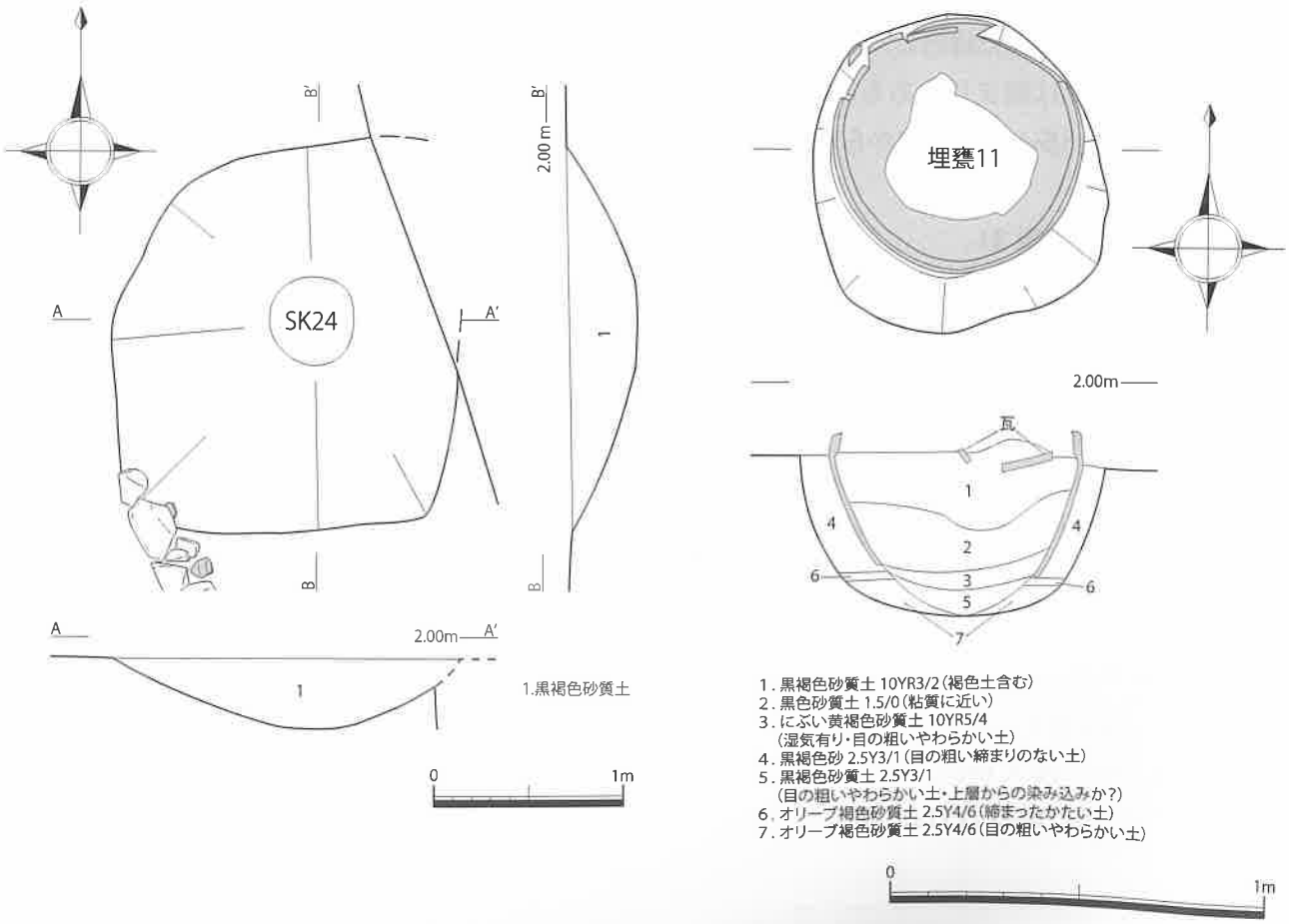
北東調査区の北西部で検出した。北東調査区の中央を南北に広島県教育委員会が実施した試掘跡があることから、東側の端が不明であるが、南北約 2.08m、東西推定約 1.82m、深さは最も深い箇所で 0.37m 程の規模をもつ土坑である。埋土は黒褐色砂質土（単層）で、遺物が多く出土した。埋土が単層であるため、遺物を埋めた時期が長期間と考えられない一括遺物廃棄土坑と考えられる。遺構検出時に本遺構上部や周辺から数多くの遺物が出土していることから、廃棄されたと考えられる遺物は遺構面より盛り上がっていた可能性がある。出土遺物は土師質土器の皿 (1)、火鉢 (99)、萩焼の皿 (7)、瀬戸美濃の皿 (2)、関西系陶器の灯明皿 (9・10)、碗（3・4)、瓶 (12)、土瓶蓋 (16・17)、土瓶 (18 ～ 24)、香炉 (26)、擂鉢 (33、35 ～ 36、38 ～ 41)、肥前陶器の皿 (5)、鉢 (27・28)、擂鉢 (42)、甕 (48・49)、肥前磁器の小碗 (50・51)、碗蓋 (60 ～ 63)、碗 (64 ～ 70、74)、紅猪口 (84・85)、小皿 (86)、角鉢 (92)、段重 (93)、瓶 (97・98)、肥前系磁器の小碗 (52 ～ 59)、碗 (71 ～ 73、75 ～ 83)、皿 (89 ～ 91)、蓋 (94)、火入 (96)、瓦質土器の火鉢 (101 ～ 103)、釜 (104 ～ 112)、丸瓦 (113)、平瓦、軒平瓦 (114・115)、砥石 (116)、鉄片などである。

埋甕 11（第 9 図、図版 4）

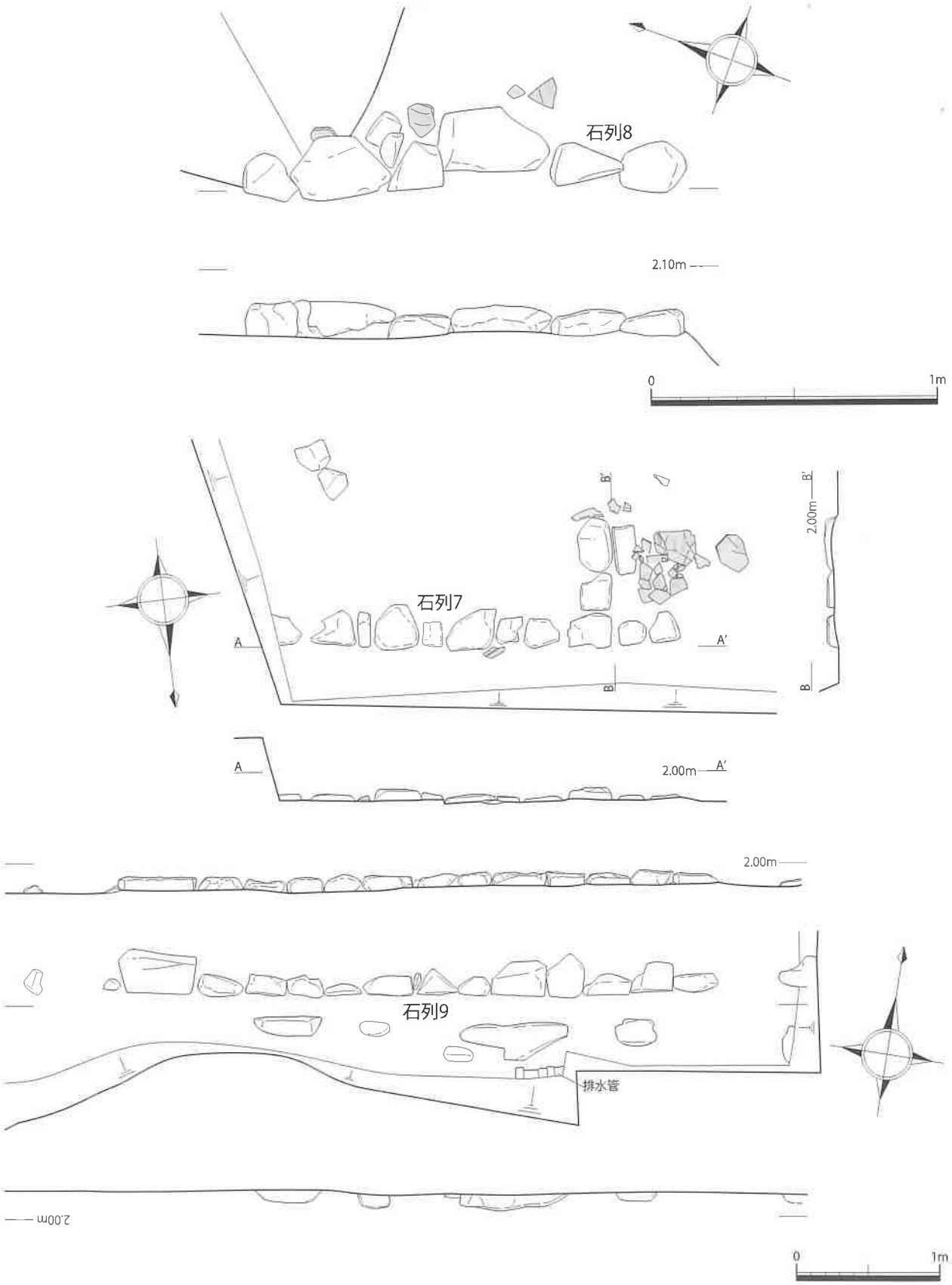
北東調査区中央南西側で検出した埋甕 (129) で、掘方の規模は南北 0.85m ×東西 0.77m、深さ 0.47m で、甕の大きさは径 0.67m、長さ (深さ)0.41m で、土師質土器甕の底がない状態で据えられている。底部にあたる部分の破片は出土していない。掘方も含めて甕内部の土は黒褐色系の土が多くを占めていた。埋土第 4 層（最下層）の科学分析の結果、寄生虫卵等は検出されず、花粉や珪藻の密度が極めて低いことから本埋甕は浸透による排水を目的とした遺構の可能性が高い。出土遺物は甕の中から土師質土器皿、陶器皿 (117)、鉢 (118)、磁器碗、瓶？、香炉？ (119)、鍋蓋 (120)、瓦質土器擂鉢、火鉢？、円盤状土製品、軒平瓦、砥石 (121)、飾金具 (122・123)、鎹 (124・125)、鉄釘 (126・127)、鉄板 (128) が、掘方から陶器碗、皿、磁器碗、鍋蓋 (120)、仏飯具、土師質土器皿、鍋、甕、丸瓦、鉄釘、特殊石製品が出土している。

石列 7（第 10 図、図版 4）

北東調査区北東側で検出した石列で、現状では 11 個の石を北側に面を揃えるように配置している。また、西端から 3 つ目の石は角を意識して配置されていると思われ、そこから南に更に 2 石を西側を面として意識して配置している。規模は現状で東西方向に約 2.8m、南北方向に約 0.9m で、各石材は



第 9 図　SK24 実測図 (1：40)・埋甕 11 実測図 (1：20)(網目は瓦・土器)



第10図　石列8（1：20）、石列7・石列9実測図(1：40)（網目は瓦・土器）

自然石の平らな面を上にして配置している。各石の上面の標高は 1.81m ～ 1.91m である。方位は N － 83°－ W である。この方位は前回調査時 (2010 刊行) 検出の石列 6 などと方向としては同一と思われる。石列の西側には平瓦や土器片がみられる。

石列 8（第 10 図、図版 5）

北東調査区西側で検出した石列で、6 個の石を西側に面を揃えるように配置している。規模は現状で南北方向に約 1.55m、各石材は上面を意識しては配置されていない。各石の上面の標高は 1.92m ～ 2.0m である。北側の 3 つの石はきれいに西側を意識して据えられているのに対し、南側の 3 石は西側の面を直線的に配置しておらず、特に南端側の 2 石は乱れが激しいことから設置後に動いた可能性や、北側構築後につき足した可能性が残る。方位は N － 20°－ W で、初回調査時 (2009 刊行) 検出の石列 4 などと方向としては同一の可能性がある。

本遺構は SK24 に隣接して構築されており、構築時期は SK24 と同時期もしくは SK24 が埋まりきった段階で構築されたものと考えられる。石列の周囲では瓦片が出土している。

石列 9（第 10 図、図版 5・6）

北東調査区南側で東西方向に検出した石組みの溝である。検出した溝の規模は長さ 5.0m、溝の内径 0.13m ～ 0.20m で、深さ約 0.10m である。本遺構周辺には東西方向に排水管が埋設してあり、石組み溝の北側は残存状況が比較的いいが、南側はほとんど残存していない状況である。石組みの内面の方位は N － 109°－ W で前回調査時 (2010 刊行) 検出の石列 1、石列 2 などと方向としては同一と思われる。石組み溝の埋土は過去の攪乱により構築当時の土は確認出来なかった。調査地東壁に石組み溝の延長石がみられることから延長距離はわからないが、当初は東側に続いていたものとみられる。

2　南調査区第 1 面 (主に近世の遺構)

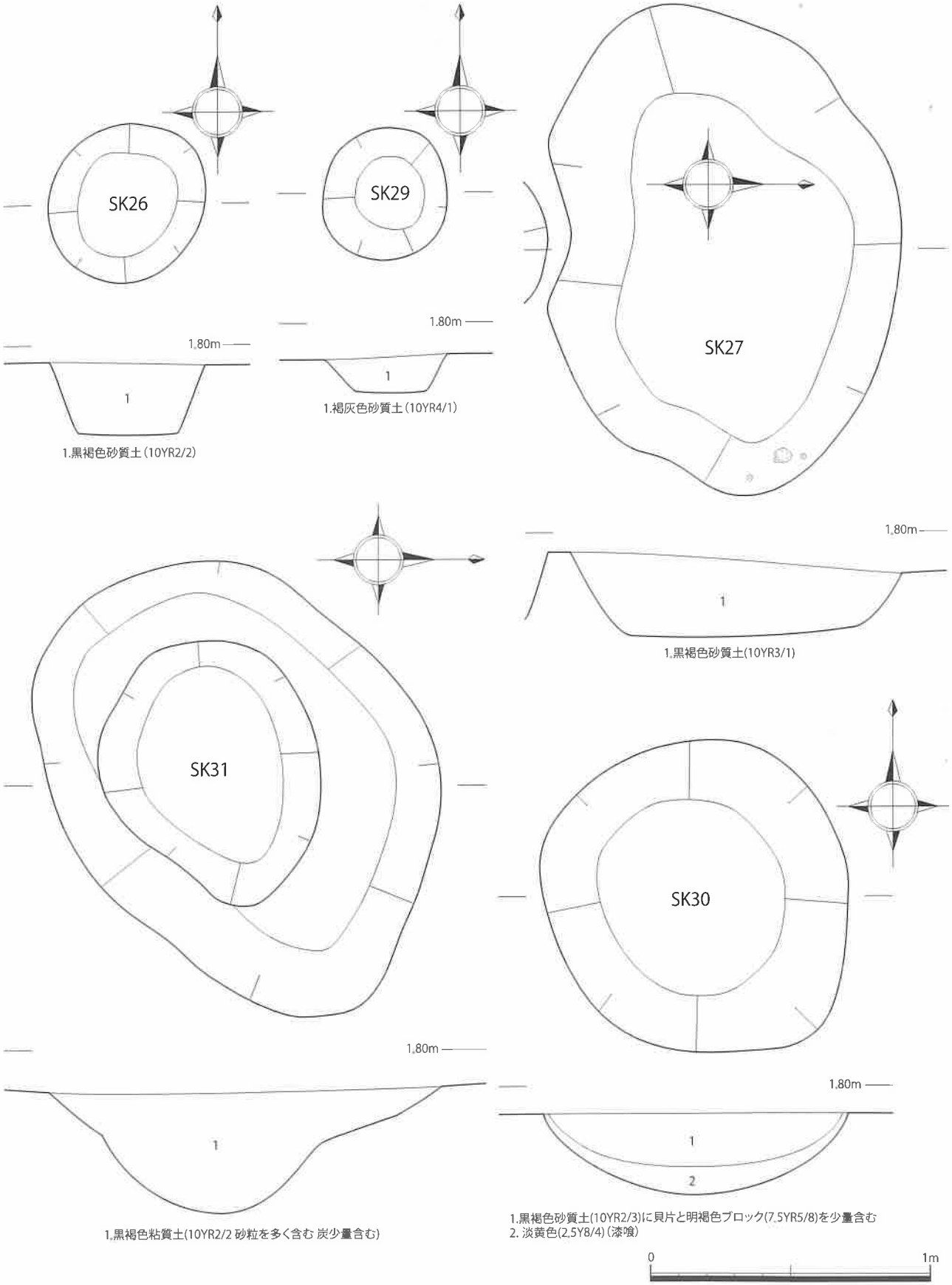
標高が約 1.6 m前後で、東側が傾斜になり標高約 1.5m 前後となっている。SK（土坑）、石組、垣塀跡を検出した。

SK25（第 6 図、図版 7）

南調査区の東南側で検出した。223cm × 126cm の不整形な形状の土坑で、深さ 13 ～ 26cm を測る。出土遺物は陶磁器片、土師質土器片、瓦質土器片、鉄釘、ビニールなどが出土し、現代の攪乱である。

SK26（第 11 図、図版 7）

南調査区の南西端で検出した。直径 56cm 程の円形の土坑で、深さ 25cm 程を測る。埋土は黒褐色砂質土の単層である。出土遺物には土師質土器皿 (130)、陶器碗、磁器碗、土師質土器鍋、瓦質土器鍋、土錘 (131)、鉄釘がある。



第 11 図　SK26・SK27・SK29・SK30・SK31 実測図（1：20）

SK27（第 11 図、図版 7）

南調査区の南西側で検出した。178cm × 118cm の不整形な形状の土坑で、深さ 23 ～ 32cm を測る。埋土は黒褐色砂質土の単層である。出土遺物には土師質土器皿 (132)、陶器碗、土瓶 (133)、擂鉢 (134)、磁器碗 (135)、皿、土師質土器甕、鍋、瓦質土器甕、円盤状土製品 (136)、平瓦、古銭、簪 (137)、鉄釘、鉄滓、古銭 (138 ～ 140) がある。

SK28（第 6 図、図版 7）

南調査区の西南端で検出した。114cm × 65cm 以上の隅丸方形と予測される土坑で、現状では深さ 30 ～ 43cm を測る。埋土は黄色の砂層を含む黒褐色砂質土である。出土遺物には土師質土器皿、陶器碗、擂鉢、土瓶、磁器皿、土師質土器鍋、瓦質土器片、円盤状土製品、瓦、鉄釘、鎹、鉄滓、鉄製瓶蓋がある。時期であるが、鉄製瓶蓋や木の根を含んでいることから第二次大戦後のものである。

SK29（第 11 図、図版 7）

南調査区の南西側で検出した。直径 46cm 程の円形の土坑で、深さ 12cm 程を測る。埋土は褐灰色砂質土の単層である。出土遺物には土師質土器皿、陶器片、磁器碗、瓦質土器鍋 (141)、古銭 (142) がある。

SK30（第 11 図、図版 7）

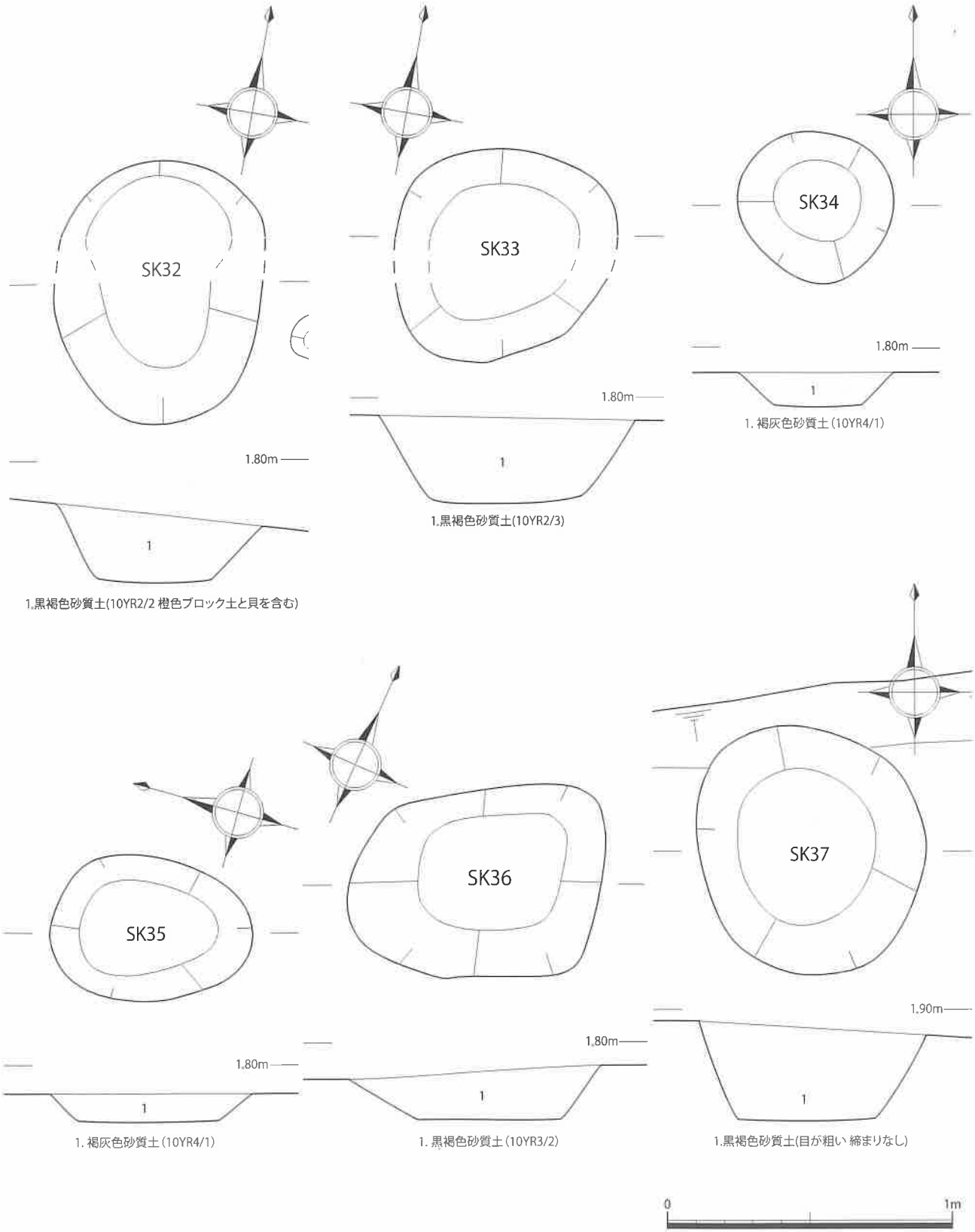
南調査区の西側で検出した。直径 111cm 程の不整形な円形の土坑で、深さ 29cm 程を測る。埋土は貝片と明褐色のブロックを少量含んだ黒褐色砂質土の単層である。埋土を掘り下げたところ全体的に床にタタキを厚さ 3 ～ 4cm、一番低位の部分では厚さ 10cm 程貼っている状況であった。このタタキは床の湿気を調整するために貼られたものと考えられる。出土遺物には土師質土器皿、陶器碗、擂鉢、磁器片、土師質土器鍋、甕 (143)、瓦質土器擂鉢、平瓦、銅釘 (144)、鉄釘 (145・146)、不明鉄製品 (147) がある。

SK31（第 11 図、図版 7）

南調査区の西側で検出した。174cm × 131cm の楕円形の土坑で、深さは 44 ～ 50cm を測る。埋土は砂粒を多く、炭を少量含んだ黒褐色粘質土の単層である。出土遺物には土師質土器皿 (148・149)、陶器蓋、碗、皿、土瓶蓋 (150)、擂鉢、磁器碗 (151・152)、皿 (153)、瓶 (154・155)、土師質土器鍋、甕、瓦質土器擂鉢、鍋、釜、火鉢、円盤状土製品（156)、土製独楽 (157・158)、丸瓦、茶臼 (159)、火打石、鉄釘、不明鉄製品 (160) などがある。

SK32（第 12 図、図版 7）

南調査区の南東側で検出した。92cm × 72cm の長円形の土坑で、深さ 18 ～ 29cm を測る。埋土は橙色ブロックと貝を含んだ黒褐色砂質土の単層である。出土遺物には土師質土器皿 (161)、陶器瓶、磁器碗、土師質土器鍋、瓦質土器片、獣骨片がある。



第 12 図　SK32・SK33・SK34・SK35・SK36・SK37 実測図（1：20）

SK33（第 12 図、図版 7）

南調査区の南側で検出した。直径 75cm 前後の円形の土坑で、深さ 24 ～ 30cm を測る。埋土は黒褐色砂質土の単層である。出土遺物には土師質土器皿、陶器皿、鉢 (162)、瓶、磁器碗、土師質土器鍋、瓦質土器片、瓦片、鉄釘 (163)、銅鋲 (164) がある。

SK34（第 12 図、図版 7）

南調査区の南西側で検出した。直径 52cm 前後の円形の土坑で、深さ 12cm 程を測る。埋土は炭化物を少量含んだ褐灰色砂質土の単層である。出土遺物には土師質土器片がある。

SK35（第 12 図、図版 8）

南調査区の北東側で検出した。71cm × 50cm の隅丸長方形の土坑で、深さ 12cm 程を測る。埋土は灰褐色砂質土の単層である。出土遺物には瓦質土器鍋 (165) がある。

SK36（第 12 図、図版 8）

南調査区の北側で検出した。88cm × 67cm の隅丸長方形の土坑で、深さ 18cm 程を測る。埋土は黒褐色砂質土の単層である。出土遺物には陶器皿、磁器碗、瓦質土器甕、古銭 (166) がある。

SK37（第 12 図）

南調査区の北西端で検出した。直径 78cm から 90cm 前後の円形の土坑で、深さ 28 ～ 35cm を測る。埋土は目が粗い、締りのない黒褐色砂質土の単層である。出土遺物には土師質土器皿、陶器皿 (167)、擂鉢 (168・169)、甕、磁器碗、瓶、土師質土器鍋、甕、瓦質土器鍋、釜、火打石、針状鉄製品 (170)、鎹？ (171) がある。

SK38（第 14 図、図版 7・9）

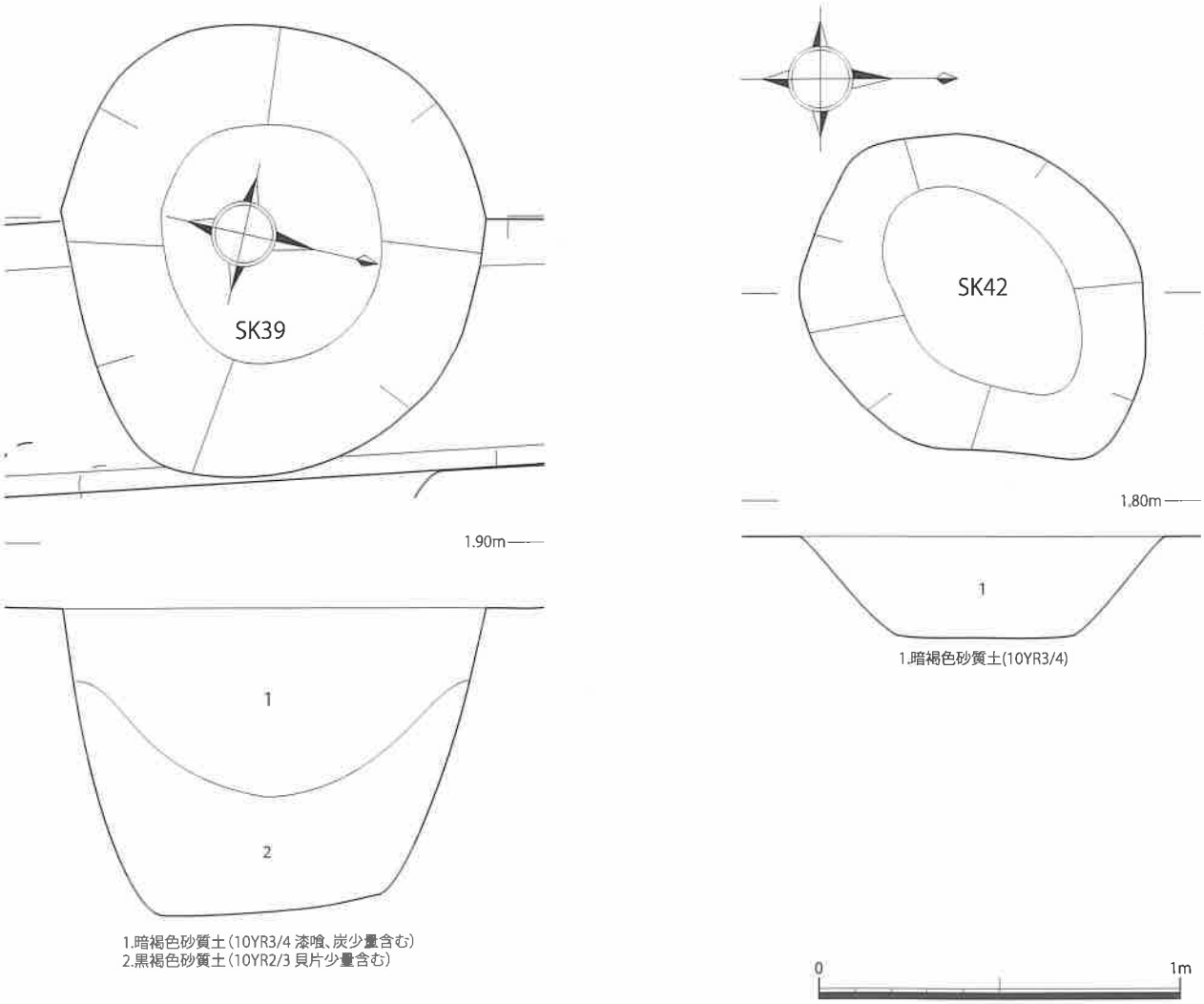
南調査区の中央で検出した。434cm × 162cm の不整形な長方形の土坑で、最も深い箇所で、深さ 48cm を測る。本遺構は SK41 と SK44、SK45 の上端を削平し、SK40 によって削平を受けている。出土遺物には土師質土器皿 (172・173)、陶器碗 (174)、皿 (175 ～ 178)、擂鉢 (179・180)、花活 (181)、壺、甕 (182)、磁器碗 (183)、碗蓋 (184)、皿、土師質土器鍋、甕、瓦質土器擂鉢 (185)、鍋、釜 (186)、甕 (187)、丸瓦、平瓦、軒丸瓦 (188)、火打石、鉄釘、鎹 (189)、鉄滓、獣骨片がある。

SK39（第 13 図、図版 7）

南調査区の中央西側で検出した。直径 120cm 前後の円形の土坑で、深さ 84cm 程を測る。出土遺物には土師質土器皿、陶器碗、皿、擂鉢、瓶、甕、磁器碗、猪口 (190)、土師質土器鍋、甕、瓦質土器片、平瓦、砥石 (191)、銅釘、鉄釘、鉄板 (192) がある。

SK40（第 14 図、図版 7・9）

南調査区の中央で検出した。240cm × 135cm の隅丸長方形の土坑で、最も深い箇所で、深さ 24cm 程を測る。北端から床北半部にかけてタタキを敷設している。出土遺物には土師質土器皿 (193)、陶器皿 (194 ～ 196)、瓶、擂鉢 (197)、磁器碗、皿 (198)、土師質土器鍋、甕 (199)、瓦質土器鍋 (200)、甕 (201)、平瓦、軒平瓦 (202)、鉄釘、銅製留金具 (203) がある。



第 13 図　SK39・SK42 実測図（1：20）

SK41（第 14 図、図版 7）

南調査区の中央北側、SK38 床面で検出した。104cm × 80cm の不整形な隅丸長方形の土坑で、深さ 33 ～ 45cm を測る。上部を SK38 によって削平を受けている。埋土は黒褐色砂質土の単層である。出土遺物には土師質土器皿 (204)、陶器碗、皿、擂鉢、磁器碗 (205)、土師質土器焙烙 (206)、鍋、甕、瓦質土器片、軒丸瓦 (207)、鉄滓がある。

SK42（第 13 図、図版 7）

南調査区の南東側で検出した。106cm × 86cm の不整形な円形の土坑で、深さ 28cm 程を測る。埋土は黒褐色砂質土の単層である。出土遺物には土師質土器皿、陶器片、磁器碗 (208)、土師質土器甕、瓦質土器甕 (209)、軽石製浮 (210) がある。

SK43（第 6 図）

南調査区の南西端で検出した。60cm × 51cm の楕円形の土坑で、深さ 12 ～ 15cm を測る。埋土は黒褐色砂質土の単層である。出土遺物には陶器瓶、磁器片、土師質土器鍋、種子、レンガがあり、近現代に埋められたものと考えられる。

SK44（第 14 図）

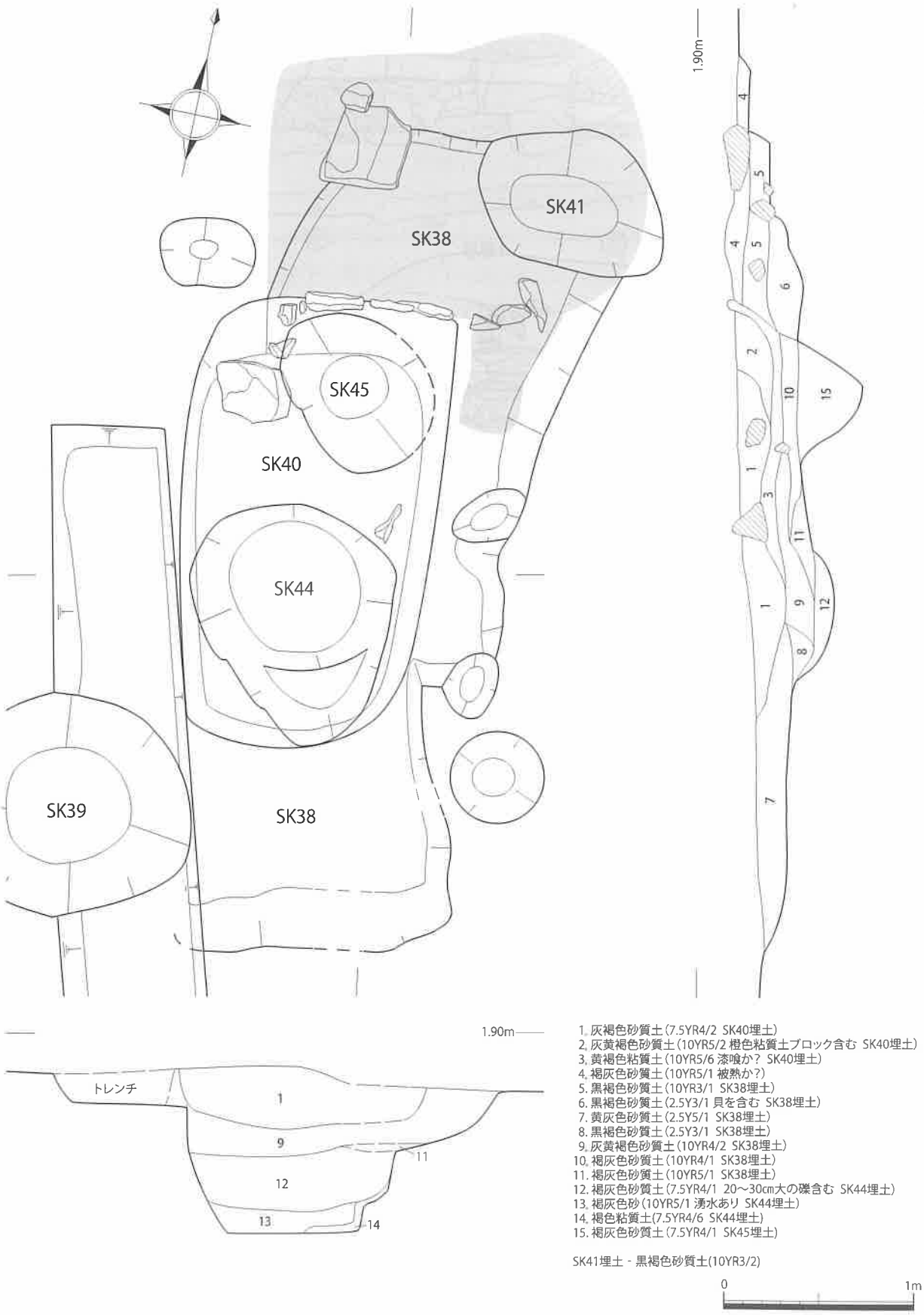
南調査区の中央、SK38 床面で検出した。127cm × 107cm の不整形な円形の土坑で、深さ 46cm を測る。上部を SK38 によって削平を受けている。南側に段をもつ。出土遺物には陶器擂鉢、磁器碗、皿、土師質土器鍋、瓦質土器鍋がある。

SK45（第 14 図、図版 10）

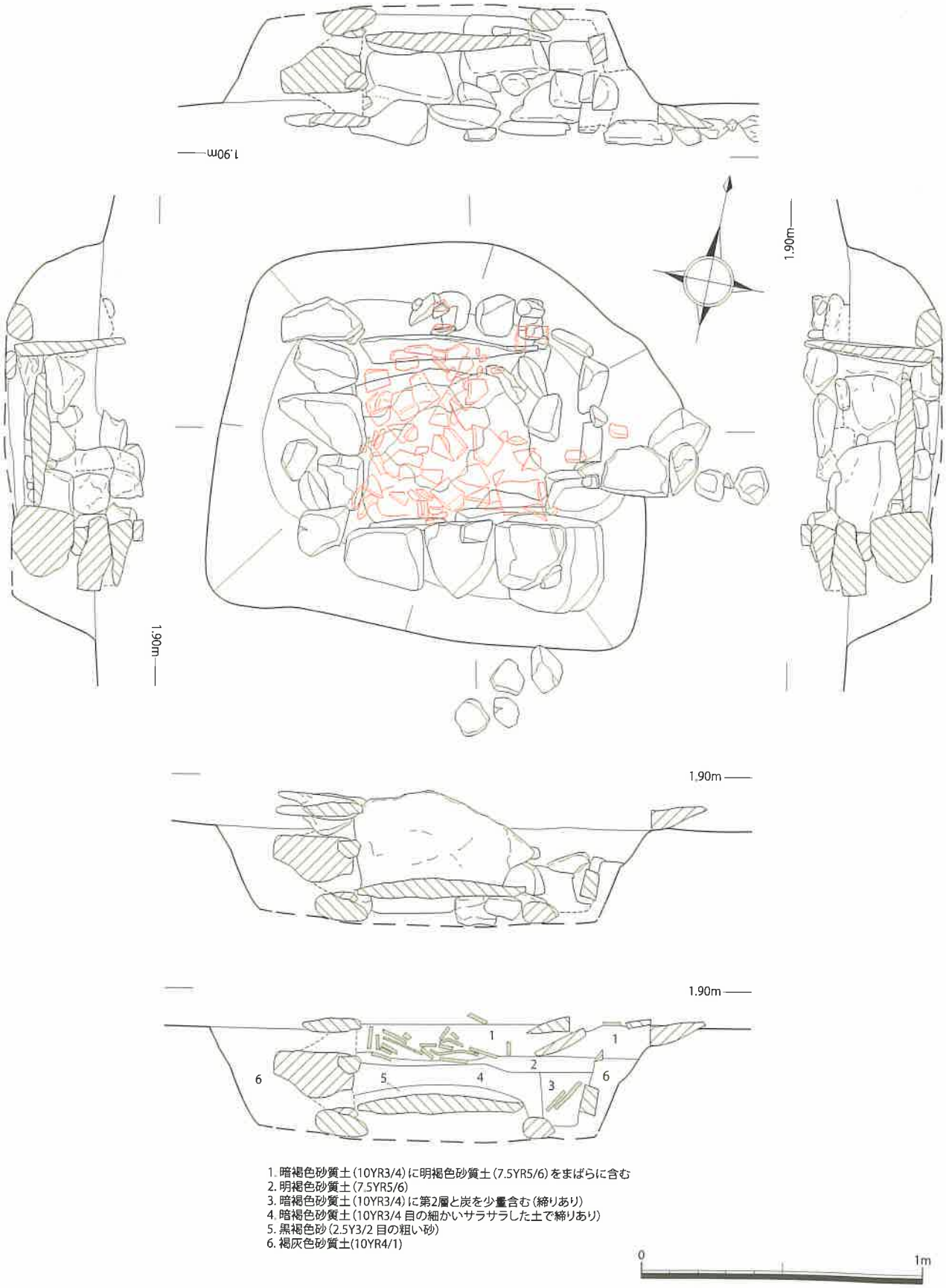
南調査区の中央、SK38 床面で検出した。91cm × 68cm 前後の楕円形の土坑で、最も深い箇所で、深さ 50cm を測る。上部を SK38 によって削平を受けている。埋土は褐灰色砂質土の単層である。出土遺物には土師質土器皿、陶器碗 (211)、擂鉢、磁器碗、皿、土師質土器鍋、瓦質土器鍋、砥石 (212)、煙管 (213) がある。

石組 15（第 15 図、図版 10・11）

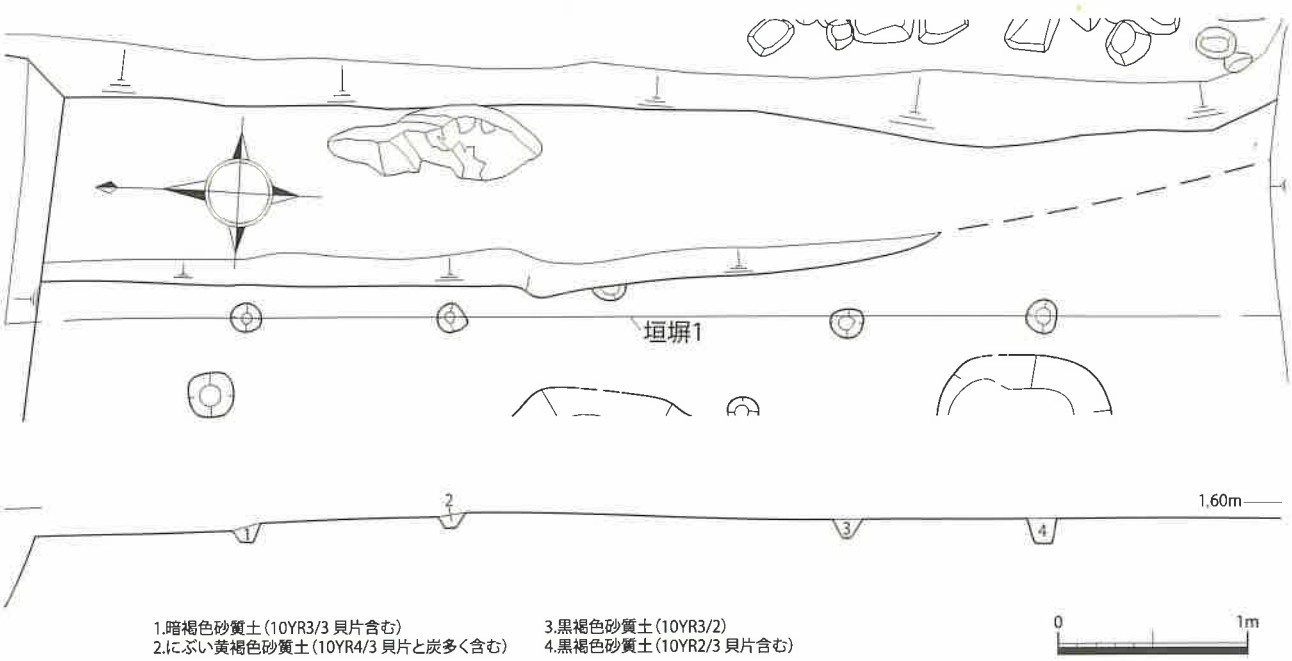
南調査区の北西側で検出した。158cm × 140cm の隅丸長方形の土坑に、内径が南北 54cm 前後×東西 50 ～ 66cm の方形になるように石を設置している。東西及び南側は石を積んで、小口面を内側に向けて側壁としているが、北側は薄い板石を立てて置いて側壁としている。また床にもしっかりとした厚さの板石を敷いている。石組の深さは最も深い箇所で、深さ 40cm 程を測る。石組の上層からは平瓦が数多く検出された。また、石組の上に砥石 (214) が置いてある状態で検出された。よって本石組は砥石で鉄製品を研磨するなど水場として機能した可能性のある遺構で、水場としての機能を必要としなくなった段階で瓦を多く捨てたものと考えたい。本遺構出土遺物には第 1 層で平瓦、陶器瓶、土瓶 (215)、磁器碗、土師質土器鍋、獣骨片、第 2 層～第 5 層に陶器碗、磁器香炉、土師質土器片、瓦



第14図　SK38・SK40・SK41・SK44・SK45 実測図（1：30 斜線は石断面、網目は被熱）



第 15 図　石組 15 実測図（1：20　朱線及び網目は瓦、斜線は石断面）



第 16 図　垣塀 1 実測図（1：40）

質土器甕、鉄釘 (216) があり、掘方から陶器皿 (217)、磁器片、土師質土器皿、瓦質土器片、瓦片が出土している。

垣塀 1（第 16 図、図版 7）

南調査区の南東側で検出した。南北方向に長さ 4.3 m程で 4 本の柱穴を検出した。北側から南側に順に柱間は 108cm、210cm、105cm で、北側と南側の柱間はほぼ等間隔に近いが、中間の柱間はそれらの倍程あり、当初柱穴の存在を考えたが、精査の結果検出されなかった。また、本遺構は南側と北側にそれぞれ延長する可能性があるが、北側は調査開始時のトレンチや県教育委員会の試掘坑で、これ以上確認できなかった。柱穴からは遺物は出土していない。しかし、本遺構は貝層の下で検出されていることから、中世末から近世初頭にかけての時期が考えられる。

南調査区南東端貝層及び貝層直下（第 8 図 D-D' 第 40 層・第 41 層）

遺構ではないが、南調査区南東端で、垣塀 1 及び石積み南端の上部に堆積している貝層 (第 40 層) を検出した。貝層からは土師質土器皿 (261)、陶器碗 (262)、皿、瓶、擂鉢 (263・264)、磁器碗 (265)、土師質土器鍋 (266)、瓦質土器鍋、甕、土錘 (267)、平瓦、古銭 (268・269)、獣骨片が出土している。また、上記貝層と遺構面の間にある褐灰色粘質土 (第 41 層) では土師質土器皿 (270)、陶器碗、磁器碗、皿 (271)、瓦質土器甕、土錘 (272) が出土している。

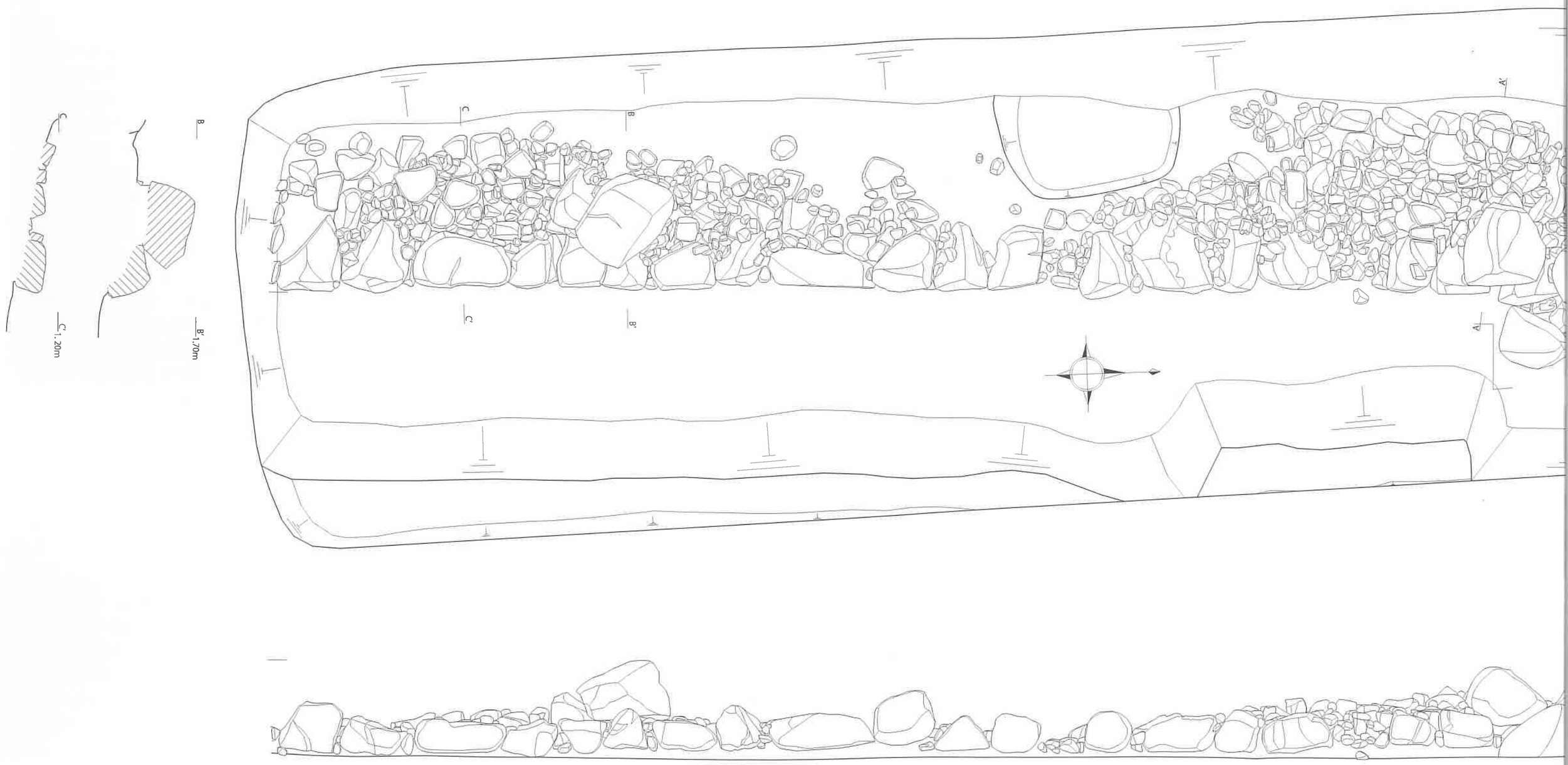
3　東調査区第 2 面（中世から近世にかけての遺構）

標高約 1.0 ～ 1.65 mで、石積みを検出した。

石積み（第 11 図、巻頭図版・図版 11・12）

東調査区で前回調査で検出した石積みの東側延長線上に検出した東西方向と南北方向の石積みで、東西方向に約 3.2m、南北方向に約 17.0m を検出した。石積みは東西方向のものは基底石を北方向に、南北方向のものは東方向に面を意識して組んでいる。石積みの高さは残存している石の高い部分で標高 1.65m、石積みの基底石の底部で標高約 0.70m(南側) ～ 0.65m(北側) である。石積みは調査区南壁中に石が確認できることから南側にまだ直線的に続いているとみられる。調査区北端と調査区北東側には南からあるいは西からの石積み列からずれた位置に石材がある。東側が未調査なので一概に断定できない面もあるが、これらの石材は当初石積みの上部に積んであったもので、一部は後世に石を抜き取った際に転げ落ち、放置されたものではないかと考えられる。これらの転石と考えられる石を除いて考えると調査区北側には東西方向の石積みの東端で、かつ南北方向の石積みの北端に位置する角石となる石があるが、当初置いてあったとみられる方向より斜めになっているとことから後世に何らかの理由で人為的に動かされた可能性が高い。また、その石材の短辺部分には 2 つの矢穴の痕跡が明瞭に残っている。矢穴痕は幅 9㎝、深さ 6㎝と幅 10㎝、深さ 9㎝を確認した。

今回検出した石積みはそのほとんどが、基底石のみの部分であるが、一部その上部に積んであったとみられる石が残存していた。これらのことから石積み構築時には最低でも上部の石の高さまでは石を組んでいた可能性が高いと思われる。基底石の据え方は長辺を前面に向けている箇所もあれば、石の短辺を前面に向けている箇所もあり、基底石の配置に関して明確な基準は見当たらない。出土遺物は石積みの裏込めと考えられる拳大から人頭大の石の間から土師質土器皿 (218・219)、瀬戸美濃天目茶碗 (220)、備前焼小鉢？ (221)、擂鉢（222)、瓦質土器鍋 (224・225)、釜 (223)、鹿角の加工片 (227)、鹿の肩甲骨や椎骨等が出土している。



第 17 図　石積み実測図 (1：40)（朱色は瓦・鉄片）

第 17 図　石積み実測図 (1：40)（朱色は瓦・鉄片）

V　出土遺物

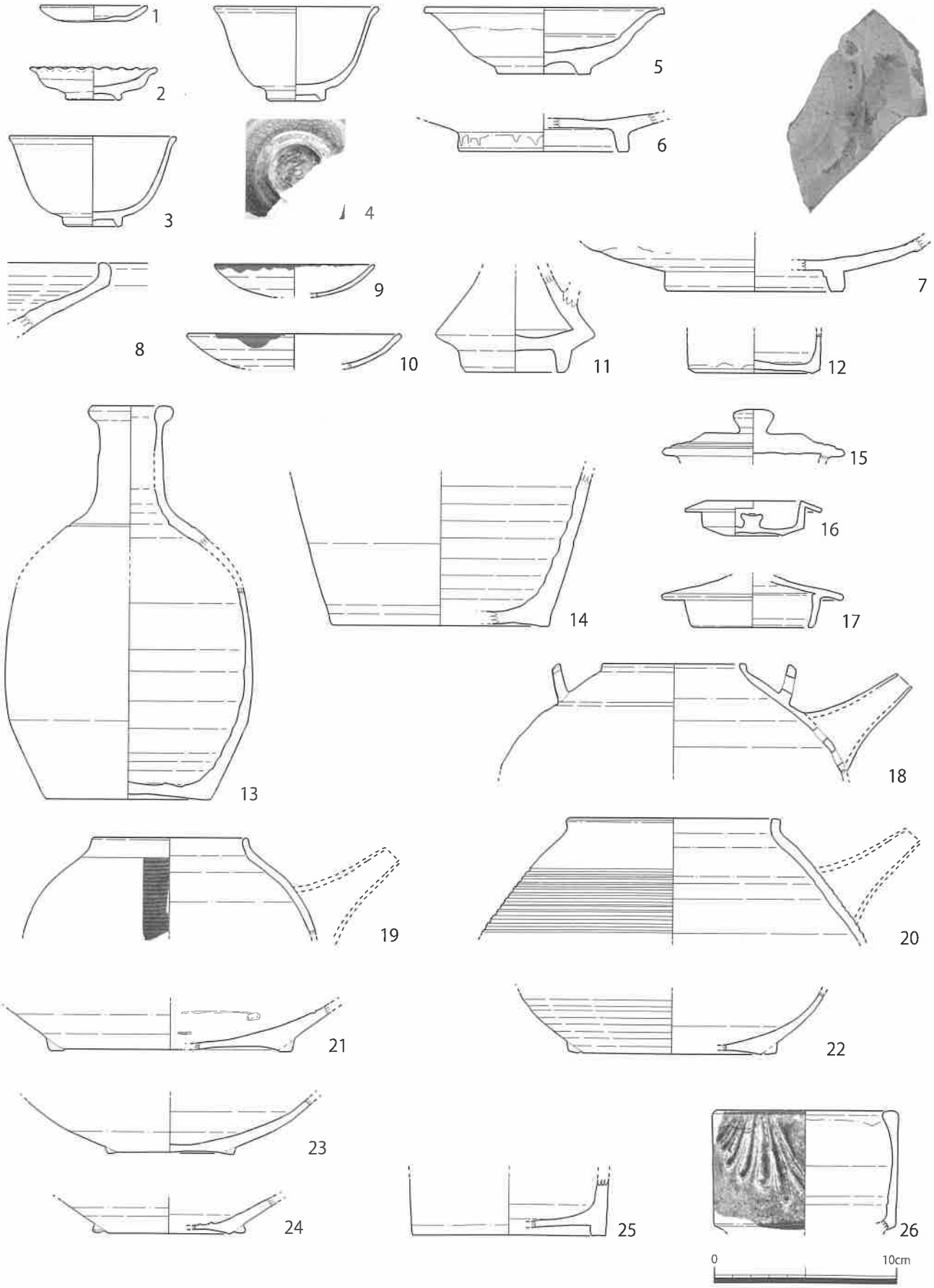
1　北東調査区遺構出土遺物

SK 24（第 18 図～第 26 図、図版 13 ～図版 19）

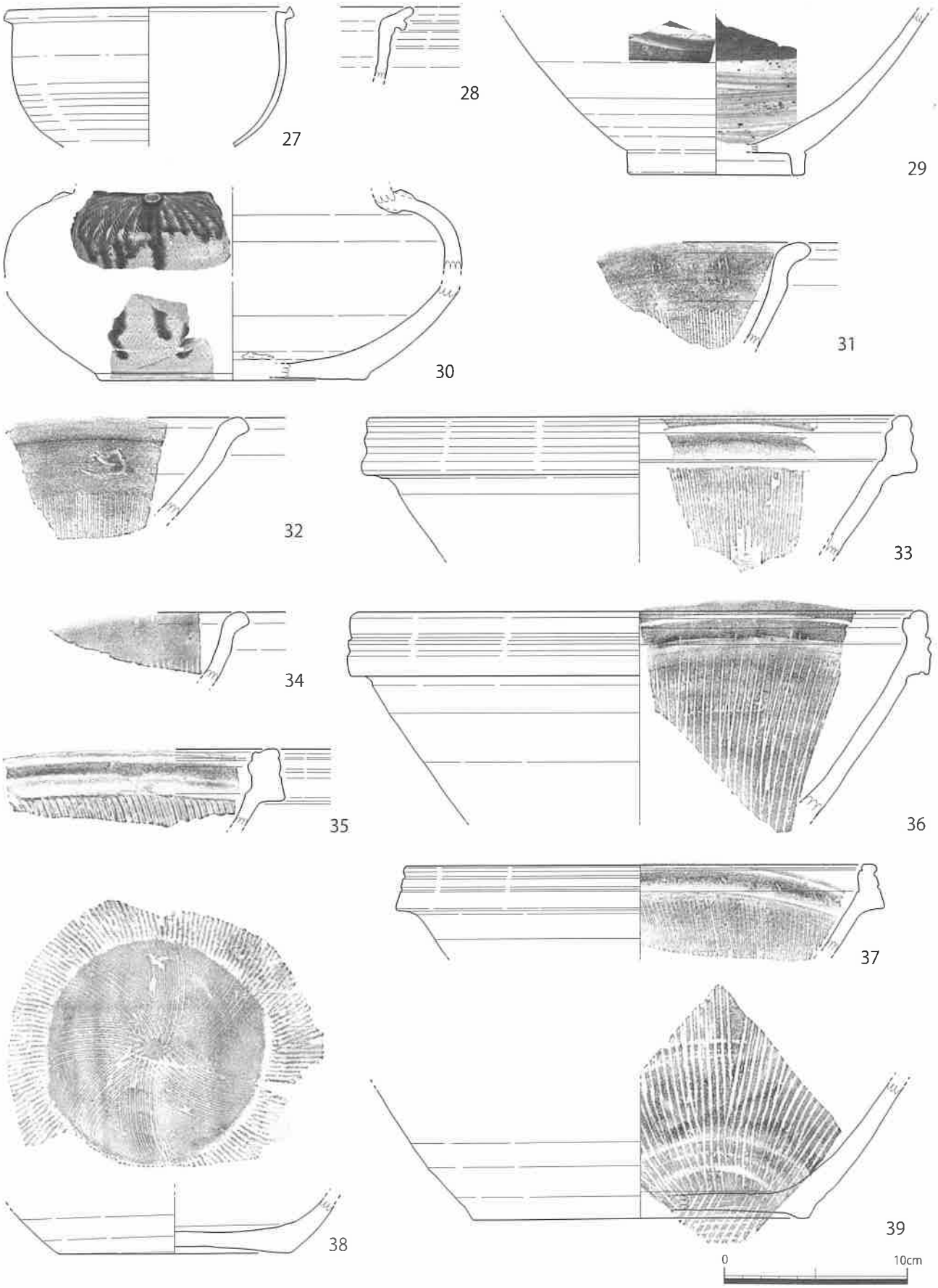
1 と 99 は土師質土器、2 ～ 49 は陶器、50 ～ 98 は磁器、100 ～ 112 は瓦質土器、113 ～ 115 は瓦、116 は石製品である。

1 は土師質土器の皿で、底部は回転糸切り成形かと考えられる。

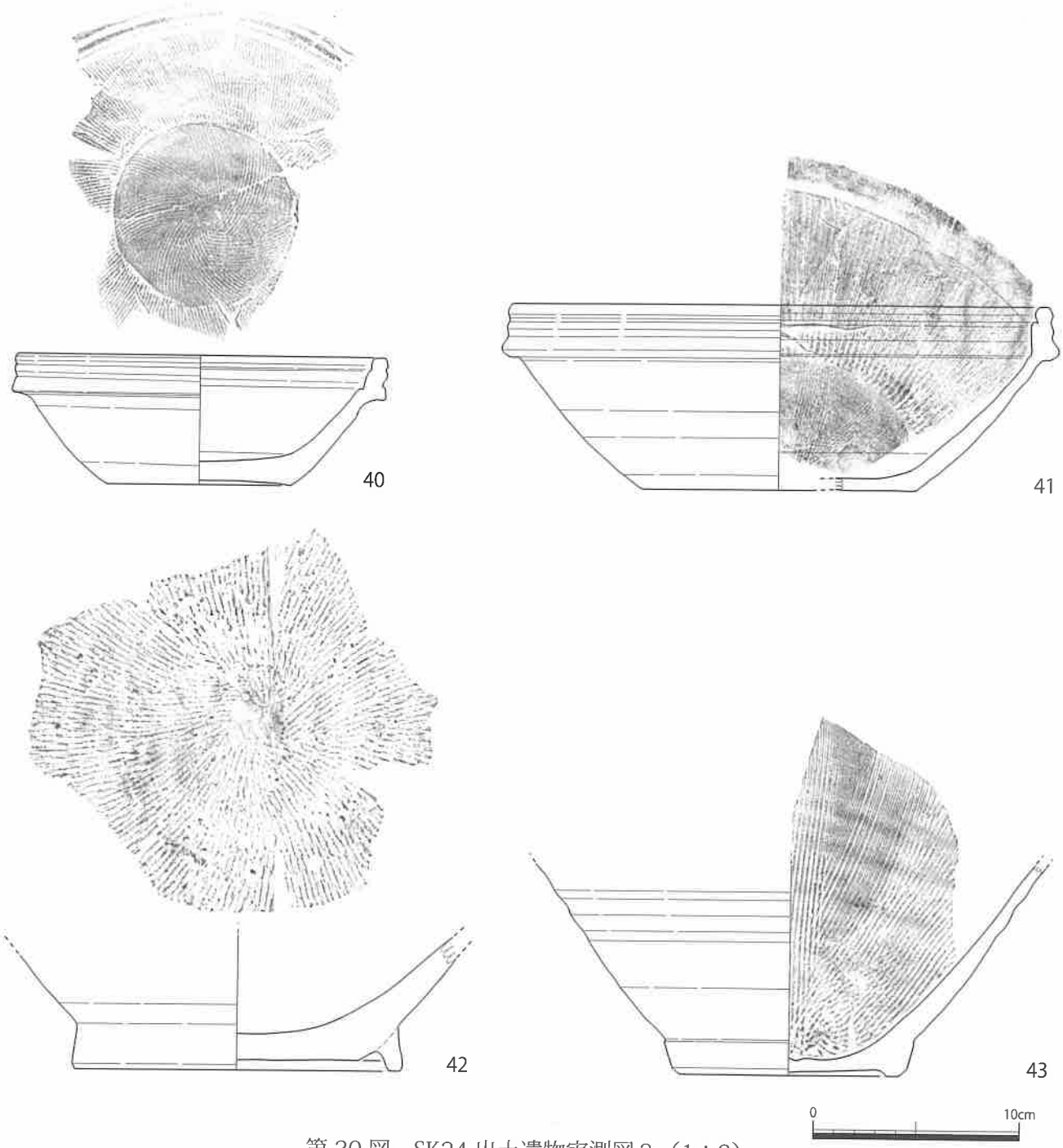
2 は皿で灰釉を施している。貫入が入る。3 は関西系の碗で、灰釉を施している。貫入が入っている。4 は関西系の碗で、灰釉を施している。貫入が入っている。高台内には「恵 (㐂) 市」と墨書きされている。5 は皿で見込みに砂目積み痕が残り、高台内には兜巾がある。透明釉を施している。6 は皿で底部を回転ヘラ削りで丁寧に削っている。鉄釉の上から藁灰釉を施しているが畳付け部分は無釉である。7 は皿で見込みに胎土目痕が残り、藁灰釉の白釉を施している。8 は皿で鉄釉の上に藁灰釉を施している。9 は灯明皿で外面は回転ヘラ削り成形で、内面は回転ナデ調整を行っている。口縁部内外面に煤が付着している。10 は灯明皿で外面は回転ヘラ削り成形で、内面は回転ナデ調整を行っている。口縁部外面に煤が付着している。11 は灯火具 (油差し) で上部と把手が欠失している。鉄釉を施しているが、畳付け部分は無釉である。12 は酒器の銚子で、底部は回転ヘラ削り成形で底部は無釉である。13 は瓶で鉄釉を施している。外底面に胎土目痕が残る。14 は瓶で内面は回転ロクロナデ調整を行っている。15 は壺の蓋かと考えられるもので、2 条の沈線を外面に描き、鉄釉を施している。16 は土瓶の蓋で上面は鉄釉を施し、下面は無釉である。17 は土瓶の蓋で、上部外面は長石釉と透明釉を施し、内面は無釉である。18 は土瓶で体部と注ぎ口の接合部に穿孔が 3 ヶ所ある。鉄釉を施している。19 は土瓶で、口縁内面を除いて透明釉を施している。20 は土瓶で、鉄釉か灰釉を施している。21 は土瓶で内底面に胎土目痕が残る。内面から外面体部下部にかけて透明に近い灰釉を施している。外面体部下部から外底面にかけては無釉で、底面は回転ヘラ削りで成形している。貼付脚がある。22 は土瓶で内面に鉄釉を施している。外面は無釉で、底面は回転ヘラ削りで成形している。貼付脚がある。23 は土瓶で内面から外面体部下部にかけて透明に近い灰釉を施している。外面下半回転ヘラ削りで成形している。貼付脚がある。24 は土瓶で内底面に胎土目痕が残る。内面から外面体部下部にかけて鉄釉を施している。外面下半回転ヘラ削り成形である。貼付脚がある。25 は火入れで、底面は回転ヘラ削りで成形している。外面は底部以外に鉄釉を施し、外面底部から内面にかけては無釉である。26 は香炉で、外面に葉文陰刻を行い、鉄釉を施している。底部は無釉である。27 は土鍋と思われるもので、外面下半は横位のヘラ磨きでそれ以外は回転ナデで調整している。外面には煤が付着している。明赤褐色の発色をする釉薬を施している。28 は甕形の深鉢で、内面は無釉で、外面には白化粧の上に透明釉を施している（ニ彩手）。29 は鉢と考えられるもので、底面を回転ヘラ削りで成形している。内面と外面上半を白化粧の刷毛目文様を施している。30 は火鉢かと思われるもので、体部上端に粘土を貼付し、施文具による斜線文と鋸歯文を施している。内底面には砂目痕が残る。灰釉に緑釉を流している。31 は 10 条 1 単位の擂り目をもつ擂鉢で、擂り目上端を横方向にナデ消している。鉄釉を施している。32 は 11 条 1 単位の擂り目を持つ擂鉢で、褐灰色の鉄釉を施している。33 は 10 条 1 単位の擂り目を持つ擂鉢で、擂り目上端を横方向にナデ消している。色調はにぶい褐色を呈している。34 は 1 単位 6 本以上の擂り目をもつ擂鉢で、鉄泥が強く溶け、灰黄褐色



第 18 図　SK24 出土遺物実測図 1（1：3）

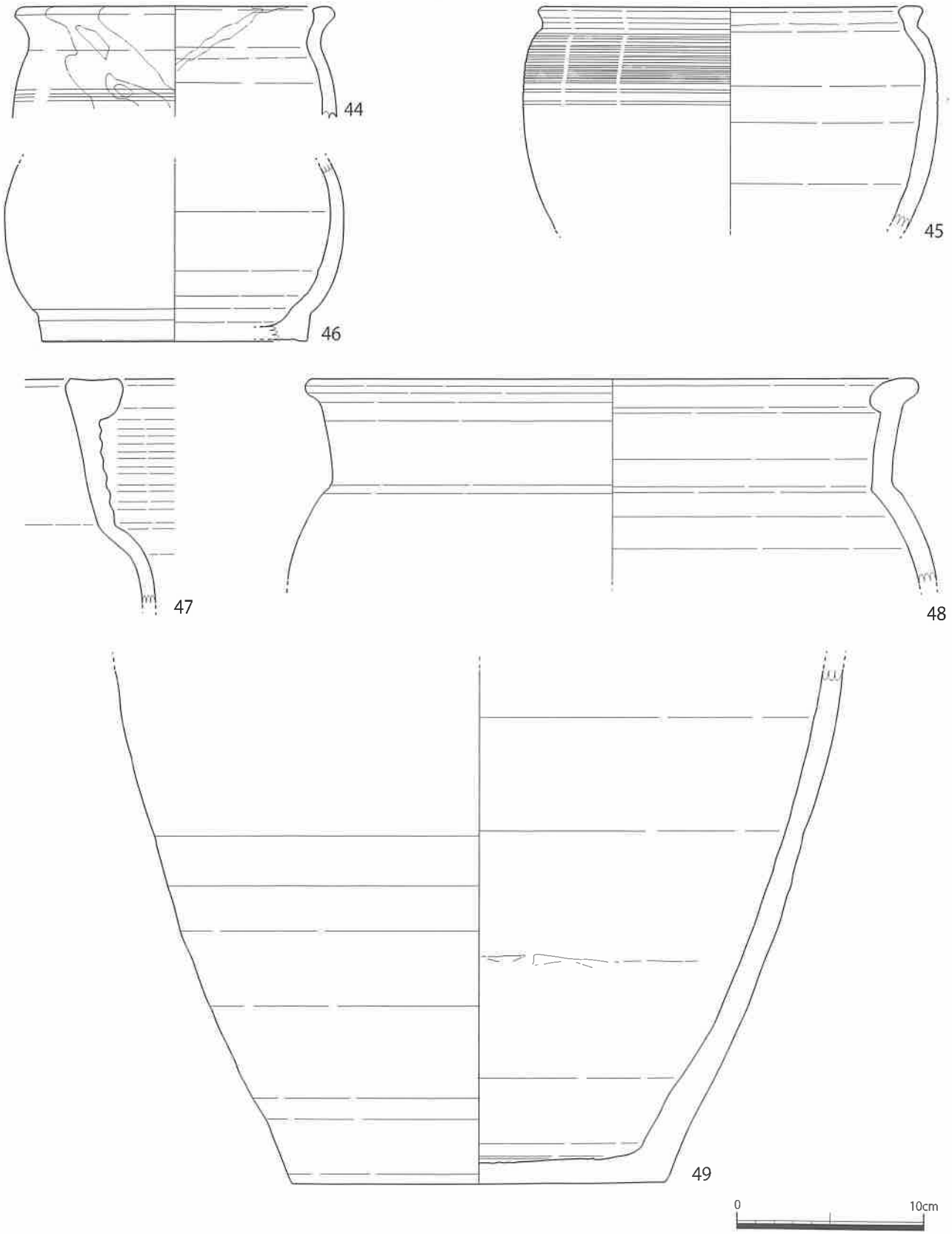


第 19 図　SK24 出土遺物実測図 2（1：3）



第 20 図　SK24 出土遺物実測図 3（1：3）

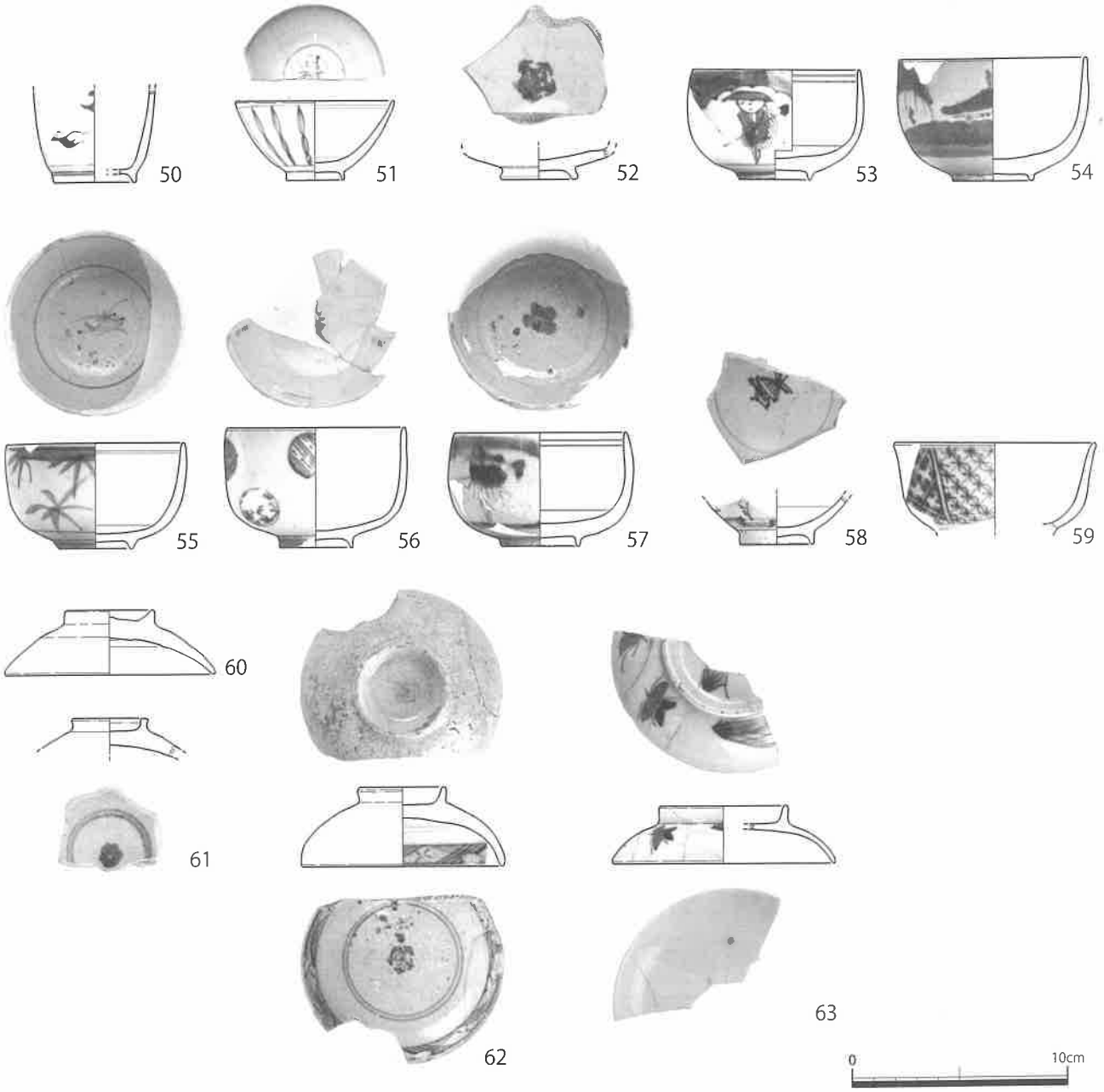
を呈している。35 は 10 条 1 単位の擂り目を持つ擂鉢で、摺り目上端を横方向にナデ消している。色調は外面が褐灰色を、内面はにぶい褐色を呈している。36 は 7 条 1 単位の擂り目を持つ擂鉢で、擂り目上端を横方向にナデている。色調は褐色を呈している。37 は 11 条 1 単位の擂り目を持つ擂鉢で、明赤褐色を呈している。38 は 11 条 1 単位の擂り目を持つ擂鉢で、内底部に 7 本の放射状の摺り目をもつ。外面下方底部付近はヘラ削りを施し、明赤褐色を呈する。39 は 7 条 1 単位の擂り目を持つ擂鉢で、見込みは擂り目の配置が三角形となるか。色調はにぶい赤褐色を呈している。



第 21 図　SK24 出土遺物実測図 4（1：3）

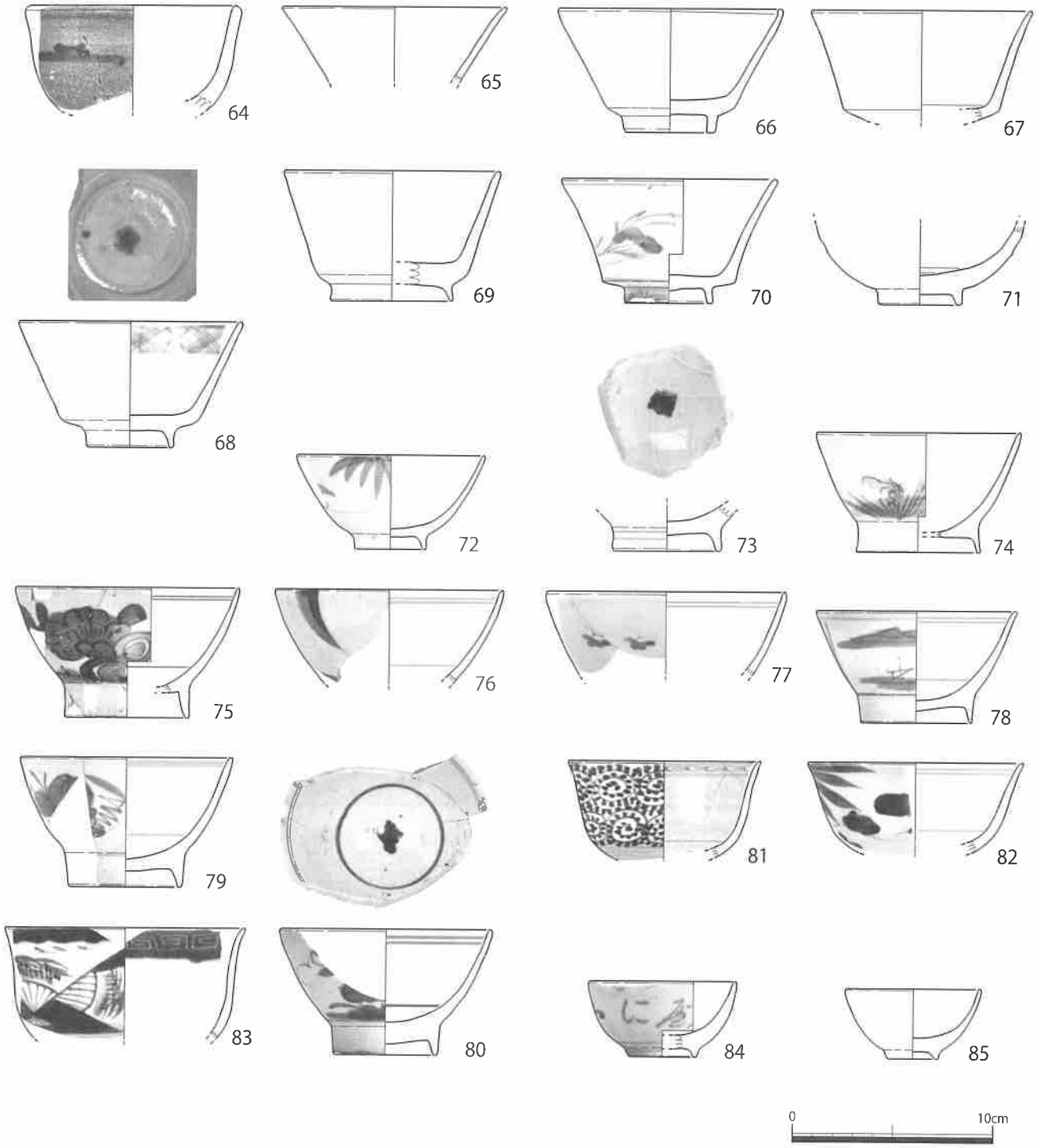
40は15条1単位の擂り目を持つ擂鉢で、内底面に12条1単位の放射状の擂り目を施している。色調は暗赤褐色を呈している。41は10条1単位の擂り目を持つ擂鉢で、内底面に8条1単位の放射状の擂り目を施している。外面はヘラ削り成形で、色調は明赤褐色を呈する。42は擂り目の単位が判別しにくい擂鉢で、高台を貼付して成形している。灰褐色の鉄釉を施している。43は19条1単位の擂り目を持つ擂鉢で、外下半部はヘラ削り成形で、高台は削り出している。褐色の鉄釉を施している。44は壺で、外面に2条の横方向の沈線を、内面は回転ナデで調整を施している。口縁内部から外面にかけて鉄釉の上に藁灰釉を施している。45は甕で、外面にヘラ書き沈線を施し、内面は回転ロクロナデ調整を行っている。鉄漿をかけて焼成している。46は壺で鉄釉を施している。47は甕で、口縁外面は貼り付けている。48は甕で鉄釉を施している。49は甕で、外面下部にヘラ削りを、内面にヨコナデを、内底面に格子タタキを施している。また、釉薬は鉄釉を施している。

50は肥前染付の小碗で、外面に草花文を描いている。51は肥前系染付の小碗で、外面に草文を描いている。52は肥前系染付の筒形の小碗で、見込みに五花弁文のコンニャク印判を施している。呉須の発色は悪い。53は肥前系染付の小碗で、外面に草花文と孟宗筍掘り人物文、見込みに筆書きで五弁花文を描いている。54は肥前系染付の小碗で、外面に風景画を描いている。55は肥前系染付の小碗で、外面に草文を表し、見込みには昆虫文を描いている。貫入が入っている。56は肥前系染付の小碗で、外面に丸文を表し、見込みには模様がある。57は肥前系染付の小碗で、外面に孟宗筍掘り人物文を描き、見込みに五花弁文のコンニャク印判を施している。貫入が入っている。58は肥前系染付の小碗で、見込みに昆虫文を描いている。59は肥前系染付の小碗で、外面に格子文を描いている。貫入が入っている。60は肥前白磁の碗蓋で、内面見込みに蛇の目釉剥ぎを施している。61は肥前青磁染付の碗蓋で、内面見込みに五花弁のコンニャク印判を施している。62は肥前青磁染付の碗蓋で内面に四方襷文を、高台内に角福文を描いている。63は肥前染付の広東碗の蓋で、外面に蝶と植物文を描いている。64は陶胎染付の碗で、胎土は灰色で透明釉を施している。全体的に貫入が入っている。65は肥前白磁の碗である。66は肥前白磁の朝顔形碗である。67は肥前白磁の碗である。68は肥前青磁染付の朝顔形碗で、内面に四方襷を、見込みにコンニャク印判を施している。69は肥前系白磁である。70は肥前染付の碗で、外面に草花文を描いている。71は肥前系の碗で、見込みに蛇の目釉剥ぎを施し、外面には褐釉を施している。72は肥前系染付の碗で、外面に植物文を描いている。73は肥前系染付の碗で、見込みにつぶれた五花弁文のコンニャク印判を施している。74は肥前染付の広東碗で、外面に草花文を描いている。見込みには一部模様がある。75は肥前系の広東碗で、外面に牡丹・太湖石文を描いている。貫入が入っている。76は肥前系染付の広東碗で、外面に草文を描いている。77は肥前系染付の碗で、外面に蝶文を描いている。78は肥前系染付の広東碗で、外面に風景画を、見込みに崩れた花文を描いている。79は肥前系染付の広東碗で、外面に花文を、見込みには模様あり。80は肥前系の広東碗で、外面に植物文を描いている。見込みに手書きで「寿」と書いているか。81は肥前系染付の碗で、外面に蛸唐草文を、内面に連続渦巻文を描いている。貫入が入っている。82は肥前系染付の端反碗で、外面に草花文を描いている。83は肥前系染付の端反碗で、外面に扇文、内面に雷文を描いている。84は肥前染付の紅猪口で、外面に左から右に「大阪新町お笹べに」と書いているものと考えられる。85は肥前白磁の紅猪口である。86は肥前染付の変形小皿で、型打ち成形で、底部は糸切細工で作っている。87は肥前波佐見系の皿で、見込みに蛇の目釉剥ぎを施している。88は肥前波佐見系の皿で、見込みに蛇の目釉剥ぎを



第 22 図　SK22 出土遺物実測図 5（1：3）

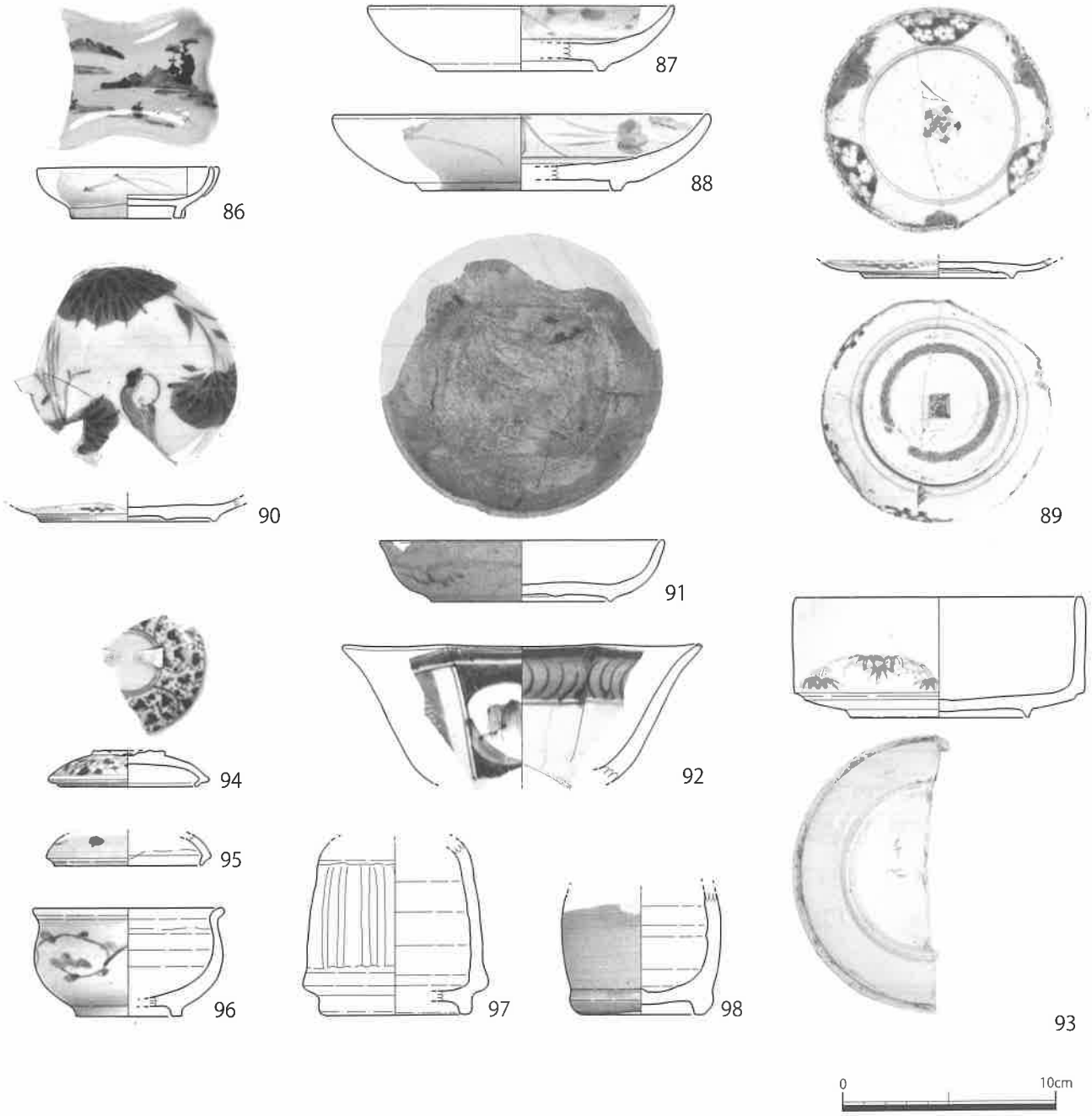
施している。89 は肥前系染付の皿で、外面に唐草文を、内面には草花文と五弁花文を描き、高台内に銘款として角福と記されている。残存端部に補修痕がある。また、外底面に窯道具痕が残る。表面に黒点が付着していることから、焼成時に焼き過ぎであることがわかる。90 は肥前系染付（肥前の可能性高い）の皿で、外面に唐草文？を、見込みに人物と竹笹の文様を描いている。高台は蛇の目凹型高台となっている。91 は肥前系染付の皿で、外面に唐草文を、見込みは菖蒲もしくは水仙を描いている。高台は蛇の目凹形高台である。著しい焼成不良。92 は肥前染付の角鉢（八角）で、外面に文字「壽」と柳を描いている。93 は肥前染付の段重で、外面に草花文を描いている。見込みには砂目痕がある。全体的に補修痕がある。高台内に符号として「千七」と釉薬で記載している。94 は肥前系染付の蓋で、外面に唐草文を描いている。内面に貫入



第 23 図　SK24 出土遺物実測図 6（1：3）

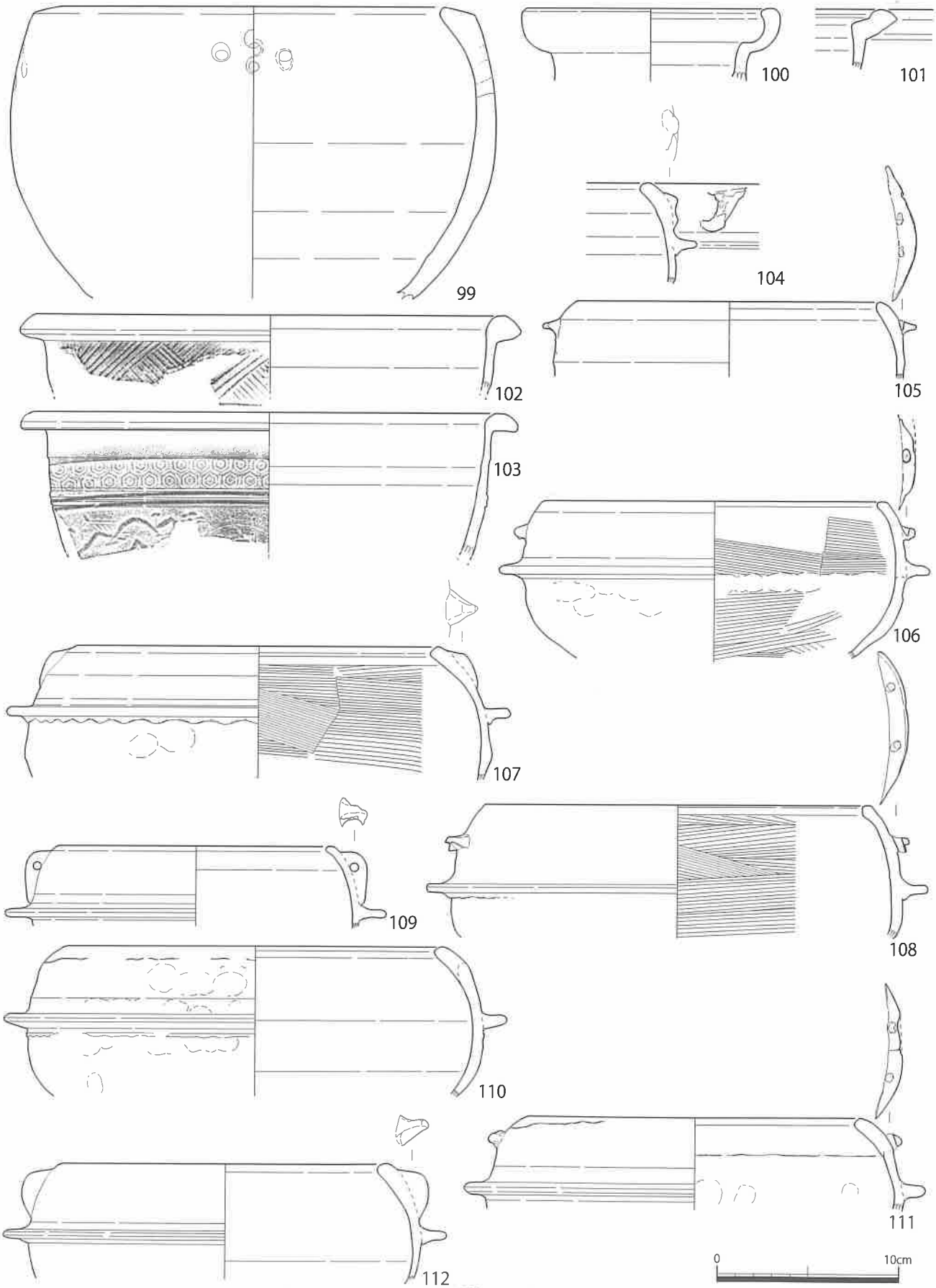
あり。上部のつまみ部分は欠損している。95 は肥前染付の蓋で、外面に草花文を描いている。96 は肥前系染付の火入で、外面に草花文を描いている。97 は肥前青磁の瓶である。98 は肥前青磁（波佐見辺り）の花瓶で、外面と高台内には横方向の櫛目文様を施している。

99 は火鉢で、上部に 3 孔以上の穴がある。内面下半は板状工具によるヨコナデ、内面上半から外面は回転ナデを施している。

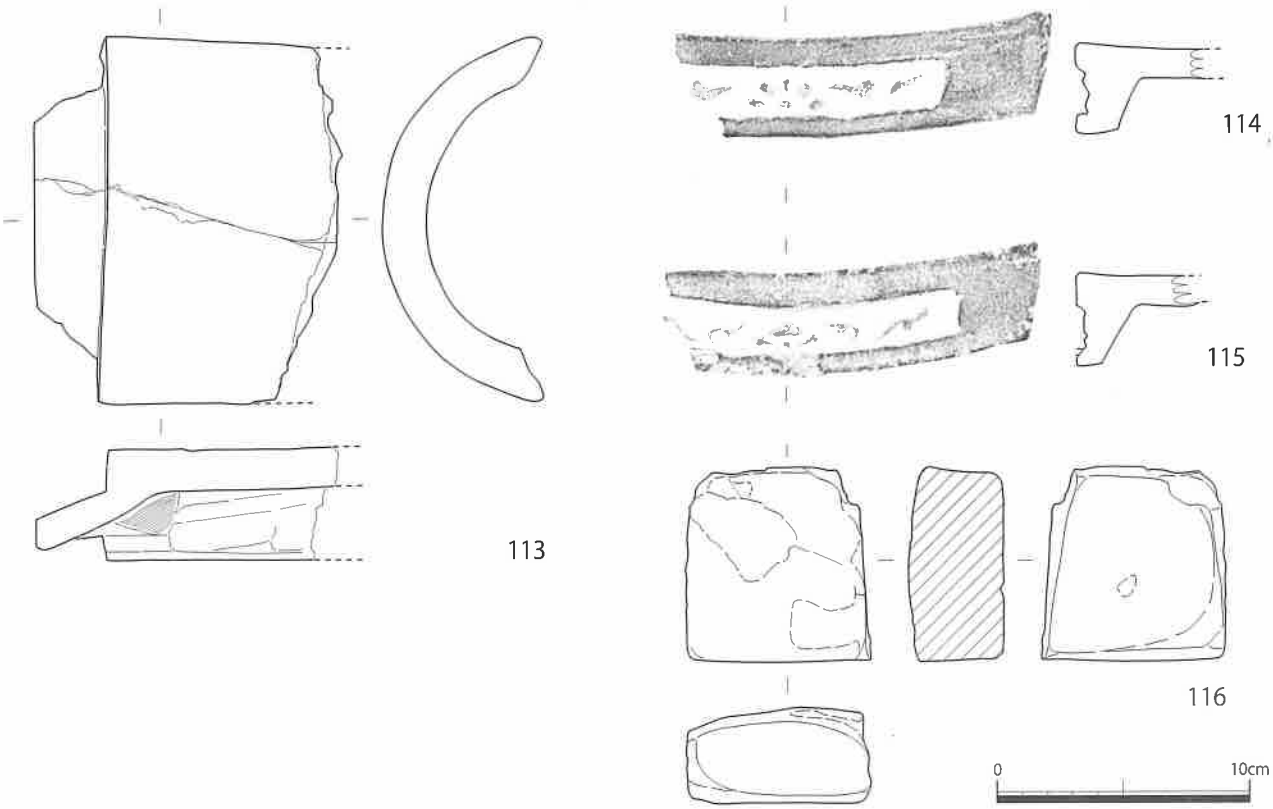


第 24 図　SK24 出土遺物実測図 7（1：3）

100 は鉢かと思われるもので、ヨコナデを施している。101 は火鉢かと思われるもので、内外面共に横位の磨きを施している。102 は火鉢で、外面に型による模様がある。103 は火鉢かと思われるもので、型による押し出しで、亀甲文と風景文（建物・松・橋）を表している。104 は釜で、鍔と口縁部の間に縦方向に耳を貼付けている。内面はヨコナデを施している。105 は釜で、鍔と口縁部の間に縦方向に未貫通の横長の耳を貼り付けている。内外面共にヨコナデを施している。106 は釜で、鍔と口縁部の間に縦方向の穴（未貫通）をもつ耳を貼り付けている。鍔の下に指頭圧痕が残り、内面は横位の刷毛目痕が残る。107 は釜で、口縁外面に縦方向に耳を貼り付けている。鍔の下に指頭圧痕が残り、内面は横位の刷毛目痕が残る。108 は釜で、



第 25 図　SK24 出土遺物実測図 8（1：3）



第 26 図　SK24 出土遺物実測図 9（1：3）

鍔と口縁部の間に縦方向に貫通した横長の耳を貼り付けている。外面はヨコナデを、内面は刷毛目痕が残る。109 は釜で、鍔と口縁部の間に横方向に貫通した穴をもつ耳を貼り付けている。内面はヨコナデを施している。110 は釜で、鍔の上下に指頭圧痕が残る。口縁部と内面はヨコナデを施している。111 は釜で、鍔と口縁部の間に縦方向に貫通した横長の耳を貼り付けている。内面にヨコナデを施している。112 は釜で、鍔と口縁部の間に縦方向に耳を貼り付けている。内面にヨコナデを施している。

113 は丸瓦で、内面に縄目とタタキ痕が残る。114 は軒平瓦で、文様は五弁の半菊文である。115 は軒平瓦で、文様は半円の三方に達磨状と雲状の花弁を配している。

116 は細粒珪長岩の砥石で、研面は 3 面ある。

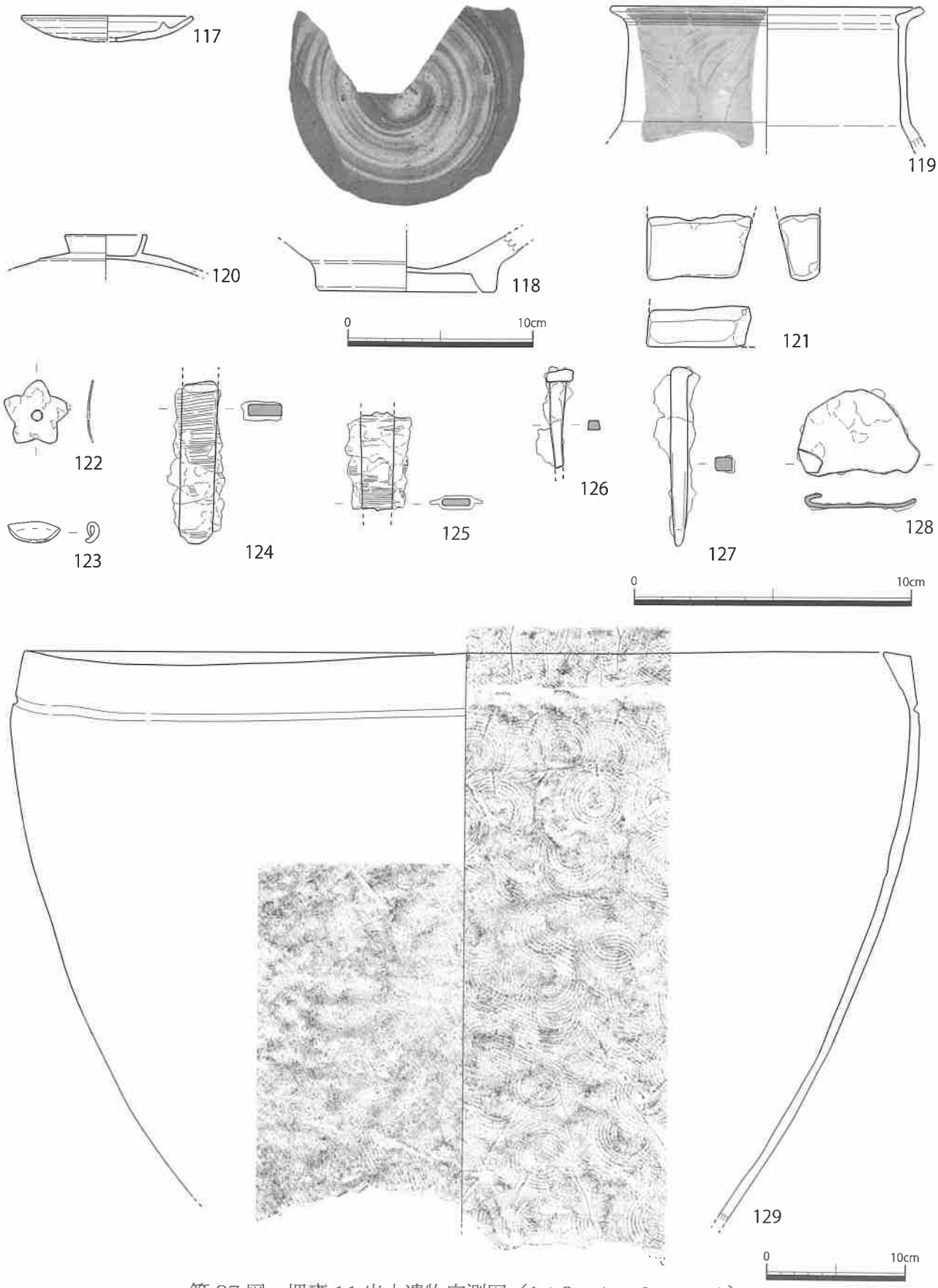
埋甕 11（第 27 図、図版 19）

117 と 118 は陶器、119 と 120 は磁器、121 は石製品、122 ～ 128 は金属製品、129 は土師質土器である。

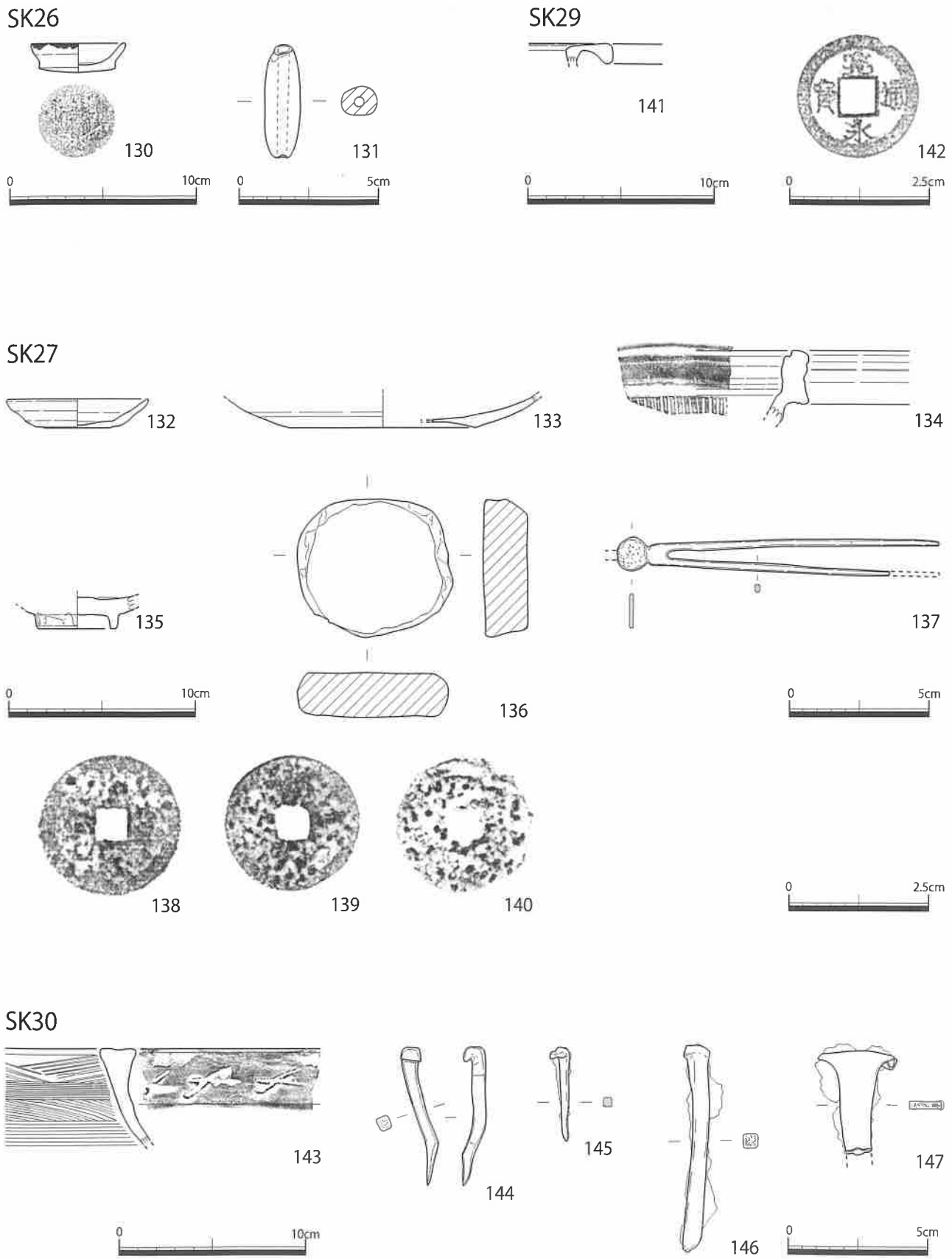
117 は陶器の灯明皿で、外面は回転ヘラ削りを、内面はヨコナデと不定方向のナデを施している。118 は肥前の片口鉢の可能性高いもので、外面は回転ヘラ削りを、内面は白土を使用した刷毛目模様である。119 は肥前青磁の香炉かと思われるもので、外面はヘラ彫りで文様を表している。内面は轆轤ナデの痕跡が残る。120 は磁器の鍋蓋で、灰釉を施している。

121 は細粒珪長岩の砥石で、研面は 3 ～ 4 面ある。

122 は飾り金具で、形状は五弁の花形で、中央を穿孔している。123 は釘や鋲の頭部を覆う飾り金具か。



第 27 図　埋甕 11 出土遺物実測図（1：3，1：2，1：4）



第 28 図　SK26・SK27・SK29・SK30 出土遺物実測図（1：3，1：2，1：1）

124 と 125 は鎹で、横方向の木質が付着している。126 は鉄釘で、頭部は折り曲げにより一体整形している。127 は鉄釘で、断面方形である。128 は鉄板で、圭状の鉄板の片方を折り曲げている。

129 は土師質土器の大甕で、外面には 1 条の横方向の沈線と斜め方向の刷毛目が、内面には円形工具によるタタキ痕が残る。また、口縁部外面には横方向のナデ、内面にはタタキ後に斜方向の刷毛目を施した痕跡が残っている。

2　南調査区遺構出土遺物

SK26（第 28 図、図版 20）

130 は土師質土器皿で、底面を回転ヘラ切りで成形していると思われる。口縁外面に煤が付着していることから灯明皿に使用されたものであろう。131 は土錘である。

SK27（第 28 図、図版 20）

132 は土師質土器皿で、底面は不明瞭だが、回転糸切りかと思われる。133 は土瓶で、鉄釉を内面から外面体部下部にかけて施している。134 は関西系の擂鉢で、7 条 1 単位の擂り目で、擂り目上端を横方向にナデ消している。色調はにぶい赤褐色を呈している。135 は肥前青磁の碗で、内底面に蛇の目釉剥ぎを施している。136 は円盤状土製品で、平瓦の破片を円盤状に打ち欠いている。137 は銅製の笄である。138 から 140 は銭種判読不明な古銭である。

SK29（第 28 図、図版 20）

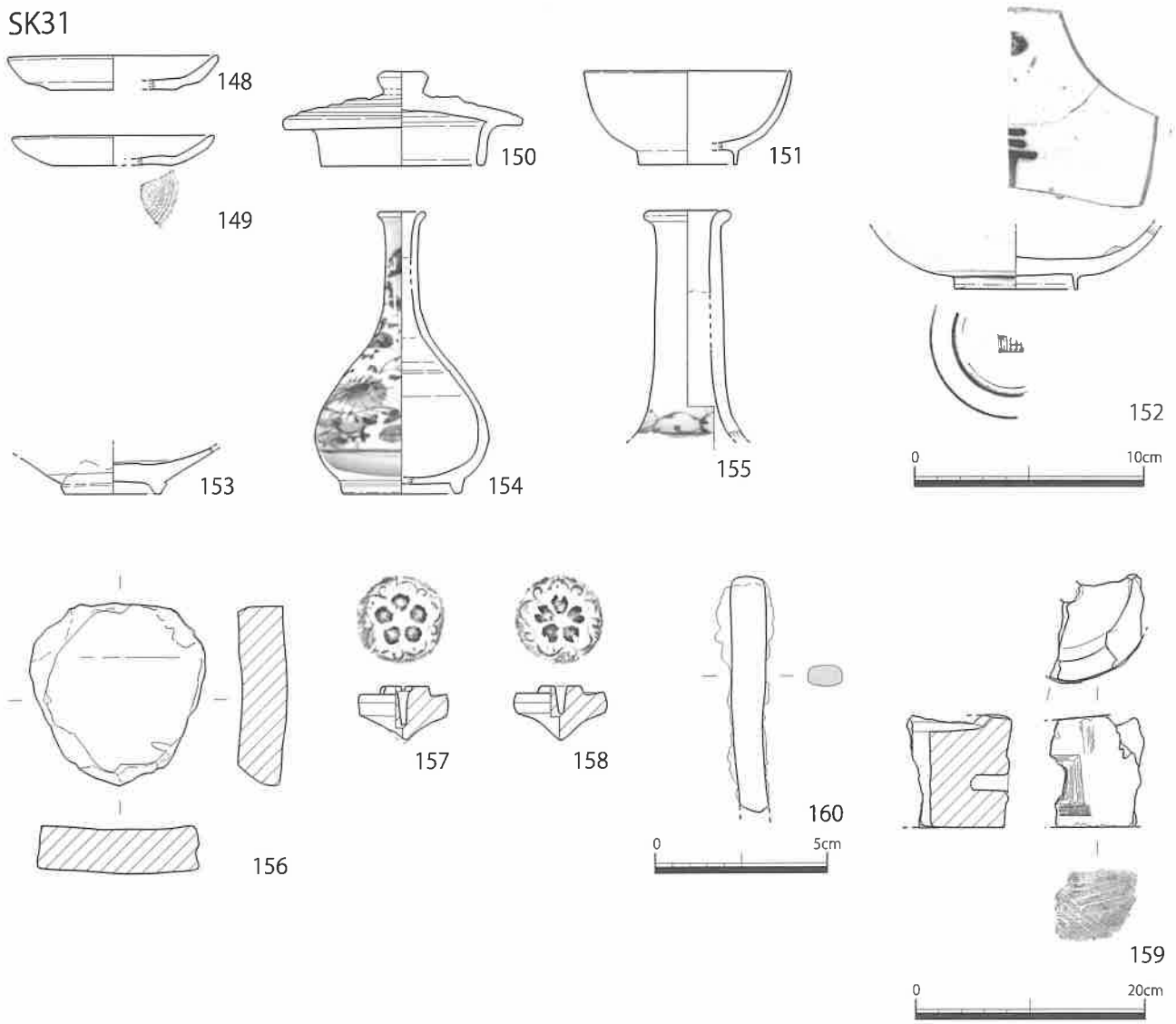
141 は瓦質土器鍋で、口縁部上面に刷毛目を施している。142 は寛永通寳で、裏面には「足」の文字あり。

SK30（第 28 図、図版 20）

143 は土師質土器の甕で、口縁部外面に×印のヘラ書きを横に連続して施している。内面は横位の刷毛目を、外面には刷毛目の後に、ヨコナデを施している。144 は銅釘で、頭部を折り曲げている。145 は鉄釘で、頭部は折り曲げている。146 は鉄釘であろうか。頭部は折り曲げか。147 は不明鉄製品で、端がバチ状に開き、丸められている。

SK31（第 29 図、図版 20）

148 と 149 は土師質土器の皿で、底面は回転糸切り未調整である。150 は土瓶の蓋で、上面のみに鉄釉を施している。151 は肥前系白磁の碗である。152 は肥前系染付の碗で、見込みに「寿」と思われる文字を、高台内に銘款として「福」字を書いている。内部に胎土目積みの痕跡が残る。153 は肥前波佐見系染付の皿で、見込みに蛇ノ目釉剥ぎを施している。154 は肥前系染付の瓶で、頸部下端に花文を描いている。155 は肥前染付の瓶で、外面に菊文？を描いている。156 は円盤状土製品で、備前焼甕の破片を円盤状に打ち欠いている。157 は土製独楽で、上面に梅に唐草文を型作りで表している。上部と下部の 2 つの型に粘土を入れて成型している。158 は土製独楽で、上面に桜に唐草文を型作りで表している。上部と下部の 2 つの型に粘土を入れて成型している。159 は茶臼の上臼で、横打穴がみられる。160 は不明鉄製品である。



第 29 図　SK31 出土遺物実測図（1：3，1：2，1：6）

SK32（第 30 図、図版 21）

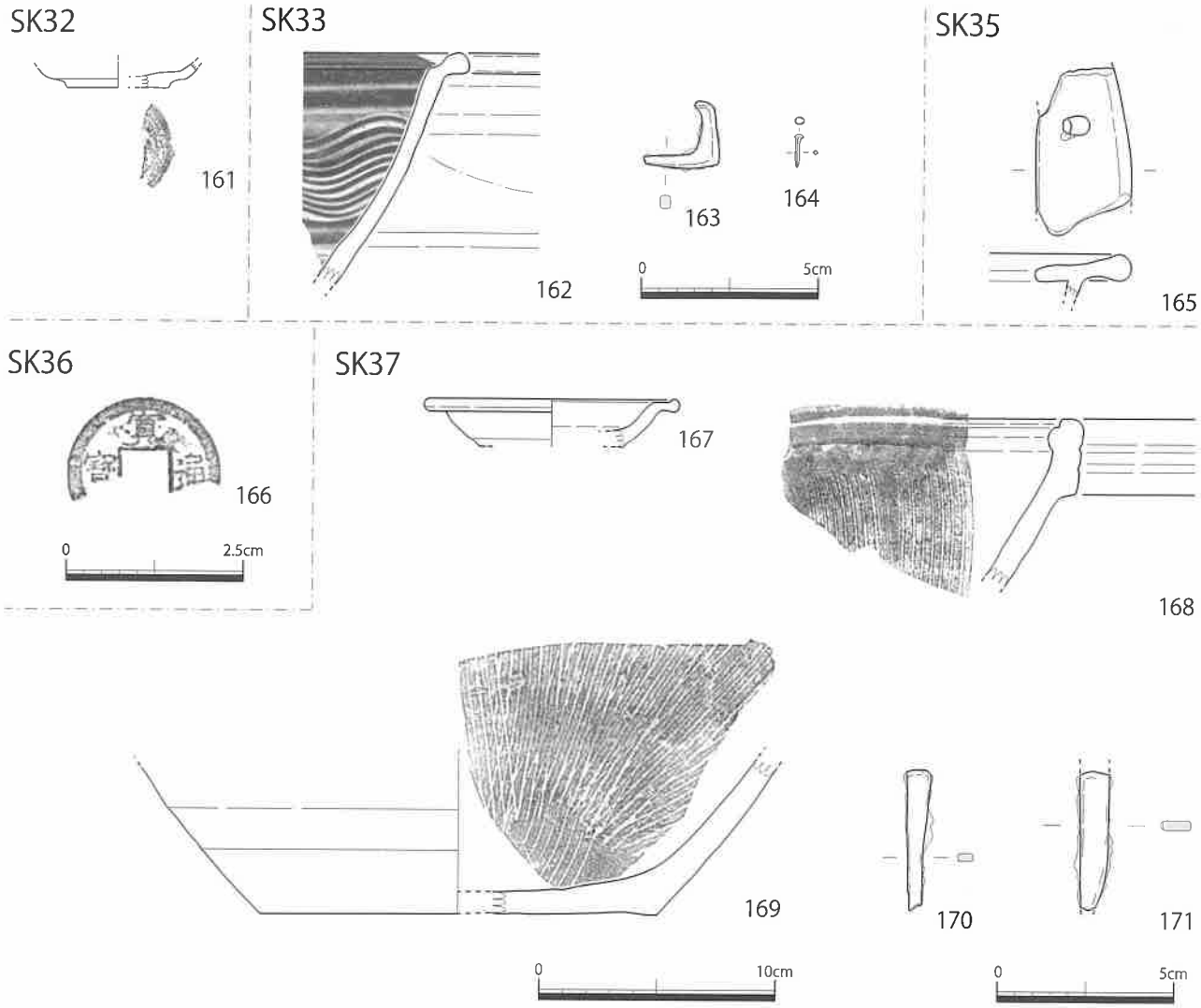
101 は土師質土器の皿で、底面は回転ヘラ切り未調整と思われる。

SK33（第 30 図、図版 21）

162 は肥前陶器の鉢で、内面に白土に鉄釉で刷毛目模様を描いている。163 は鉄釘で、頭部は折り曲げてあり、L 字状に曲がっている。164 は銅製の鋲である。

SK35（第 30 図、図版 21）

165 は瓦質土器の鍋で、口縁部のみの残存である。上面から体部内側に向けて穿孔を施している。



第 30 図　SK32・SK33・SK35・SK36・SK37 出土遺物実測図（1：3，1：2，1：1）

SK36（第 30 図、図版 21）

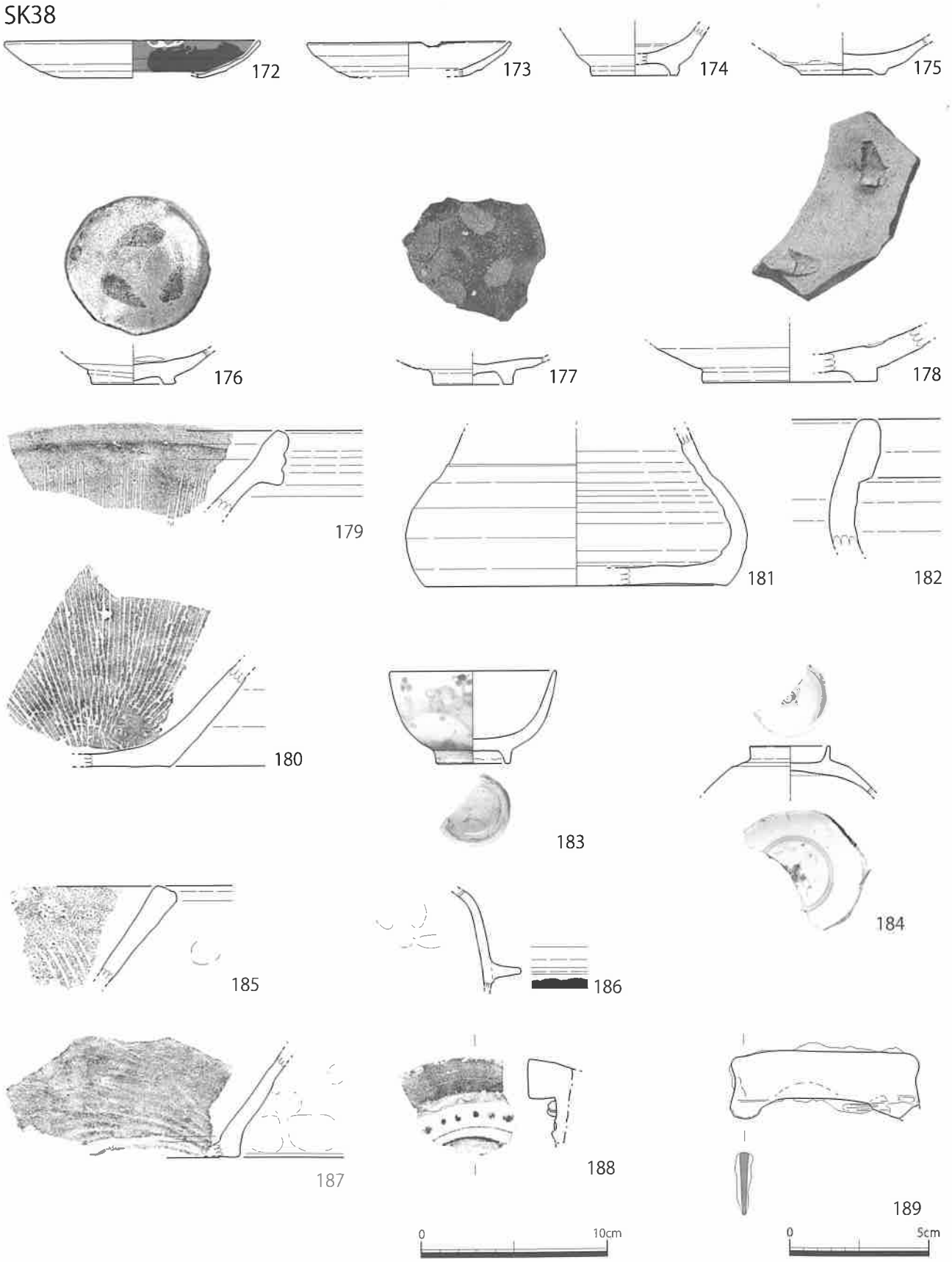
166 は寛永通寶である。

SK37（第 30 図、図版 21）

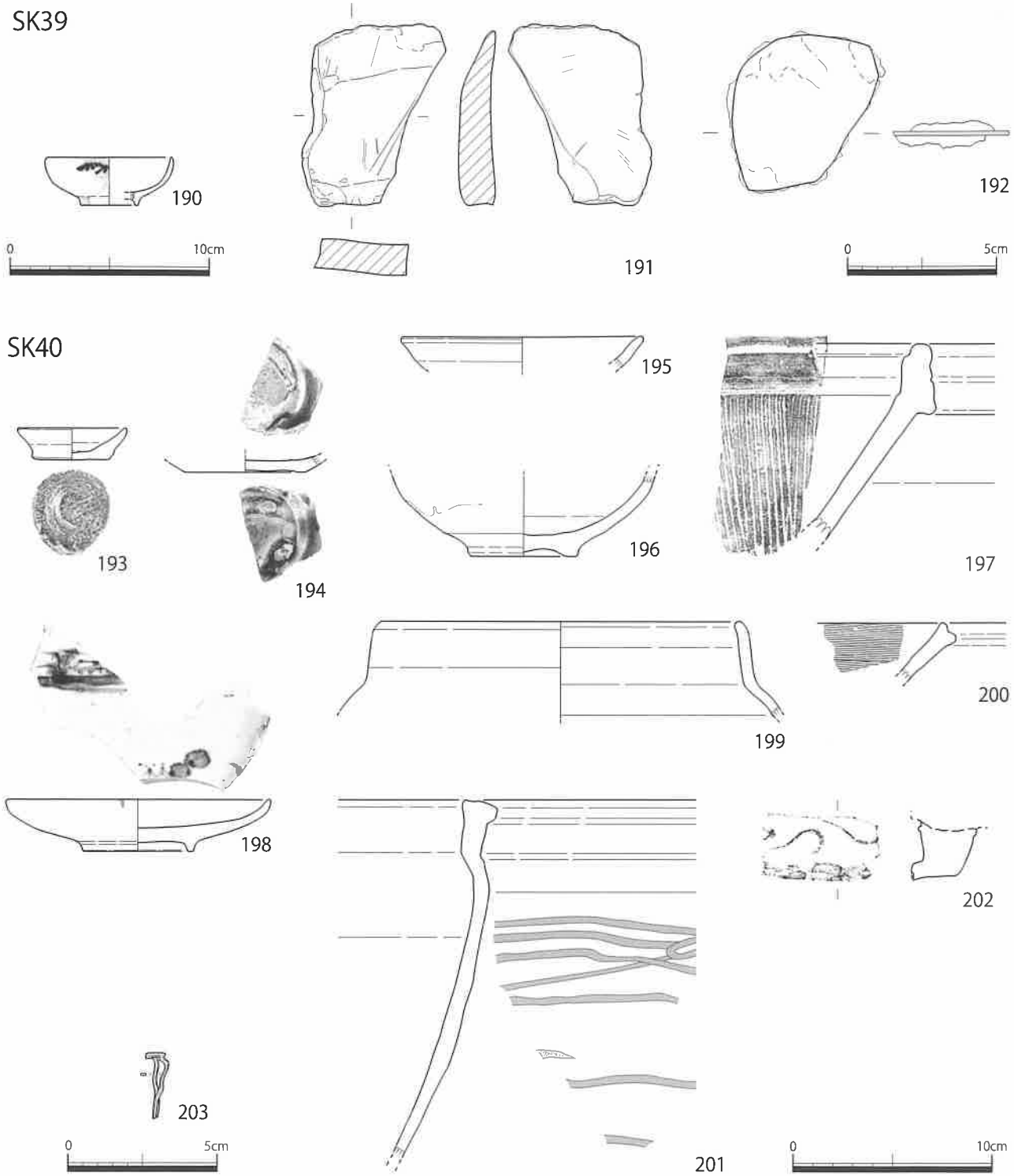
167 は瀬戸美濃の丸皿で、灰釉を施している。168 は関西系の擂鉢で、8 条 1 単位の擂り目で、擂り目上端を横方向にナデ消している。色調はにぶい赤褐色を呈している。169 は関西系の擂鉢で、8 条 1 単位の擂り目で、見込みは擂り目の配置が三角形となるか。色調はにぶい赤褐色を呈している。170 は針状鉄製品で、網などをつくろう針かと思われる。171 は鎹か。

SK38（第 31 図、図版 21・22）

172 と 173 は土師質土器、174 ～ 182 は陶器、183 と 184 は磁器、185 ～ 187 は瓦質土器、188 は瓦、189 は鉄製品である。



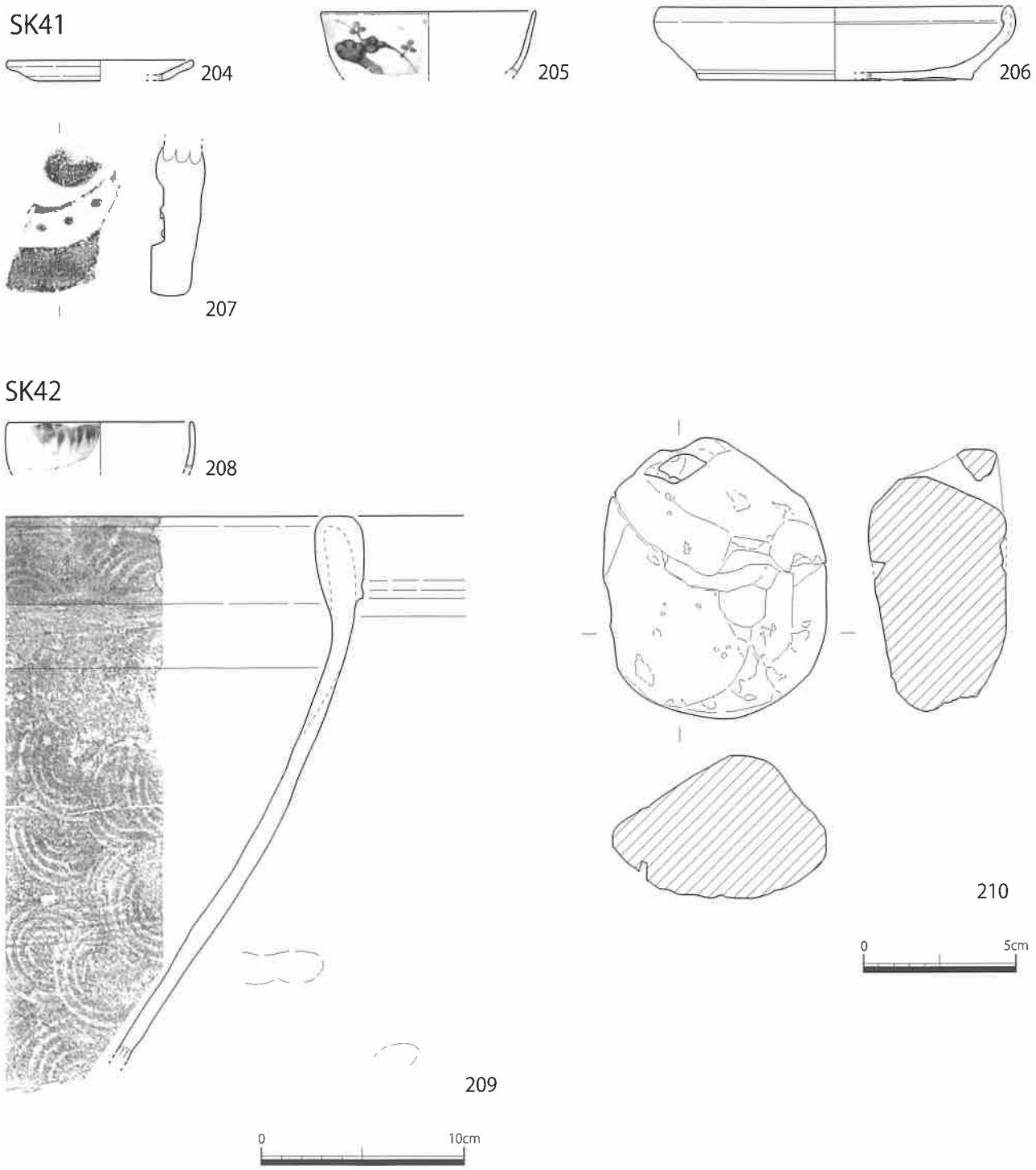
第 31 図　SK38 出土遺物実測図（1：3，1：2）



第 32 図　SK39・SK40 出土遺物実測図（1：3，1：2）

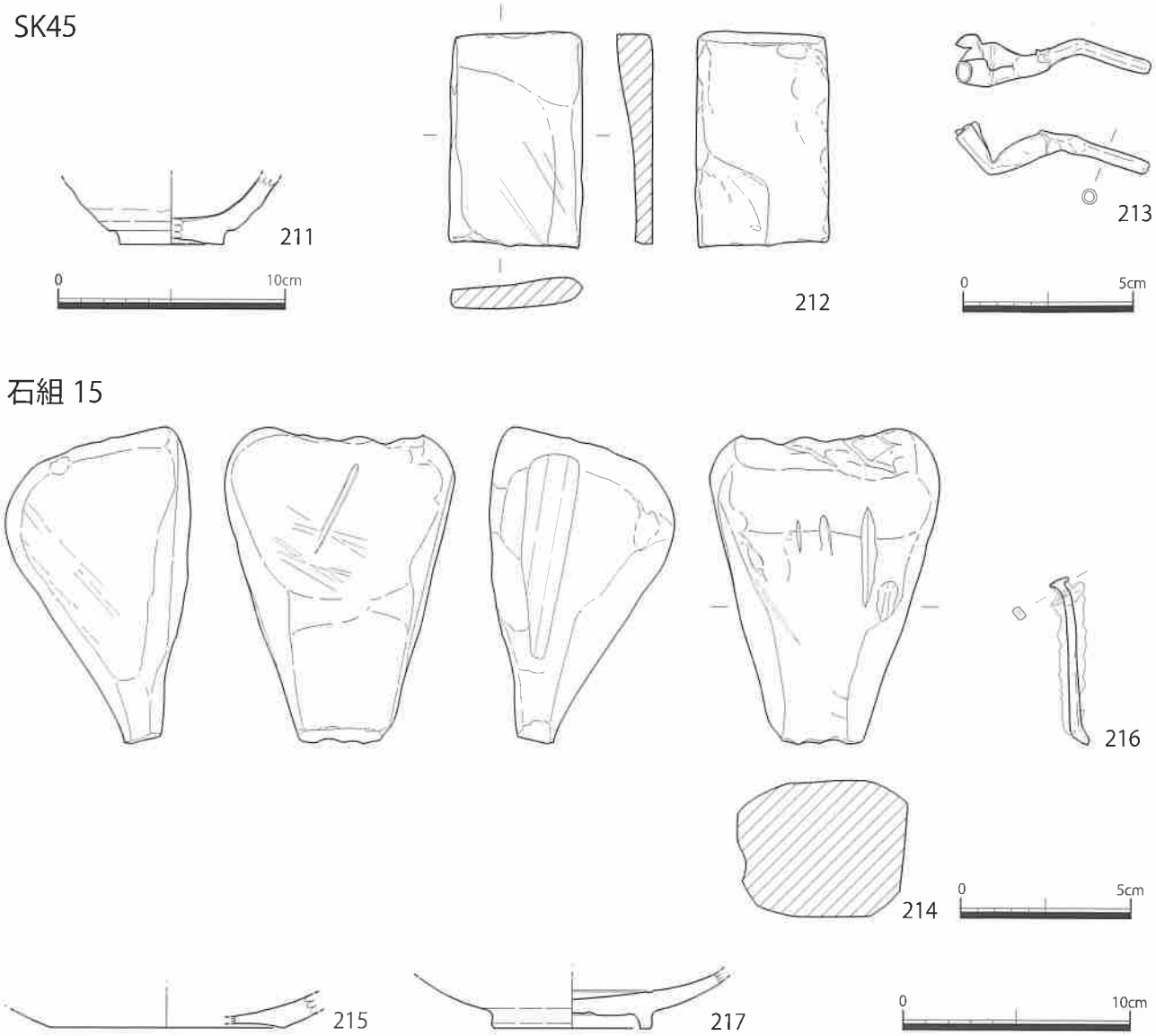
172 は土師質土器皿で、内面には油分が付着し、芯の痕跡が残っていることから、灯明皿として使用されたものである。173 は土師質土器皿で、口縁部内面に煤が付着している。灯明皿として使用されたものである。

174 は肥前の碗で外面下半を回転ヘラ削りで成形している。内面は透明釉を施している。175 は肥前の皿で、外面底部は回転ヘラ削りで成形している。高台内には兜巾がわずかに残る。内面から外面底部高台直上



第 33 図　SK41・SK42 出土遺物実測図（1：3，1：2）

まで透明釉を施しているものと思われる。176 は肥前の皿で、体部下半から底部を回転ヘラ削りで成形し、高台内に兜巾が残る。内面には透明釉を施し、砂目積みの痕跡が残る。177 は肥前の皿で、外面は高台直上から高台内にかけて回転ヘラ削りを施している。高台内に兜巾が残る。高台直上から内面にかけて鉄釉を施し、内面には砂目積みの痕跡が残る。178 は肥前の皿で、外面は回転ヘラ削りで成形している。内面には透明釉を施し、胎土目の痕跡が残っている。179 は備前焼の擂鉢で、8 条 1 単位の擂り目を持つ。色調は赤褐



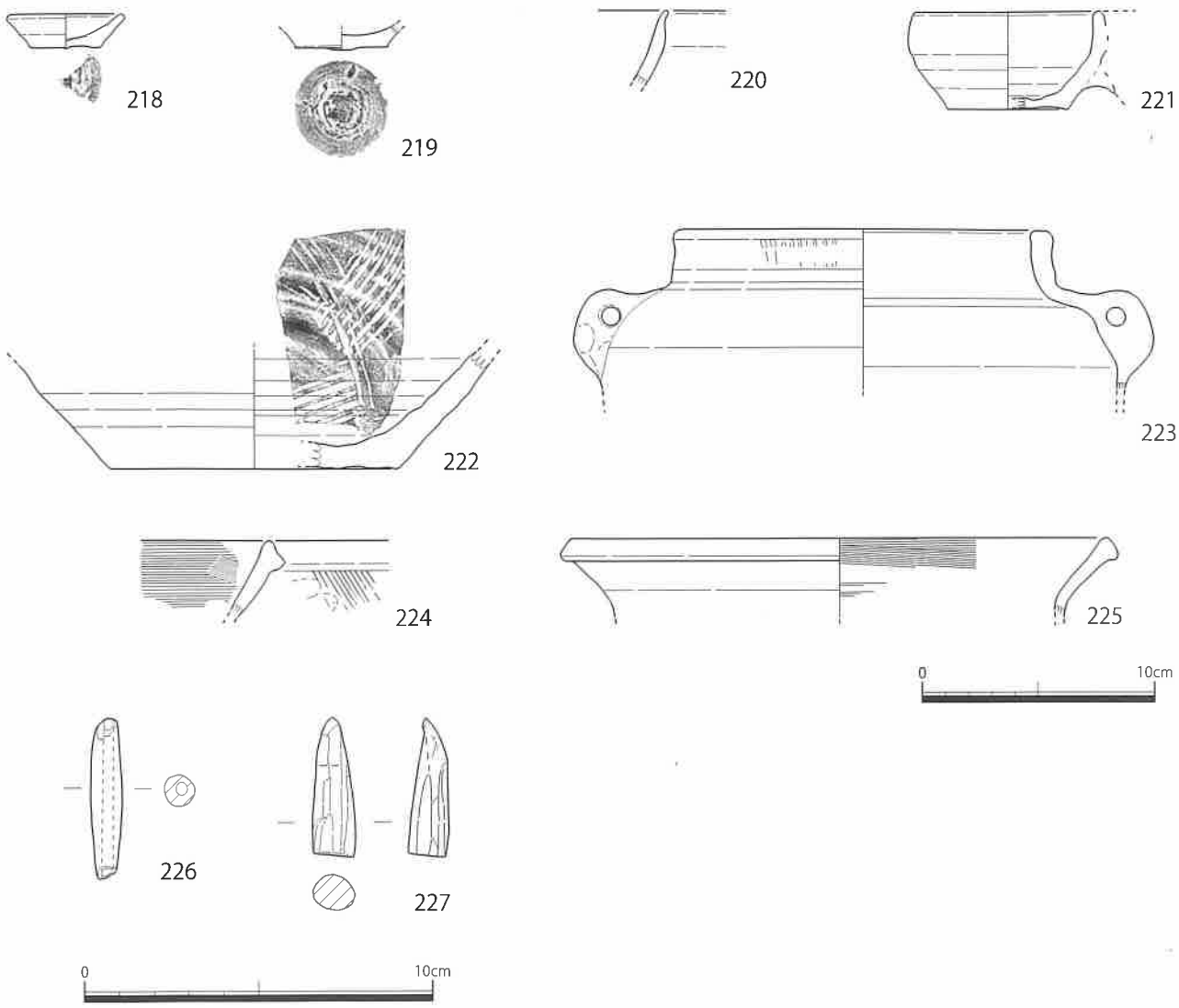
第 34 図　SK45・石組 15 出土遺物実測図（1：3，1：2）

色を呈している。180 は関西系の擂鉢で、8 条 1 単位の擂り目を持つ。色調は明赤褐色を呈している。181 は備前焼花活で外面下半は回転ヘラ削りを施している。胎土は暗灰色で、黒色鉱物粒を含む。外面は褐灰色を呈している。182 は備前焼甕で、色調は褐灰色を呈している。

183 は肥前系染付の碗で、外面に雪輪文と梅文を描いている。高台内に「寿」と思われる文字を書いている。184 は肥前青磁染付の碗蓋で、つまみ高台内に角渦福を、蓋内面の見込みに五花弁文を、口縁部内面に四方襷文を描いている。

185 は擂鉢で、6 条 1 単位の摺り目をもつ。外面には指頭痕がある。胎土は砂粒を多く含む。186 は釜で、鍔の下部には煤が付着している。187 は甕で、外面は指頭圧痕が、内面は斜位のタタキの痕跡が残る。焼成不良である。

188 は軒丸瓦で、文様は巴文であろうか。



第 35 図　石積み出土遺物実測図（1：3，1：2）

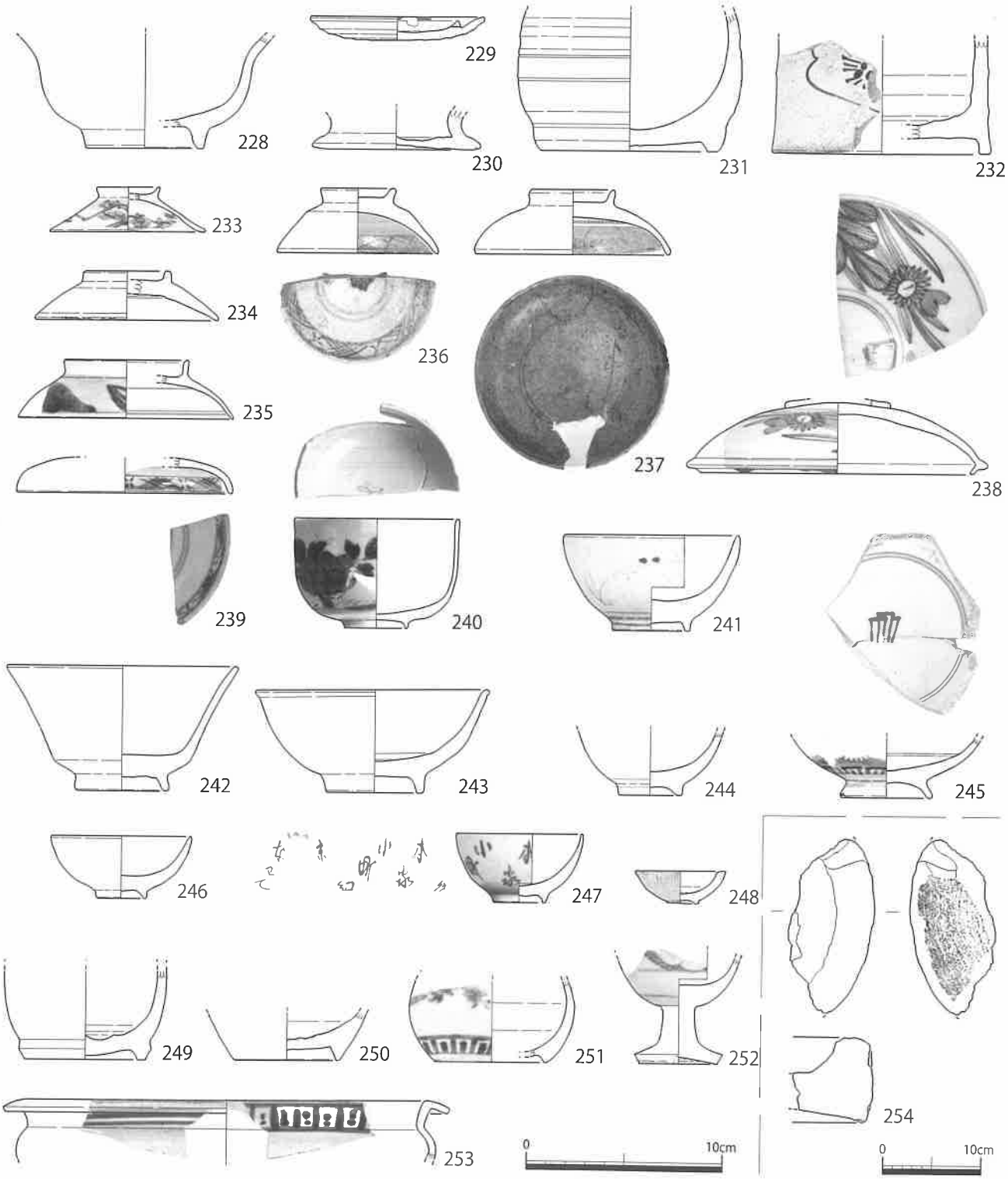
189 は鎹で、木質が付着している。

SK39（第 32 図、図版 22）

190 は肥前系染付の紅猪口で、外面の模様は松葉か。191 は珪質凝灰岩の砥石で、研面は 2 面あり、擦痕が見られる。仕上げ用として使用か。192 は鉄板で、三角形状のもので、端部は欠損し丸くなっている。

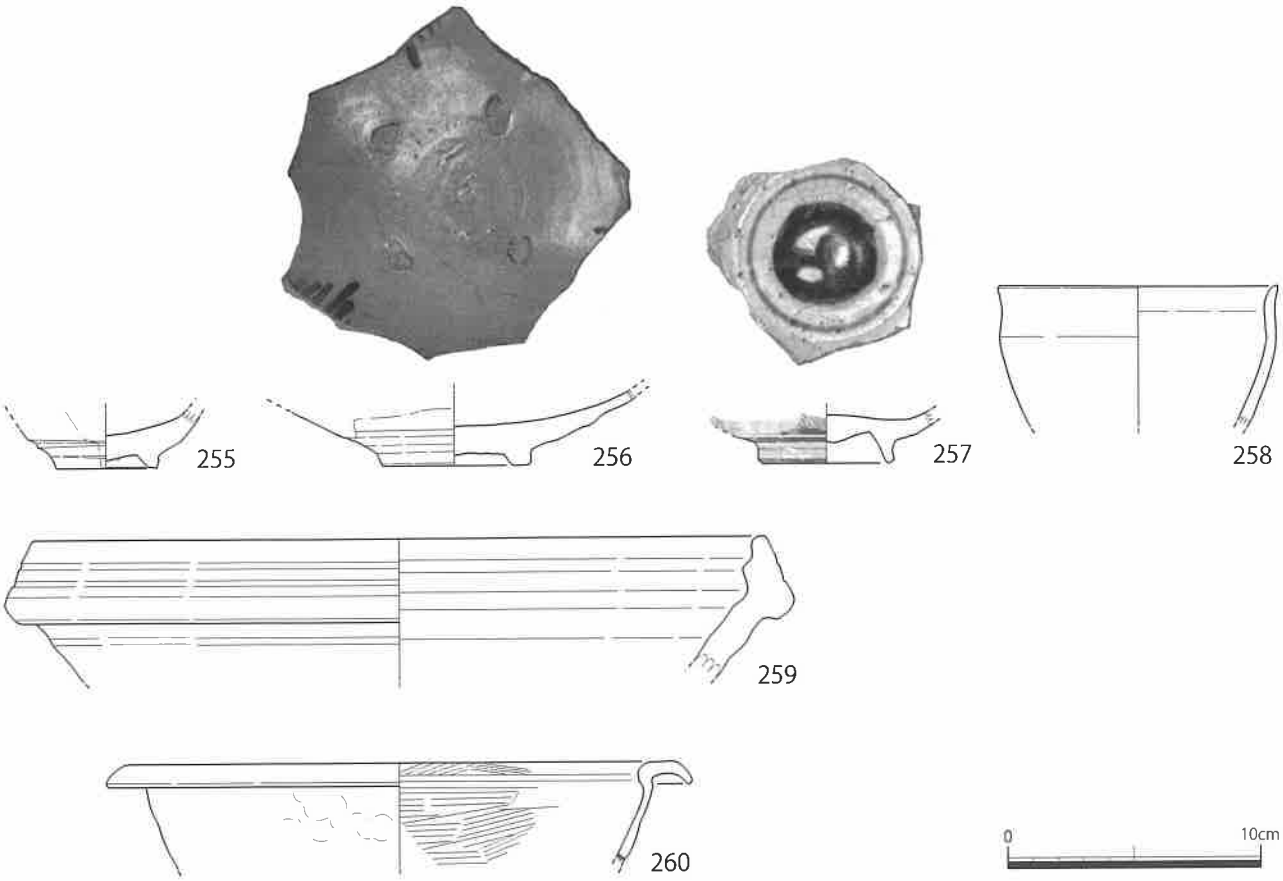
SK40（第 32 図、図版 22）

193 は土師質土器皿で、底面はヘラ切り未調整である。口縁に煤は付着していることから灯明皿として使用されたものであろう。194 は瀬戸美濃の丸皿で、灰釉を施している。内外底面に胎土目の痕跡が残っている。195 は陶器の皿である。内外面共に透明釉を施している。196 は肥前陶器の皿で、外面下半から高台内にかけて回転ヘラ削りによって成形している。高台内に兜巾を僅かに残す。外面上半から内面にかけては灰釉を施している。197 は関西系の擂鉢で、8 条 1 単位の摺り目をもつ。色調は灰赤色を呈している。198 は肥前



第 36 図　包含層出土遺物実測図 1（1：3，1：6）

染付の皿で、見込みに風景画を描いている。199 は土師質土器の甕である。200 は瓦質土器の鍋で、内面に横位の刷毛目を施している。201 は瓦質土器甕で、外面に横位の暗文状のミガキを施している。202 は軒平瓦で、文様は花弁文であろうか。203 は銅製の留金具で、約 4.7cm の銅線を曲げて留金具にしている。



第 37 図　包含層出土遺物実測図 2（1：3）

SK41（第 33 図、図版 22）

204 は土師質土器皿である。205 は肥前波佐見系染付で、外面に梅文を描いている。206 は土師質土器の焙烙で、内面に所々煤が付着している。207 は軒丸瓦で、瓦頭文は右巻きの三ツ巴文である。

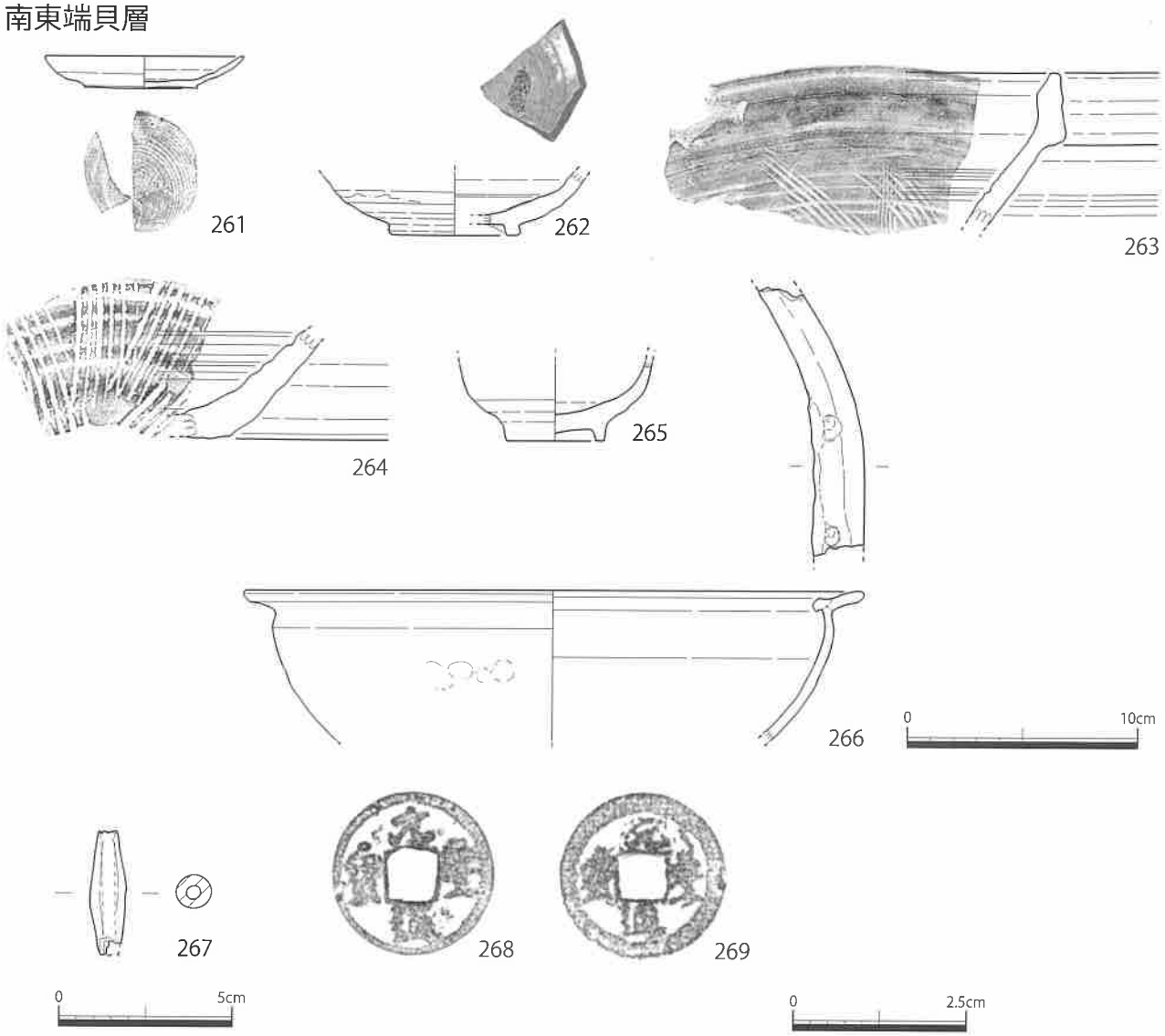
SK42（第 33 図、図版 23）

208 は肥前系染付の碗で、口縁外面に笹文？を描いている。209 は瓦質土器甕で、口縁部と体部の境で、2 条の凹線を施している。内面には青海波文が残る。体部外面には一部指頭圧痕が残っている。210 は軽石で作られた浮で、上部に表と裏の両側から孔を穿っている。

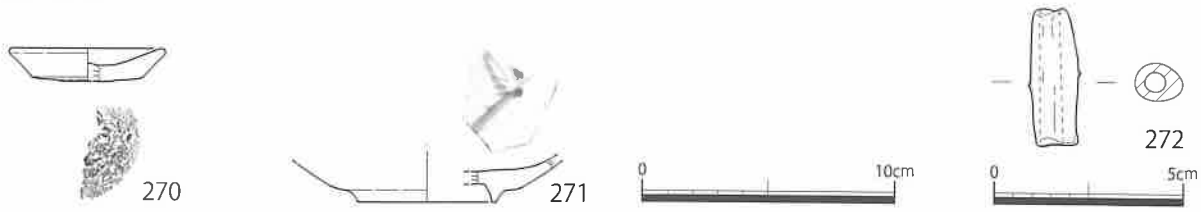
SK45（第 34 図、図版 23）

211 は瀬戸美濃天目茶碗で、外面上半から内面にかけて鉄釉を施している。外面下半から高台内にかけては回転ヘラ削りを施している。212 は細粒凝灰岩の砥石で、研面は主に 2 面とみられる。側面に加工時のものとみられる擦痕がみられる。実 213 は銅製の煙管 (吸口) で、2 ヶ所で屈曲している。人為的なものか。

南東端貝層



南東端貝層直下



南調査区北端トレンチ

第 38 図　包含層出土遺物実測図 3（1：3，1：2，1：1）

石組 15（第 34 図、図版 23）

214 は細粒珪長岩の砥石で研面は 4 面でかなり摩滅している。荒砥として使用か。215 は陶器の土瓶で、底面は回転ヘラ削りで成形し、内面には透明釉を施している。216 は鉄釘で、頭部は叩き出している。217 は関西系陶器の皿で、内底面に 1 条の沈線を施し、高台外周は面取りされている。胎土は堅緻で、灰白色を呈している。全体的に透明釉を施しているが、畳付けは露胎している。器面には細かい貫入が入っている。

3　東調査区遺構出土遺物

石積み裏込め（石の間）（第 35 図、図版 23）

218 と 219 は土師質土器、220 ～ 222 は陶器、223 ～ 225 は瓦質土器、226 は土製品、227 は骨格器である。

218 は土師質土器の皿で、底面は回転ヘラ切り成形と考えられる。219 は土師質土器の皿と思われるもので、底面は回転ヘラ切り成形である。内面は不定方向のナデを施している。220 は瀬戸美濃焼天目茶碗である。221 は備前焼の小鉢状のもので、接合部にヘラ状工具によるカキ目が残る。222 は備前焼擂鉢で摺り目は 7 条 1 単位である。223 は瓦質土器の釜で、縦方向に耳を貼り付けている。224 は瓦質土器の鍋で、外面は斜方向のタタキの後に指おさえを、内面には横方向の刷毛目を施している。225 は瓦質土器の鍋で、内面には横方向の刷毛目を施している。226 は土錘である。227 は鹿角の先端部分で、鹿角を加工する際に面取りを行い、その後切断され不要部分として廃棄されたものと考えられる。先端部分は研磨を受けているが、鹿が角を磨いた時のものと考えられる。

4　包含層出土遺物

第 1 面遺物包含層（第 36 図、図版 24）

228 から 232 は陶器で、233 から 253 は磁器、254 は石器である。

228 は肥前の鉢か皿で、透明釉を施している。畳付けは無釉である。229 はにぶい赤褐色をした灯明皿で、外面は回転ヘラ削りを、内面にヨコナデと不定方向のナデを施している。口縁内に煤が付着。芯を置くために窪みが 2 か所ある。230 は仏花瓶かと思われる瓶で、鉄釉を施している。231 は肥前の可能性のある瓶で、外面と高台内部は回転ヘラ削りで成形し、畳付以外にほぼ鉄釉を施している。232 は瀬戸美濃の火入れかと思われるもので、外面には長石釉で梅？を描いている。高台内は無釉である。

233 は肥前染付の碗蓋で、内外面に梅文を描いている。234 は肥前白磁の碗蓋で、高台内を回転ヘラ削りで成形し、見込みには蛇の目釉剥ぎを施している。また釉着痕が残る。口縁部に煤が付着している。235 は肥前系染付の広東碗の蓋で、外面に葉文を描いている。236 は肥前青磁染付の碗蓋で、内面口縁部に四方襷文を、見込み部分には五花弁文のコンニャク印判を施している。237 は肥前青磁染付の碗蓋で、内面口縁部に四方襷文を描いている。見込みには五花弁文を、高台内には読み取りにくい銘款が記されている。焼成不良が著しい。238 は肥前染付の蓋物の蓋である。外面に草花文を描いている。外面上部のつまみは欠損している。239 は肥前系青磁の蓋で、内面口縁部に四方襷文を描いている。貫入が入っている。240 は肥前系染付の小碗で、外面には牡丹文を描いている。見込みには蝶文？が描かれている。

241 は肥前染付の碗で、外面に露草文を描いている。畳付け部分は無釉である。242 は肥前染付の碗で、透明釉に少し藁灰釉が入り、青っぽい発色である。243 は肥前白磁かと思われる碗で、見込みに蛇の目釉剥ぎ

を施している。シノの痕跡が残る。244 は肥前系染付の碗である。245 は肥前染付の望料形碗である。外面に雪輪文と蓮弁文を、内面には源氏香を描いている。246 は肥前白磁の紅猪口である。247 は肥前染付の紅猪口で、笹の模様を呉須で描いた後に、色絵で右上から左下に向けて縦書きに「本家　小町紅　京　なせ(わ)て」と書いている。248 は肥前の紅皿で、型押し成形で作られ、透明釉を施している。249 は肥前系青磁の花瓶である。250 は肥前系の瓶で、焼成不良のため貫入が入っている。染付か白磁かは不明。251 は肥前染付の袋物の瓶で、外面に桜文と蓮弁文を描いている。252 は肥前の仏飯器で、体部に丸文？を描いている。底部は回転ヘラ削り成形で、底部端部に二次使用と思われる打ち欠きあり。253 は肥前系の香炉である。外面に気泡があり、光沢が消え、火事で火を受けている可能性がある。

254 は角閃玢(ヒン)岩の石臼（上臼）で、横打穴がみられる。

第 2 面遺物包含層（第 37 図、図版 25）

255 と 256、259 は陶器、257 と 258 は磁器、260 は土師質土器である。

255 は肥前の碗で、高台を削り出し、長石釉を施している。256 は肥前の皿（絵唐津）で、内面に胎土目の痕跡が残る。体部外面底部付近は高台も含めて回転ヘラ削りで成形している。内面から外面にかけては透明釉を施している。257 は青花（漳州窯）の碗で、全体に貫入が入っている。見込みには模様（○に人）と圏線が描かれている。258 は肥前青磁の碗である。259 は備前焼の鉢で、灰褐色を呈している。260 は土師質土器の鍋で、外面には指頭圧痕が残り、煤が付着している。内面は刷毛目を施している。

南調査区南東端貝層（第 38 図、図版 25）

261 は土師質土器の皿で、底面は回転糸切り成形である。口縁部に 2 ヶ所煤が付着し、燈芯の痕跡と考えられる。262 は肥前陶器の碗で、体部下半から高台にかけて回転ヘラ削りで成形している。内面から外面上半にかけて透明釉を施し、内面に砂目積みの痕跡が残っている。263 は備前焼擂鉢で、口縁部外面に 3 条の凹線を施し、7 条 1 単位の擂り目をもつ。色調は口縁部外面が灰色、それ以外は明黄褐色である。264 は備前擂鉢で、6 条 1 単位の擂り目をもつ。色調は橙色を呈している。265 は肥前白磁の碗で、体部下半から高台にかけて回転ヘラ削りで成形し、高台内に兜巾を残している。畳付に目砂が付着している。畳付以外には透明釉を施している。266 は土師質土器の内耳鍋で、外面には指頭圧痕が残る。267 は土錘である。268 と 269 は元豊通寶である。

南調査区南東端貝層直下（第 38 図、図版 25）

270 は土師質土器皿で、底面は回転ヘラ切り未調整である。271 は肥前染付の皿で、内面には風景画かと思われる模様を描いている。272 は土錘である。砂粒を多く含む。

南調査区北端トレンチ（第 38 図、図版 25）

273 は肥前陶器の皿で、外面上半から内面にかけて透明釉を施している。274 は土師質土器皿で、底面は回転糸切り未調整である。

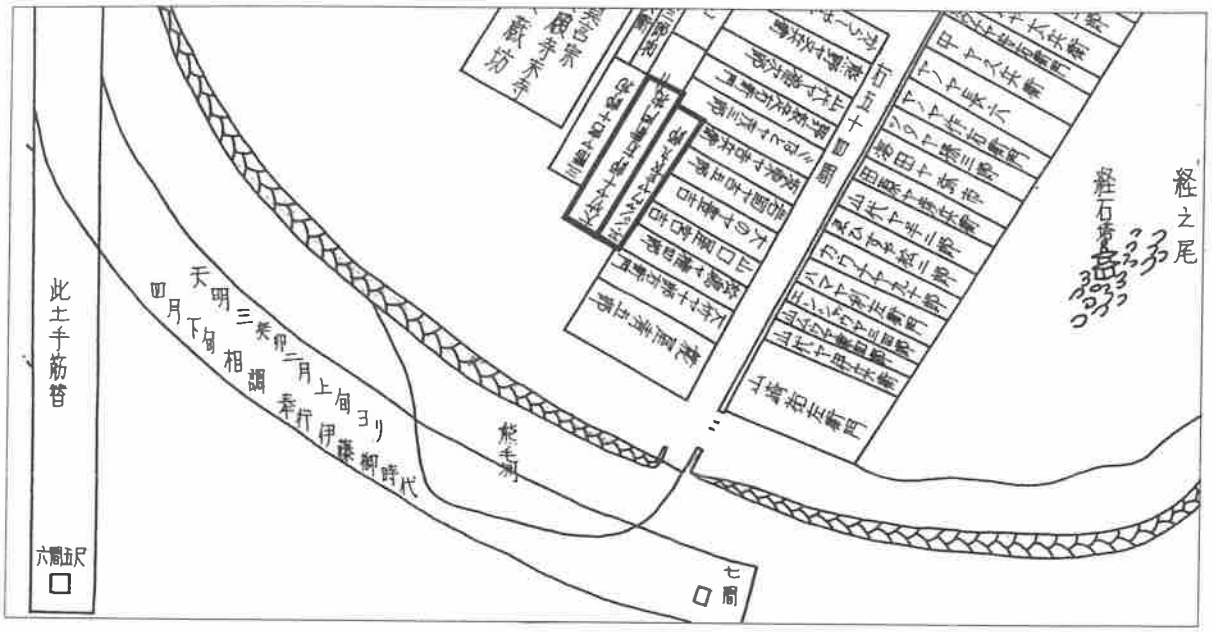
Ⅵ　まとめ

1　近世の町屋の復元

北東調査区では石列と土坑 (SK)、埋甕が検出されたが、大願寺絵図（寛永 2 年 (1625) ～ 17 世紀末成立か）及び吉田家絵図（天明 3 年 (1783) 成立）では当地は屋敷地となっておらず、無記名となっている。よって北東調査区は天明期にはまだ土地の利用はなされていなかったと考えられる。北東調査区では SK24 から多量の陶磁器類が出土している。これらは 17 世紀後半から 1820 年代頃の遺物の廃棄土坑と考えられ、周囲の遺物包含層からも同様の時期の陶磁器類が出土していることから北東調査区の遺構の多くは 19 世紀前半以降のものと考えられる。石列 7 は北側と西側の小口を揃えて石を配している。御手洗川の左岸が護岸化された 18 世紀第 3 四半期以降に北に隣接する厳島神社・大願寺から大元神社までの御手洗川沿いの通りを意識して建物の礎石として利用されたものと考える。石列 7 の東側の未調査部分は大蔵坊の西側に南北に通る小道の出入り口にあたるため東側にはそれほど長く石列は続かないものと想定される。幕末から明治期にかけての石列 9 はその上部に浸透桝からの排水管が通っており、その東側と南側が一部破壊されているが、石列 9 は元々当時の浸透桝から伸びる排水溝であった可能性がある。

埋甕 11 は当初便所の桶受けとしての機能を考慮したが、科学分析の結果、積極的に便所として考えることは難しそうである。埋甕の底部が欠損していることから浸透による排水の目的で使われたものであろう。また、当初北東部の SK24 と同じ時期の遺構と考えていたが、掘方から石を細かく砕いたものを混ぜ合わせて作った石製品が出土していることから幕末以降のものかと考えられる。

南調査区では中央で SK40 を検出した。SK40 は北端から北に約 1m 程の範囲で、土が被熱によって灰色に変色していると思われることから小鍛冶に関する遺構ではないかと考えている。本調査区は北東調査区と比べても鉄製品及び鉄滓が比較的多く出土しており、遺物包含層からも鞴の羽口などが出土している。SK40 が小鍛冶として機能していた時期であるが、SK40 からの出土遺物で一番新しい遺物として 18 世紀前半までの期間とみられる関西系の擂鉢 (197) が出土している。しかし、切り合い関係にあり、本遺構を構築する前のものと考えられる SK41 より 18 世紀第 3 四半期頃のものとみられる肥前系の染付 (205) が出土していることから、SK40 の操業時期は 18 世紀第 3 四半期以降の時期を想定している。この時期の吉田家絵図（天明 3 年 (1783) 成立）では当該地にはヱンシャウヤ長九郎、もしくは大竹ヤ十郎右衛門の記載がある。初年度調査（2009 年報告）の見解とは異なるが、当地を大竹ヤ十郎右衛門が占有、使用していたと考えると、鍛冶屋の作業場であったことが想定できる。絵図には当第 1 地点の西側の小路に面して、同一人物と思われる大竹ヤ十郎右衛門の敷地が記載してある。小路に面した建物を住居兼商店、SK40 が位置する南北方向の敷地を鍛冶作業場として考えることも可能ではなかろうか。実際に、広島藩では幕府鉄座の統制から脱した天明元年 (1781) から国産鉄の増産奨励策に取り組むようになり、水役・釘地・小鍛冶の各種鍛冶屋に創業資金の貸与や鉄製品の販路開拓を援助するようになった。本遺構は出土遺物からもそれらの時期に操業したであろうものと考えている。また直接的な物証があるわけではないが、当地は大蔵坊を挟んで大願寺の裏手にあたり、16 世紀中頃以降明治維新まで島内各所の寺社修理・造営を担当していた大願寺に釘や金具等の製作などを



第 39 図　吉田家絵図（宮島町史編纂室作図）

行い、納めていた可能性もある。

さらに、南調査区の塀垣 1 は厳島を描いた絵画資料の中でも実景に近いと考えられている海北友雪『厳島図屏風』（寛永末～明暦期 (1635 ～ 55) 成立か）の大西町に該当する部分に水際の境界線に垣塀と冠木門を描いていることから同様の塀垣と判断出来よう。塀垣 1 の周辺には広島県教育委員会が実施した試掘坑があることから、その全容は確認できなかったが、本来試掘坑の範囲内に存在したかもしれない同様の遺構が石積みもしくは水路に沿って構築されていた可能性は否定できまい。塀垣 1 の構築時期は当遺構が貝層の直下にあることから中世末～近世初頭と考えられる。

2　中世の石積み遺構について

（1）石積みの機能について

A　北面

北側に向けて面をもつ石積み（以下、「北面石積み」という）は厳島神社と大きく関係しているものと思われる。時代は遡るが、「伊都岐島社千僧供養日記」に治承元年 (1177) 中宮徳子が平清盛など平家一門を従えて一切経会・千僧供養会を催すため社参した際の万灯会では社殿の前面に当たる「宮崎」（塔の岡の先端付近）から「大鳥居の外」・「西崎」（経之尾の先端付近）の間の海上、及び対岸と思われる「遠方の浜」に数十町にわたって松明が焚かれ、参集の船は有の浦、並びに宮崎から西崎の海上に二重・三重に着岸したと記されている。

以降 12 世紀の西行、13 世紀後半の源翁禅師、無住、一遍、14 世紀前半頃に二条尼、中厳円月、藤原公重、足利尊氏、14 世紀後半頃には今川了俊、足利義満、15 世紀前半には城呂座頭・僧白寿ら多くの参詣者が訪れている。彼らの参詣の時期は 3 月の御戸開節会 (将軍家祈禱のため寛喜 4 年 (1232) より開始) と 9 月の一切経会（承安 4 年 (1174) から開始）に集中している。鎌倉時代にはこれらの法会に参詣者が群集する様子が知られていること（二条尼『とはずがたり』）から上述の「伊都岐島社千

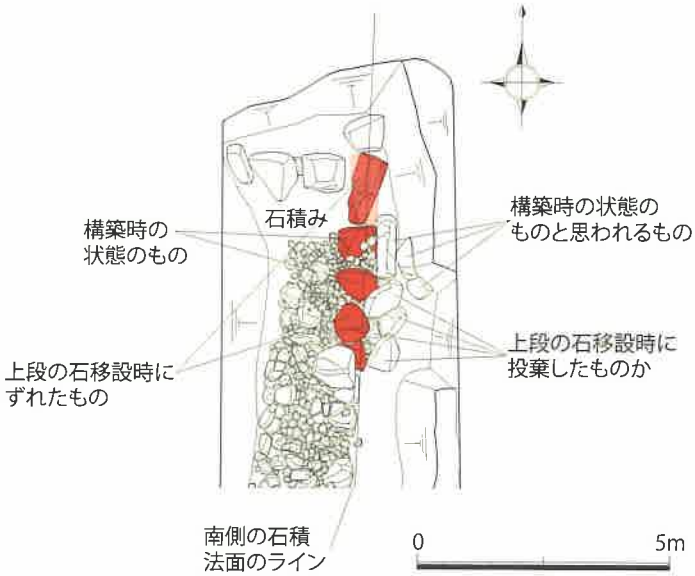
第 40 図　中世遺構実測図（1～3次調査　1：200）

僧供養日記」に書かれていたように厳島参詣のために有の浦から西崎、あるいは大元浦まで参詣者を乗せた船が着岸していたものと考えられる。参詣者が少ない時は着岸しやすい岸に、参詣者が多い時は、着岸しやすい場所から順に船舶が係留されたものであろう。

1次調査から今調査で検出した北面石積みは厳島上陸の際の当時の着岸地の一か所であり、また御仙（弥山）を中心とした中世山岳信仰に関わる山伏等と厳島社参詣者に対する海と陸の境界を示す境界石であった可能性が高い。事実2次調査で検出した石積みの間の空間は上陸口として機能したのではないかと考える。蛇足ではあるが、この石積みを西側に延長すると経之尾の先端部分に、東側に延長すると厳島神社の拝殿辺りを通過することも石積み構築時に島（聖域）の入り口として厳島神社を意識して構築している可能性があること述べておく。（第42図）

B　東面

東側に向けて面をもつ石積み（以下、「東面石積み」という）は石積み北端部は北端と考えられる石から数石は本来の石積み構築面から東に少しばかりずれている。当初、このずれは石積み2段目を移設した時に動いた可能性を考慮したが、北端部基底石全体が東にずれていることから、床部の石は本来の場所から動いていないと考え直した。2段目の石は構築された時の位置より動かされている可能性があるが、東側に散乱した石は河口に置いた石で、大潮時に海からの土砂の逆流を防ぐ意味で置かれていた可能性があると考えている。

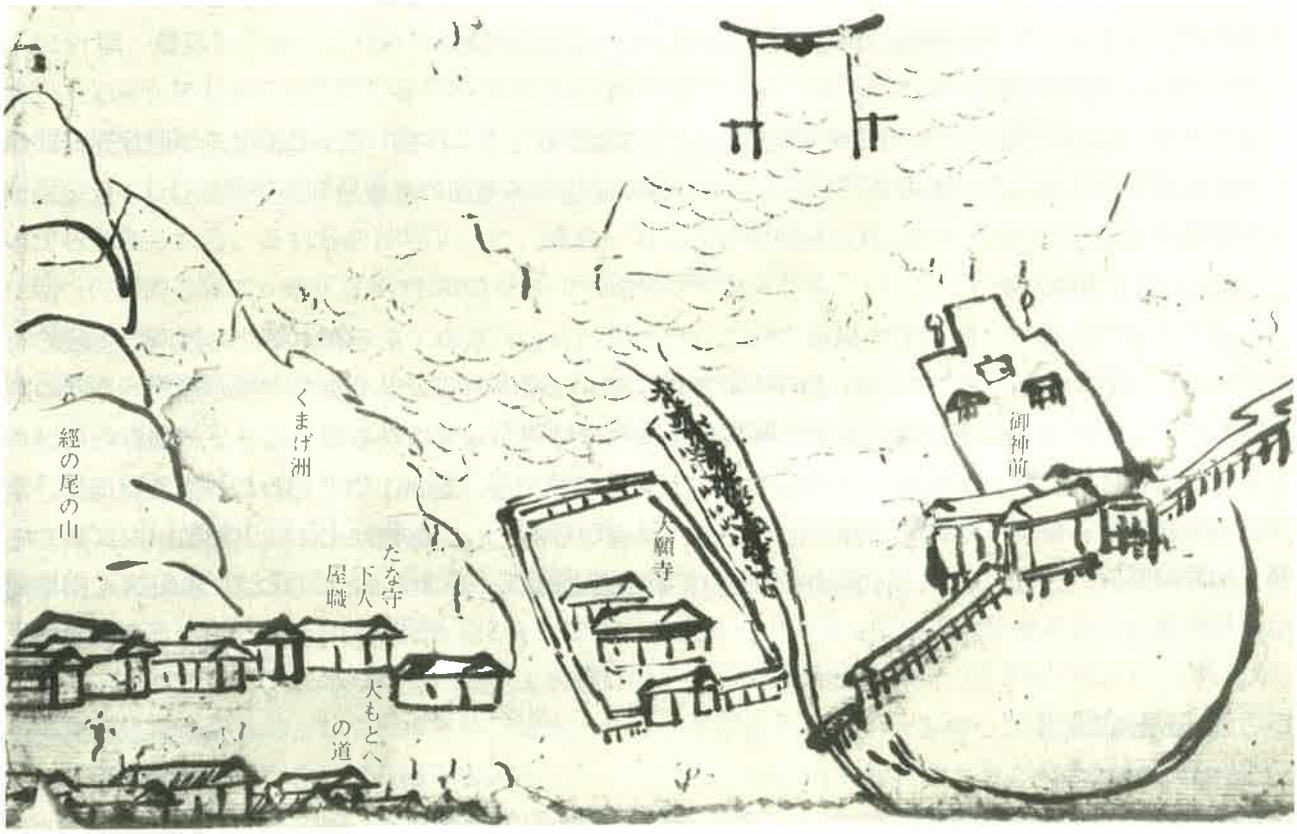


第41図　石積み北東部詳細図

次に、本調査時に東面石積みは遺構の性格として2つの可能性を考えた。1つは直線的に南に延びる石組みの溝の西側部分、2つ目に大願寺裏（西側）に位置する平面コの字形？の港湾施設の石積みで西側の一部分の可能性を考えた。後者については東面石積みの基底石の底は標高0.7 m前後で、仮に2段の石積みであったとして石積みの高さは基底石の底部から約0.95 m前後、最上部で標高1.65 m前後となる。応安4年(1371)の今川了俊『道ゆきぶり』に「廊の下まで潮満ち入たり」と記載されていることから厳島神社の廻廊床板直下まで仮に大潮時に潮が満ちたとしても、石積み2段目と同程度の高さで、満潮時の水深は1 mにも満たないことが分かる。これでは満潮時にしか寄港出来ないし、ましてや『北野天神絵巻』（承久本）に描かれているような大型海船は入港出来ないことから石積みの港湾施設の一部である可能性は低いと判断した。港湾施設内は波及び上流から運ばれてくる砂によって埋まっていくことが想定され、常にその砂を浚渫する必要があることから、文献資料にもその浚渫について記載があってもよいはずであるが、そのような記述の資料がないのは本説が成立し得ないことの証拠となるであろう。

消去法で考えると石組の溝の西側部分ということになる。石組みの溝の機能であるが、当調査地か

第 42 図　石積み想定図



第 43 図　厳島社頭屋敷圖（宋庵立意書状 厳島野坂文書 1168）

ら南側には現在も池の水などに使われている井戸水の元となっている水源地があり、東面石積みはその水源地辺りからの川水を海に流すための石組の溝の一部である可能性が高い。ちなみに石組みの裏込石は可能な限り溝内に石の間から砂が流れ出ないようにするためのものと考えている。

ちなみに慶長4年(1599)かと考えられる宋庵立意書状（厳島野坂文書1168）には貼り継ぎをした絵図（厳島社頭屋敷圖　第43図）がある。それには右から「御神前(厳島神社)」、「大願寺」、「たな守下人屋敷」、「経の尾の山」が描かれており、「たな守下人屋敷」は「大もとへの道(るすくち小路)」に沿って建物が南北両側に描かれている。その上には「くまげ洲」と記載されており、建物は全く記載されておらず、洲浜であったことがわかる。また、この絵図には「大願寺」と「たな守下人屋敷」の間には「くまげ洲」に向かって線が引いてある。この線を貝などで埋められる前の石積みの溝と考えることは可能ではなかろうか。

（2）石積みの機能廃絶について

A. その意義

石積み石材の抜き取り及び転用の意義についてであるが、毛利氏による厳島門前の改編事業（1555年～1572年）に伴うものと考えるよりは一般民衆を巻き込んだ社寺参詣による東町の形成に伴い、港湾施設の整備などによって有の浦などに効率的に船舶が停泊できるようになったことで、くまげ洲と呼ばれる洲に船を泊める必要が少なくなったことから、石積み石材は搬出しやすい上部のものから抜き取られ、近隣の建物の地割石や礎石などに加工、転用されたもの考えられる。

また、同時に東面石積みのある溝は宅地等の需要から上部の石を抜き取り、貝などで埋められ、るすくち小路の裏手あたりから順に宅地化していったものと思われる。

B. 文献上での時期の検討

慶長4年(1599)かと考えられる宋庵立意書状（厳島野坂文書1169）では毛利輝元が棚守元行に熊毛州に屋敷を抱えることを認めていることから、当地周辺の熊毛洲の屋敷地等開発時期は16世紀末以降が想定される。

C. 裏込め出土遺物の検討

本来大きめの石材で2段程度で構築されていたと思われる石積みであるが、多くの箇所で上段の石材が抜き取られ持ち去られている。この時期であるが、石積みの間で出土した一部の遺物と今回の調査でも検出した石積みの上に堆積していた貝層の遺物の時期が参考になるであろう。石積みの間から出土した遺物は土師質土器小皿、15世紀以降の瓦質土器鍋や釜、近世Ⅰ期と思われる備前焼擂鉢、瀬戸美濃天目茶碗、肥前Ⅰ期の絵唐津の皿などで、貝層から出土した遺物は土師質土器皿、内耳鍋、肥前Ⅰ期の陶器碗、近世Ⅰ期の備前焼擂鉢、肥前Ⅱ期の白磁碗で、その境はおおむね17世紀第1四半期末前後が境目になりそうである。

（3）石積み構築時期について

A. 文献上での検討

構築時期であるが、石積みの真下に存在する可能性のある遺物を調査していないので、不明な部分

が多い。文献を検討した結果、まず以下の3時期が可能性として考えられる。

①寛元元年(1243)から正安2年(1300)　知行による造営修理

正安2年(1300)の「伊都岐嶋社未造殿舎造営料言上状案」(大願寺文書1)には貞応未作分として「唐恒(垣)36間造進」(貞応年間に作っていなかった唐垣を36間造進した)と記載されていることから、石積みの一部はこれに該当する可能性がある。もし仮に唐垣が本石積みに相当するのであれば、貞応2年(1223)に厳島社殿が焼失し、その復旧が寛元元年(1243)に終わったとしている(「安芸国司庁宣案」新出厳島文書107)ことから、新たな造営として寛元元年(1243)から正安2年(1300)の期間に築かれたこととなろう。

②建武3年(1336)から康応元年(1389)　将軍及び大名の造営料所の寄進

足利尊氏が建武3年(1336)に安芸国造賀保(東広島市高屋町)を造営料所として厳島社に寄進し(「足利尊氏寄進状」御判物帖54)、貞和4年(1348)にも安芸国己斐村(広島市西区)を廻廊以下の造営料所としている(「足利尊氏寄進状」御判物帖55)。また永徳元年(1381)に大内義弘が厳島社の造営料として志芳荘(東広島市志和町)の地頭職を寄進している(「大内義弘寄進状」御判物帖58)。前者は計画の下限を、後者は未造殿舎が未完成であったことを示している。これら時期の造営修理につては詳細な記録が残っておらず、全容はわかっていないことから、本時期に石積みが構築されたことの可能性は否定できまい。康応元年(1389)時の権力者足利義満の厳島参詣(今川了俊『鹿苑院殿厳島詣記』)までが造営修繕の期間と考えられる。

③応永26年(1419)頃から永正3年(1506)頃　勧進による造営修理

当時は南北朝以降の社領の不知行化のため、造営修理は困難であった。そうした状況で、応永26年(1419)頃、厳島社の傍らに住み社殿修造を志し、勧進を始めた小比丘徳厳の存在や厳島社の西回廊が焼失(文明9年(1477))したのを長享2年(1488)に伊予大願寺覚尊が本願として勧進による造営修理を進め再建したことなどが挙げられよう。また、社家三方の代表の地位に就いた棚守房顕が「房顕覚書」を記しているが、その中に石積みの造営に関する記載はなく、覚書事項の本格的記載は永正3年(1506)頃からとみられる。これらを整理すると、勧進による造営修理は応永26年(1419)頃から大願寺の現在地への移設を経て、永正3年(1506)頃までの時期が考えられる。

B. 構築時期についての推察

石積みの構築時期は前述のように文献や、石材に残っている矢穴痕などから13世紀中頃から16世紀初頭の時期が考えられる。ここでは石積み裏込めを全て調査出来たわけではないので、推察にしかならないことを断わった上で、記述する。

改めて、出土遺物を概観してみると、1次調査で、14～15世紀の中国製青磁碗(2009年報告書 土器・陶磁器 No,7)が出土している。また本調査南調査区の北端のトレンチ床土坑上面(石積み構築面と同一の可能性あり)から土師質土器皿(274)が出土している。土師質土器皿(274)はおおむねその器形から15～16世紀のものと思われる。また、1次調査出土中国製青磁碗は14～15世紀のものとされるが、中国製陶磁器は貴重品として伝世されて使用されることがあることから15～16世紀の廃棄と考えることは可能であろう。そして石積み裏込めから15世紀末から16世紀初頭と思われる瓦質土器(223・225)が出土している。よってこれらの事を勘案すると構築時期は15世紀末から16世紀初頭の時期

すなわち③応永 26 年 (1419) 頃から永正 3 年 (1506) 頃の勧進による造営修理が考えられる。しかし、北面石積みと東面石積みの交点となる北東端は基底石が置いてあるだけで、北面石積みと東面石積みの構築順が不明なので、北面石積みは構築時期が②建武 3 年 (1336) から康応元年 (1389) の将軍及び大名の造営料所の寄進の時期にまで遡る可能性が残されているのではないかと考えている。(石積みを主に調査した 2 次調査でも瓦器碗や、14 世紀以前の土師質土器などは出土していないことから可能性を残すという表現を使用。)

参考文献

廿日市市教育委員会『厳島神社門前町－廿日市市厳島伝統的建造物群保存対策調査報告書－』2007 年

廿日市市大西町発掘調査団『特別史跡及び特別名勝 厳島 宮島町屋跡 西大西町第 1 地点 発掘調査報告書―(仮称) 厳島美術館建設に伴う発掘調査の記録―』2009 年

広島県『広島県史 近世 2(通史Ⅳ)』1984 年

土井作治「近世たたら製鉄の技術」『講座・日本技術の社会史 第 5 巻』㈱日本評論社 1983 年

廿日市市大西町発掘調査団『特別史跡及び特別名勝 厳島 宮島町屋跡 西大西町第 1 地点 発掘調査報告書 2 ―(仮称) 厳島美術館建設に伴う発掘調査の記録―』2010 年

宮島町『宮島町史 特論編・建築』1997 年

松岡久人『安芸厳島社』㈱法蔵館 1986 年

広島県『広島県史 中世 (通史Ⅱ)』1984

荒木尚「鹿苑院殿厳島詣記」・「道ゆきぶり」『中世日記紀行文学全評釈集成 第 6 巻』勉誠出版㈱ 2004 年

石井謙治『ものと人間の文化史 76- Ⅱ 和船Ⅱ』㈶法政大学出版局 1995 年

脇田晴子「中世の交通・運輸」『講座・日本技術の社会史 第 8 巻』 ㈱日本評論社　1985 年

広島県『広島県史 古代中世資料編Ⅱ』1976 年

広島県『広島県史 古代中世資料編Ⅲ』1978 年

福田直記『棚守房顕覚書 付解説』宮島町 1975 年

森岡秀人・藤川祐作「矢穴の型式学」『古代学研究』第 180 号　2008 年

付編　自然科学分析調査報告書

宮島町屋跡における自然科学分析報告

株式会社古環境研究所

Ⅰ．環境考古分析

１．はじめに

宮島町屋跡西大西町第１地点の調査では、北東側調査区において 18 世紀後半～19 世紀前半とされる底部の欠損した埋甕が検出された。ここでは、遺構としての性格を検討する目的で、環境考古分析（花粉分析、珪藻分析、植物珪酸体分析）を実施した。

２．試料

分析試料は、北東側調査区 M01-3 埋甕１号第４層（埋甕埋土最下層）より採取された堆積土（黄灰～褐灰色礫混砂）１点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

３．花粉分析

（１）原理

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されるが、遺構内の堆積物からは食用や利用された植物の花粉が検出され、当時の食性や植物利用の推定が可能である。

（２）方法

花粉の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに、以下の手順で行った。

１）試料から礫を除き２g を採量

２）0.5%リン酸三ナトリウム（12 水）溶液を加え 15 分間湯煎

３）水洗処理の後、0.5mm の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去

４）25%フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置

５）水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す

６）再び氷酢酸を加えて水洗処理

７）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作製

８）検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって 300～1000 倍で行った。花粉の分類は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。同定分類には化石および遺体の分類法を用い、所有の現生花粉標本、島倉（1973）、中村（1980）も参照した。

（３）検出された分類群

出現された分類群は、樹木花粉８、草本花粉４、シダ植物胞子２形態の計 14 である。これらの学名と和名

および粒数を表１、図１に示し、出現した分類群は顕微鏡写真に示した。また、寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

マキ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、エノキ属－ムクノキ

〔草本花粉〕

イネ科、タデ属サナエタデ節、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

（４）花粉群集の特徴（図１）

花粉密度が極めて低く、樹木、草本ともに少数の分類群がわずかに検出された。樹木花粉では、針葉樹のマツ属複維管束亜属、ツガ属、スギ、草本花粉ではイネ科を主にわずかに出現する。寄生虫卵、石細胞、消化残渣なども検出されなかった。

４．珪藻分析

（１）原理

珪藻は、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映しており、遺構内の堆積物では、その水環境の示す珪藻が検出され、遺構の用途等の検討が可能となる。

（２）方法

以下の手順で、珪藻の抽出と同定を行った。

１）試料から礫を除き２ｇを採量

２）10％過酸化水素水を加え、加温反応させながら１晩放置

３）上澄みを捨て、細粒のコロイドを水洗（５～６回）

４）残渣をマイクロピペットでカバーグラスに滴下して乾燥

５）マウントメディアによって封入し、プレパラート作製

６）検鏡、計数

検鏡は、生物顕微鏡によって600～1500倍で行った。計数は珪藻被殻が200個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

（３）検出された分類群

試料から出現した珪藻は、真塩性種（海水生種）ないし真－中塩性種（海－汽水生種）５、貧塩性種（淡

水生種）10、計 15 分類群である。破片の計数は基本的に中心域を有するものと、中心域がない種については両端２個につき１個と数えた。表２、図２に分析結果を示し、出現した分類群は顕微鏡写真に示した。珪藻の生態性は Lowe(1974)の記載により、陸生珪藻は小杉（1988）による。

〔真塩性種および真－中塩性種〕

Coscinodiscus marginatus、*Cyclotella striata-stylorum*、*Thalassionema nitzschioides*、*Diploneis interrupta*、*Nitzschia cocconeiformis*

〔貧塩性種〕

Amphora veneta、*Cocconeis placentula* v. *pseudlineata*、*Cymbella leptoceros*、*Diploneis pseudovalis*、*Eunotia minor*、*Fragilaria exigua*、*Gomphonema clevei*、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica*、*Rhoicosphenia abbreviata*

（４）珪藻群集の特徴（図２）

珪藻密度が極めて低く、ほとんど検出されない。わずかに、真塩性種ないし真－中塩性種の *Coscinodiscus marginatus*、*Cyclotella striata-stylorum*、*Thalassionema nitzschioides*、*Diploneis interrupta*、*Nitzschia cocconeiformis* が出現し、貧塩性種では水生珪藻の *Cocconeis placentula* v. *pseudlineata*、*Gomphonema clevei*、*Rhoicosphenia abbreviata*、*Amphora veneta*、*Cymbella leptoceros*、*Eunotia minor*、陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica* が出現する。

５．植物珪酸体分析

（１）原理

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（SiO_2）が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。

（２）方法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて、次の手順で行った。

１）試料を 105℃で 24 時間乾燥（絶乾）

２）試料約１g に対し直径約 40μm のガラスビーズを約 0.02g 添加（0.1mg の精度で秤量）

３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理

４）超音波水中照射（300W・42KHz・10 分間）による分散

５）沈底法による 20μm 以下の微粒子除去

６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成

７）検鏡・計数

同定は、400 倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行っ

た。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1g あたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山，2000）。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

（3）分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表3、図3に示し、主要な分類群について顕微鏡写真を示した。

〔イネ科〕

イネ、ウシクサ族A（チガヤ属など）

〔イネ科ータケ亜科〕

ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等

〔イネ科ーその他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

〔樹木〕

ブナ科（シイ属）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）、その他

（4）植物珪酸体の検出状況（図3）

埋甕1号内の堆積物では、イネ、ウシクサ族A、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型、および樹木（照葉樹）のブナ科（シイ属）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）などが検出されたが、いずれも比較的少量である。イネの密度は1,800個/gと比較的低い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個/gを下回っている。

6．考察

花粉密度が極めて低く、樹木花粉ではマツ属複維管束亜属、ツガ属、スギが、草本花粉ではイネ科が主に検出された。いずれも風媒花植物であることから、堆積時にこれらの植物の花粉が飛来したと見なされる。著しく密度が低いことから、集積するような堆積環境ではなかったと考えられる。珪藻も極めて密度が低く、珪藻が生育する水環境ではなかったとみなされる。珪藻は微細なため波や水流の飛沫などから飛散し、花粉と同様に飛来したと考えられる。植物珪酸体も比較的低い密度である。イネが検出されていることから、埋甕内で何らかの形で稲藁が利用されていたことや、周辺で利用されていた稲藁が埋甕内に混入した可能性が考えられる。稲藁の利用としては、藁製品（俵、縄、ムシロ、草履など）や建物の屋根材など多様な用途が

想定される。

イネ以外の分類群では、ウシクサ族や竹笹類、およびシイ属、クスノキ科、イスノキ属などの樹木（照葉樹）に由来する植物珪酸体が検出されたが、いずれも比較的少量であることから、これらは周辺から混入した土壌に由来する可能性が考えられる。

以上から、埋甕 11 は花粉や植物珪酸体が集積したり、珪藻が生育したりするような環境ではなかったと推察される。寄生虫卵等も検出されないことから、当該堆積土は排水のよいやや乾燥した環境で生成された堆積物と考えられる。埋甕 11 の底部が欠損していることから、浸透による排水を目的とした機能が考えられ、限定はできないが何らかの廃液の排水や小便の排水の可能性も示唆される。

参考文献

Asai,K.&,Watanabe,T.(1995)Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relaiting to Organic Water Pollution(2) Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom,10,p.35-47.

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第 10 巻古代資料研究の方法，角川書店，p. 248-262.

K. Krammer・H.Lange-Bertalot(1986-1991) Bacillariophyceae・１－４.

小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，p. 1-20.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集，60p.

杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－．考古学と自然科学，19，p.69-84.

杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史．第四紀研究，38(2)，p.109-123.

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.

中村純（1967）花粉分析．古今書院，p. 82-102.

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第 13 集，91p.

Hustedt,F.(1937-1938)Systematische und ologishe Untersuchungen uber die DiatomeenFlora von Java,Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch.Hydrobiol,Suppl.15,p.131-506.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17，p.73-85.

Lowe,R.L.(1974)Environmental Requirements and pollution tolerance of freshwater diatoms. 333p., National Environmental Reserch.Center.

表１　宮島町屋跡 西大西町第１地点における花粉分析結果

分類群		MO1-3
学名	和名	埋甕11第4層埋土
Arboreal pollen	樹木花粉	
Podocarpus	マキ属	1
Tsuga	ツガ属	2
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	3
Cryptomeria japonica	スギ	2
Taxaceae-Cephalotaxaxeae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	2
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	2
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	1
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属-ムクノキ	1
Nonarboreal pollen	草本花粉	
Gramineae	イネ科	17
Polygonum sect. *Persicaria*	タデ属サナエタデ節	1
Asteroideae	キク亜科	1
Artemisia	ヨモギ属	1
Fern spore	シダ植物胞子	
Monolate type spore	単条溝胞子	7
Trilate type spore	三条溝胞子	21
Arboreal pollen	樹木花粉	14
Arboreal・ Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	
Nonarboreal pollen	草本花粉	20
Total pollen	花粉総数	34
Pollen frequencies of 1cm^3	試料1cm^{3}中の花粉密度	4.4 ×10
Unknown pollen	未同定花粉	5
Fern spore	シダ植物胞子	28
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)
Stone cell	石細胞	(-)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)
Charcoal fragments	微細炭化物	(+)

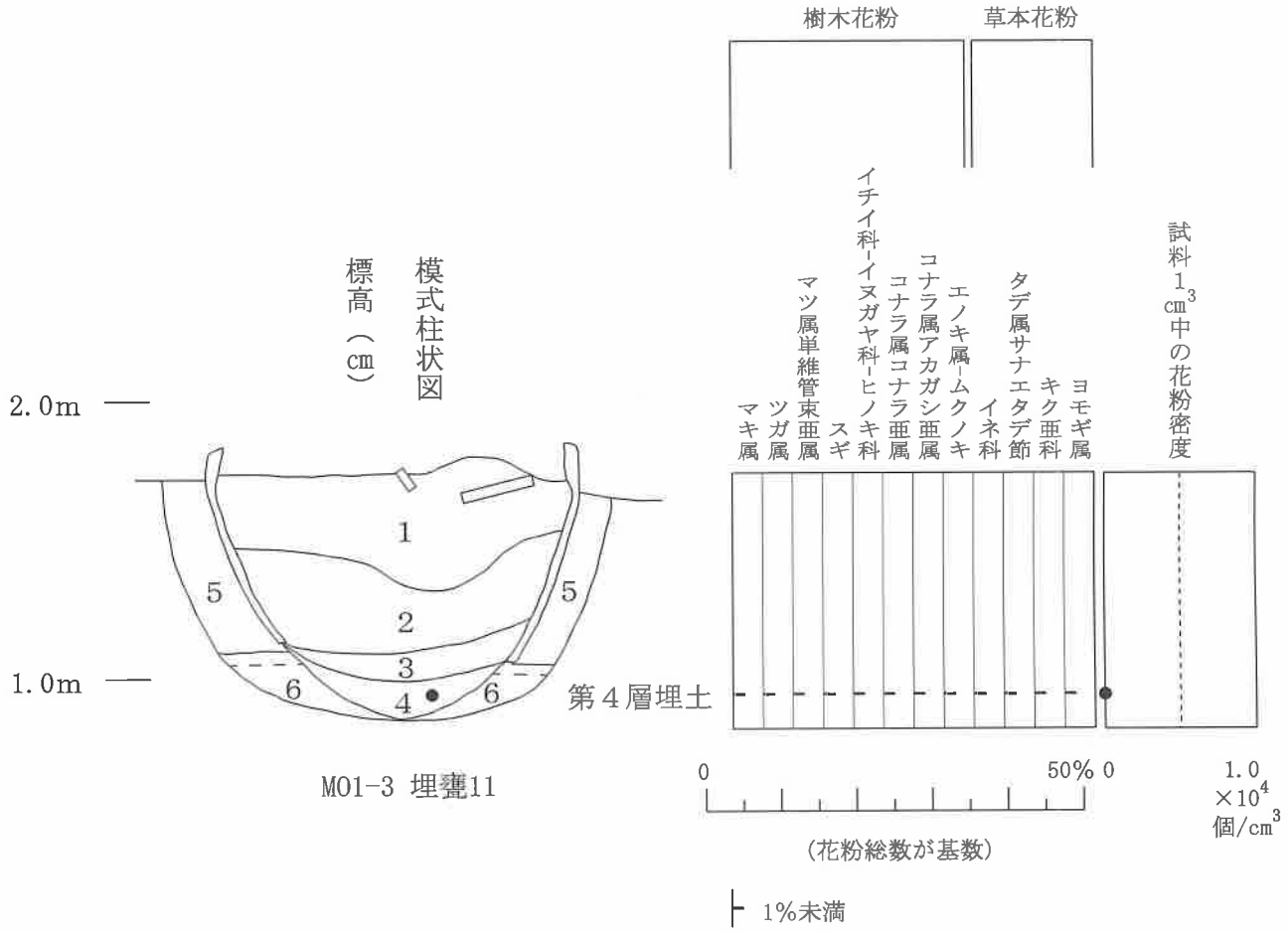


図１　宮島町屋跡 西大西町第１地点における花粉ダイアグラム

表２　宮島採取試料における珪藻分析結果

分類群	MO1-3 埋甕11第4層埋土
貧塩性種（淡水生種）	
Amphora veneta	3
Cocconeis placentula v. *pseud lineata*	5
Cymbella leptoceros	2
Diploneis pseudovalis	2
Eunotia minor	1
Fragilaria exigua	1
Gomphonema clevei	1
Hantzschia amphioxys	5
Navicula mutica	1
Rhoicosphenia abbreviata	2
真-中塩性種（海-汽水生種）	
Diploneis interrupta	7
Nitzschia cocconeiformis	1
Coscinodiscus marginatus	1
Cyclotella striata-stylorum	2
Thalassionema nitzschioides	2
合　計	36
未同定 破片	41
試料１cm^3中の殻数密度	7.2 $\times 10^3$
完形殻保存率（%）	46.8

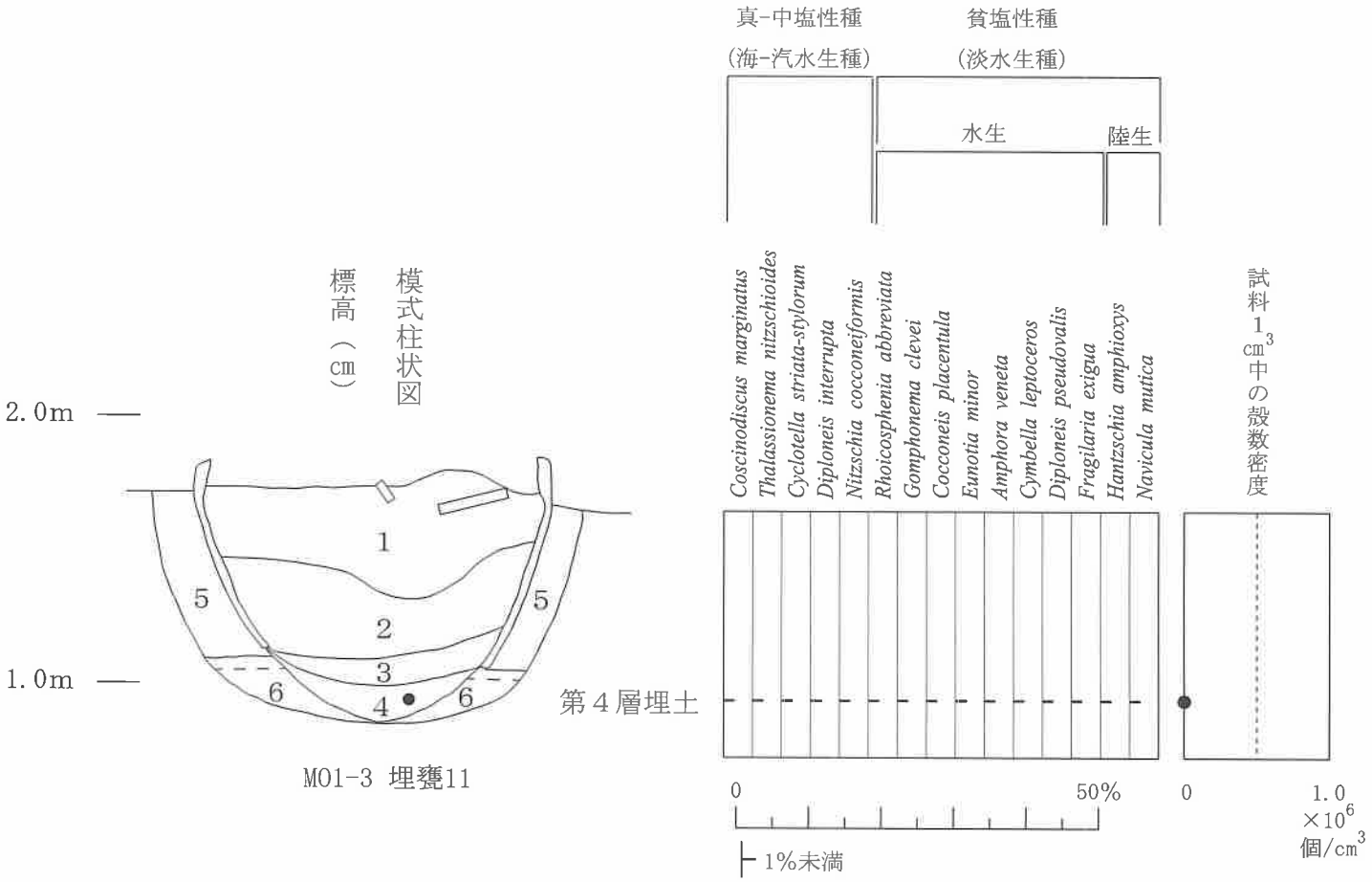


図２　宮島町屋跡 西大西町第１地点における主要珪藻ダイアグラム

表３　宮島採取試料の植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

分類群	学名	地点・試料	M01-3
			埋甕11第4層埋土
イネ科	Gramineae		
イネ	*Oryza sativa*		18
ウシクサ族A	Andropogoneae A type		6
タケ亜科	Bambusoideae		
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa		6
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.		12
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi		6
未分類等	Others		12
その他のイネ科	Others		
表皮毛起源	Husk hair origin		6
棒状珪酸体	Rod-shaped		18
未分類等	Others		55
樹木起源	Arboreal		
ブナ科(シイ属)	*Castanopsis*		12
クスノキ科	Lauraceae		6
マンサク科(イスノキ属)	*Distylium*		6
その他	Others		31
(海綿骨針)	Sponge spicules		6
植物珪酸体総数	Total		196

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/m²・cm）

イネ	*Oryza sativa*	0.54
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	0.03
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.	0.09
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	0.02

タケ亜科の比率（%）

ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	21
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.	66
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	13
メダケ率	Medake ratio	21

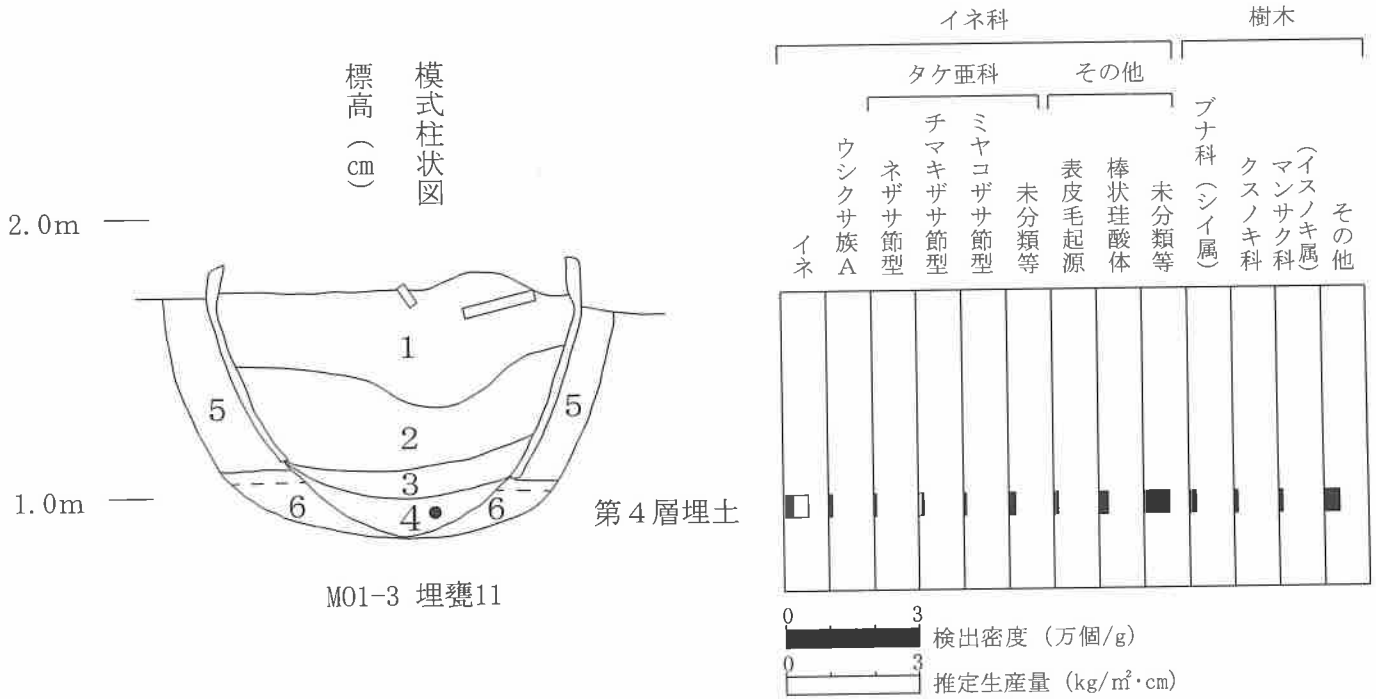


図３　宮島町屋跡 西大西町第１地点における植物珪酸体ダイアグラム

Ⅱ．鉄滓の化学分析

1．はじめに

宮島町屋跡は、広島県廿日市市西大西町に所在する。第１地点南側調査区中央 SK38 および SK40（被熱痕跡があり鍛冶遺構の可能性が指摘されている）の北側隣接地より鉄滓が出土した。そこで、この鉄滓がどのような作業に伴う反応副生物かを検討するために、化学分析を実施することとなった。

2．調査方法

２－１．供試材

出土鉄滓１点（MYZ-1）について調査を行った。表１に試料の履歴と調査項目を示す。

２－２．調査項目

（１）肉眼観察

分析調査を実施する遺物の外観の特徴など、調査前の観察所見を記載した。

（２）顕微鏡組織

鉱滓の鉱物組成の調査などを目的とする。

試料観察面を設定・切り出し後、試験片は樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の３μと１μで鏡面研磨した。また観察には金属反射顕微鏡を用い、代表的な視野を選択して写真撮影を行った。

（３）ビッカース断面硬度

ビッカース断面硬度計（Vickers Hardness Tester）を用いて硬さの測定を行い、文献硬度値に照らして、鉱滓中の晶出物の判定を行った。

試験は鏡面研磨した試料に 136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除した商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用し、荷重は 50gf で測定した。

（４）化学組成分析

出土鉄滓の性状調査のため、構成成分の定量分析を実施した。

・全鉄分（Total Fe）、金属鉄（Metallic Fe）、酸化第一鉄（FeO）：容量法。

・炭素（C）、硫黄（S）：燃焼容量法、燃焼赤外吸収法

・二酸化硅素（SiO_2）、酸化アルミニウム（Al_2O_3）、酸化カルシウム（CaO）、酸化マグネシウム（MgO）、酸化カリウム（K_2O）、酸化ナトリウム（Na_2O）、酸化マンガン（MnO）、二酸化チタン（TiO_2）、酸化クロム（Cr_2O_3）、五酸化燐（P_2O_5）、バナジウム（V）、銅（Cu）、二酸化ジルコニウム（ZrO_2）：ICP（Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer）法 、誘導結合プラズマ発光分光分析。

３．調査結果

MYZ－1：椀形鍛冶滓

（１）肉眼観察

大形（836g）で平面不整楕円状の椀形鍛冶滓である。明瞭な破面はなく完形の滓である。上面はほぼ茶褐色の鉄銹化物で覆われ、着磁性もあるが特殊金属探知機(注1)での反応はない。まとまった金属鉄部が含まれている可能性は低いと考えられる。また上面から側面および下面の一部には細かい木炭痕による凹凸があり、長さ10mm程の木炭の噛み込みもみられる。表面の気孔は少なく重量感のある滓である。

（２）顕微鏡組織

側面端部の断面観察を実施した。写真①上側および右寄りの黒色部は微細な木炭破片である。表層寄りでは鍛冶炭の噛みこみが多数確認された。また木炭の周囲の不定形明灰色部は銹化鉄である。今回観察を実施した側面端部ではまとまった鉄部はなく、金属鉄組織痕跡も不明瞭であった。

写真①右側の微細な薄板状の明灰色部は滓表面に付着した鍛造剥片(注2)で、写真②③はその拡大である。表層（写真上側）のごく薄い明白色層はヘマタイト（Hematite：Fe_2O_3）、中間の灰褐色層はマグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）、内側の厚手の灰色層はウスタイト（Wustite：FeO）である。鉄酸化物の３層構造が明瞭に確認された。

写真①左下は滓部である。素地の暗黒色ガラス質滓中に白色粒状結晶ウスタイト（Wustite：FeO）が晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖といえる。

（３）ビッカース断面硬度

写真④⑤の白色粒状結晶の硬度を測定した。硬度値は 497Hv、511Hv であった。ウスタイト（文献硬度値450～500Hv）とマグネタイト（文献硬度値500Hv～600Hv）の境界に近い数値であり(注3)、両者の混晶となっている可能性が考えられる。

（４）化学組成分析

試料の化学組成を表２に示す。全鉄分（Total Fe）49.49%に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.07%、酸化第１鉄（FeO）9.06%、酸化第２鉄（Fe_2O_3）60.59%の割合であった。造滓成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O＋Na_2O）17.39%と低めで、塩基性成分（CaO＋MgO）も 0.71%と低値であった。また製鉄原料の砂鉄起源の二酸化チタン（TiO_2）は0.15%、バナジウム（V）も0.01%と低い。さらに酸化マンガン（MnO）も0.08%、銅（Cu）0.01%と低値である。

４．まとめ

椀形鍛冶滓（MYZ－1）は鍛錬鍛冶滓に分類される。

砂鉄起源の脈石成分（TiO_2、V）の低減傾向が著しく、鉄酸化物の割合が高めであった。主に鉄素材を熱間

で鍛打加工した時の吹き減り（酸化に伴う損失）で生じたものと推定される。さらに熱間での鍛打加工を証明する微細遺物である、鍛造剥片の付着も確認された。

出土地点の周辺で鍛造鉄器製作（小鍛冶）が行われていた可能性が高いと考えられる。

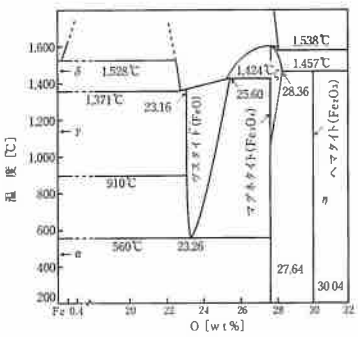
（注１）メタル度とは、金属関係の遺物内部の金属残存状態を、非破壊で推定するため調整された、特殊金属探知機を使用した判定法のことを指す。感度は三段階〔H：high（○）、M：middle（◎）、L：low（●）〕に設定されている。低感度で反応があるほど、内部に大型の金属鉄が残存すると推測される。

特殊金属探知機の詳細な仕様は、以下の文献に記載されている。

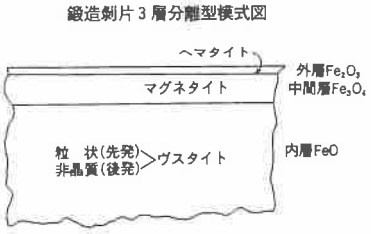
穴澤義功「鉄生産遺跡調査の現状と課題－鉄関連遺物の整理と分析資料の準備について－」『鉄関連遺物の分析評価に関する研究会報告』（社）日本鉄鋼協会　社会鉄鋼工学部会「鉄の歴史－その技術と文化－」フォーラム　鉄関連遺物分析評価研究グループ　2005

（注２）鍛造剥片とは鉄素材を大気中で加熱、鍛打したとき、表面酸化膜が剥離、飛散したものを指す。俗に鉄肌（金肌）やスケールとも呼ばれる。鍛冶工程の進行により、色調は黒褐色から青味を帯びた銀色（光沢を発する）へと変化する。粒状滓の後続派生物で、鍛打作業の実証と、鍛冶の段階を押える上で重要な遺物となる。

鍛造剥片の酸化膜相は、外層は微厚のヘマタイト（Hematite：Fe2O3）、中間層マグネタイト（Magnetite：Fe3O4）、大部分は内層ウスタイト（Wüstite：FeO）の３層から構成される。このうちのヘマタイト相は1450℃を越えると存在しなく、ヴスタイト相は570℃以上で生成されるのはFe－O系平衡状態図から説明される。



Fe-O系平衡状態図



鍛造剥片を王水（塩酸３：硝酸１）で腐食すると、外層ヘマタイト（Hematite：Fe2O3）は腐食しても侵されず、中間層マグネタイト（Magnetite：Fe3O4）は黄変する。内層のウスタイト（Wüstite：FeO）は黒変する。鍛打作業前半段階では内層ウスタイト（Wüstite：FeO）が粒状化を呈し、鍛打仕上げ時になると非晶質化する。鍛打作業工程のどの段階が行われていたか推定する手がかりともなる。

（注３）日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968

ウスタイトは450～500Hv、マグネタイトは500～600Hv、ファヤライトは600～700Hvの範囲が提示されている。

表1 供試試料の履歴と調査項目

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	計測値		メタル度	調査項目								備考
					大きさ(mm)	重量(g)		マクロ組織	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	X線回折	EPMA	化学分析	耐火度	カロリー	
MYZ-1	宮島町屋跡	南側調査区	椀形鍛冶滓	18c後半～19c前半	157×116×65	836.0	錆化(△)		○	○			○			

表2 供試試料の化学組成

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe_2O_3)	*二酸化珪素 (SiO_2)	*酸化アルミニウム (Al_2O_3)	*酸化カルシウム (CaO)	*酸化マグネシウム (MgO)	*酸化カリウム (K_2O)	*酸化ナトリウム (Na_2O)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO_2)	酸化クロム (Cr_2O_3)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P_2O_5)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	二酸化ジルコニウム (ZrO_2)	Σ* 造滓成分	造滓成分 Total Fe	TiO_2 Total Fe
MYZ-1	宮島町屋跡	南側調査区	椀形鍛冶滓	18c後半～19c前半	49.49	0.07	9.06	60.59	12.89	2.61	0.57	0.14	0.59	0.59	0.08	0.15	0.02	0.05	0.45	0.84	0.01	0.01	<0.01	17.39	0.351	0.003

宮島町屋跡 西大西町第１地点の花粉・胞子

1　ツガ属

2　マキ属

3　スギ

4　マツ属単維管束亜属

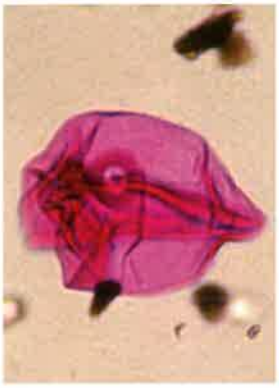
5　イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科

6　コナラ属コナラ亜属

7　コナラ属アカガシ亜属

8　エノキ属-ムクノキ

9　イネ科



10　イネ科

11　タデ属サナエタデ節

12　キク亜科

13　ヨモギ属

14　シダ植物単条溝胞子

15　シダ植物三条溝胞子

10 μm

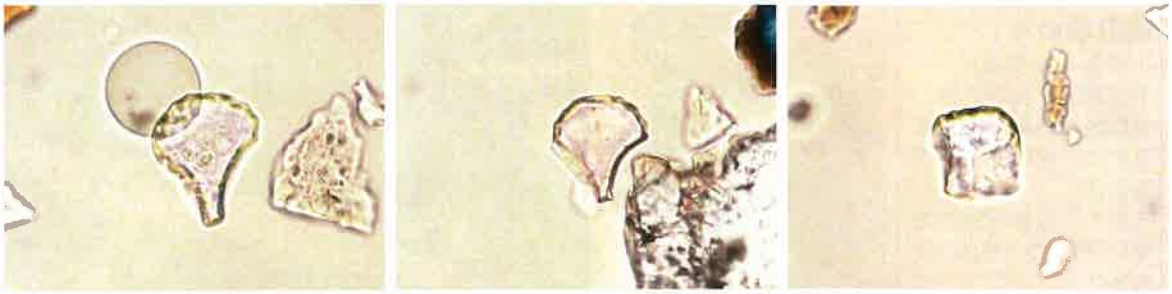
宮島町屋跡 西大西町第１地点の珪藻

1 *Coscinodiscus marginatus*　2 *Thalassionema nitzschioides*　3 *Cyclotella striata-stylorum*　4 *Diploneis interrupta*　5 *Nitzschia cocconeiformis*

6 *Rhoicosphenia abbreviata*　7 *Cocconeis placentula* v. *pseud lineata*　8 *Amphora veneta*　9 *Cymbella leptoceros*　10 *Hantzschia amphioxys*

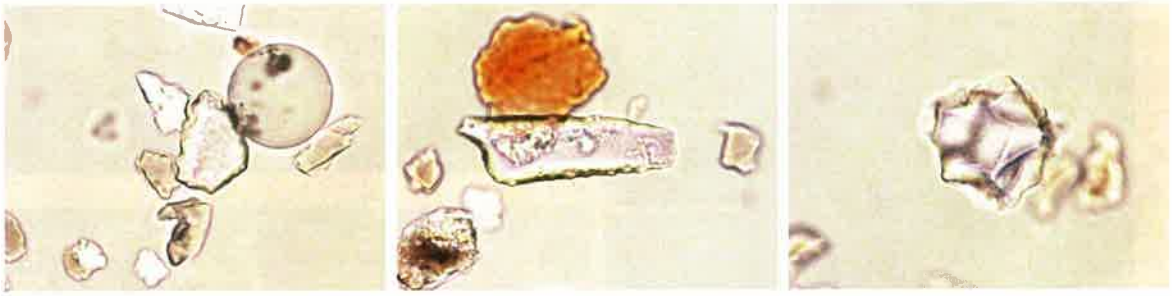
10 μm

宮島町屋跡 西大西町第１地点の植物珪酸体（プラント・オパール）



イネ　イネ　イネ（側面）

ウシクサ族Ａ　ネザサ節型　チマキザサ節型



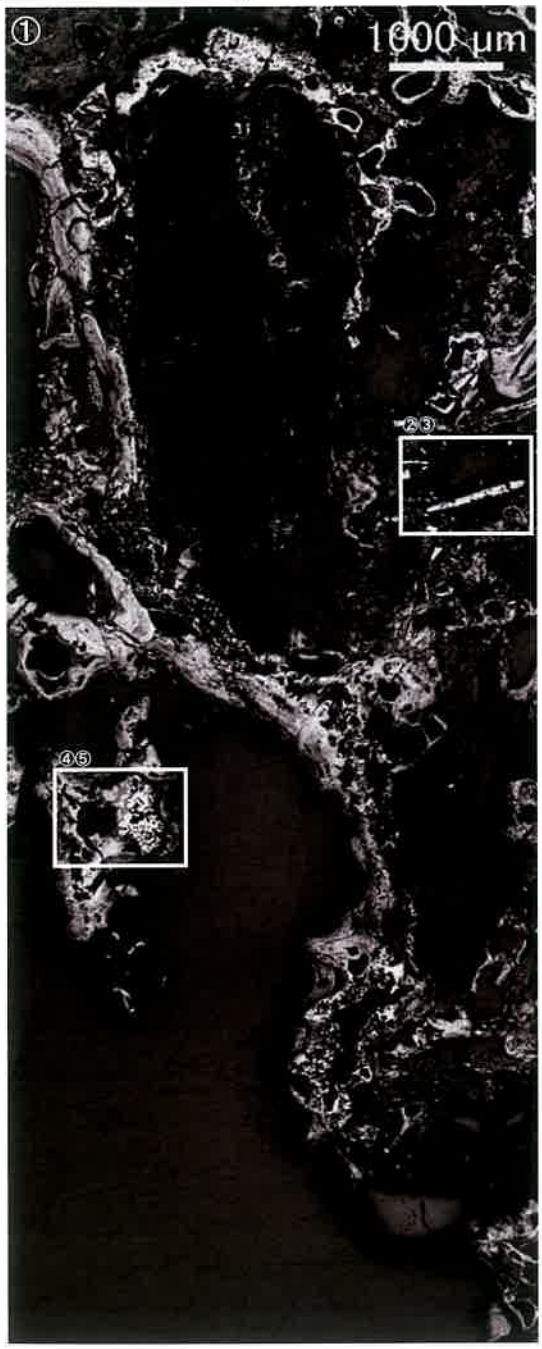
ミヤコザサ節型　表皮毛起源　ブナ科（シイ属）

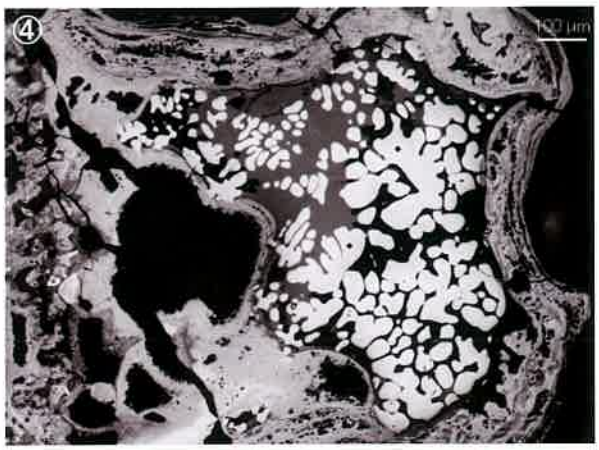
ブナ科（シイ属）　マンサク科（イスノキ属）　海綿骨針

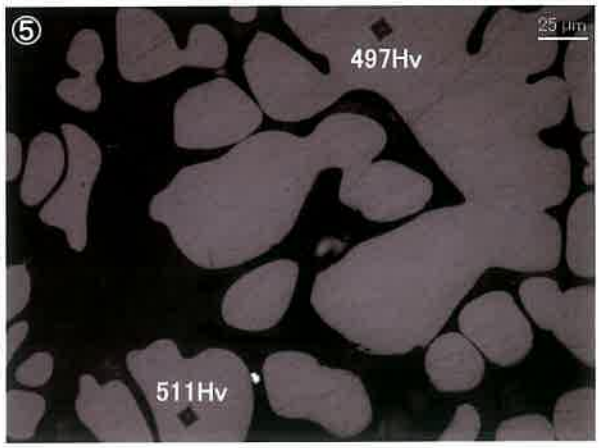
50μm

写真1　椀形鍛冶滓の顕微鏡組織

MYZ-1
椀形鍛冶滓
①黒色部:木炭破片、
不定形灰色部:銹化鉄、
金属鉄組織痕跡不明瞭
薄板状明灰色部:付着鍛造剥片
下側明灰色部:鍛錬鍛冶滓(素地:ガラス質滓、ウスタイト)
②③鍛造剥片拡大







付　表

第１表　土器・陶磁器観察表（北東調査区 SK24）

No,	器種	器形	口径	最大径	底径	高さ	産地	時期
1	土師質	皿	(5.7)	(5.9)	(4.0)	0.9		
2	陶器	皿	6.8	7.0	2.7	1.8	瀬戸美濃	17c
3	陶器	碗	(9.0)	(9.2)	3.2	5.0	関西系	19c前半
4	陶器	碗	8.8	9.1	3.2	5.2	関西系	19c前半
5	陶器	皿	(13.0)	(13.2)	(5.1)	3.6	肥前	1610～1630年代
6	陶器	皿	－	(12.6)	(9.2)	(2.1)	萩焼系	18・19c
7	陶器	皿	－	(18.8)	(9.6)	(3.0)	萩焼	18c・19c
8	陶器	皿	－	－	－	(3.8)	萩焼系	18・19c
9	陶器	灯明皿	(8.6)	(8.8)	－	(1.8)	関西系	19c
10	陶器	灯明皿	(11.5)	(11.7)	－	(1.9)	関西系	19c
11	陶器	油差し	－	8.8	5.4	(5.3)	肥前か	18c頃
12	陶器	瓶	－	7.3	6.4	(2.2)	関西系	19c
13	陶器	瓶	4.2	13.6	9.0	(21.6)	中国地方の窯	19c
14	陶器	瓶	－	(16.5)	(11.8)	(8.5)	中国地方の窯	18・19c
15	陶器	壺の蓋か	(8.1)	10.0	－	(2.8)	中国地方の窯	18・19c
16	陶器	土瓶蓋	5.2	7.5	3.2	1.9	関西系	19c
17	陶器	土瓶蓋	(6.5)	(10.0)	－	(2.8)	関西系	19c
18	陶器	土瓶	(7.7)	(19.0)	－	(6.2)	関西系	19c
19	陶器	土瓶	(8.2)	(16.0)	－	(5.3)	関西系	19c
20	陶器	土瓶	(11.3)	(21.0)	－	(6.7)	関西系	19c
21	陶器	土瓶	－	(17.6)	(11.7)	(2.7)	関西系（中国地方か）	19c
22	陶器	土瓶	－	(16.8)	(9.8)	(3.5)	関西系	19c
23	陶器	土瓶	－	(15.6)	(5.6)	(3.1)	関西系	19c
24	陶器	土瓶	－	(11.8)	(6.6)	(2.0)	関西系	19c
25	陶器	火入	10.6	10.9	－	(3.1)	瀬戸美濃系	江戸中期頃か
26	陶器	香炉	(9.7)	(10.2)	－	(6.6)	関西系	18c～幕末
27	陶器	土鍋	(15.3)	(15.8)	―	(7.6)		
28	陶器	深鉢	－	－	－	(4.0)	肥前	18c前半～中葉
29	陶器	鉢	－	(23.0)	(9.4)	(8.9)	肥前	17c末～18c中葉
30	陶器	火鉢か	－	(25.0)	(14.4)	(10.3)	瀬戸美濃	江戸後期
31	陶器	擂鉢	－	－	－	(5.8)	肥前系	18c
32	陶器	擂鉢	－	－	－	(5.4)	肥前系	18c～19c
33	陶器	擂鉢	(29.0)	(30.4)	－	(7.7)	関西系	
34	陶器	擂鉢	－	－	－	(3.8)	中国地方の窯（山口か）	18・19c
35	陶器	擂鉢	－	－	－	(4.2)	関西系	
36	陶器	擂鉢	(30.6)	(31.9)	－	(11.5)	関西系	
37	陶器	擂鉢	(25.0)	(26.7)	－	(4.9)		
38	陶器	擂鉢	－	(17.4)	12.4	(3.0)	明石	
39	陶器	擂鉢	－	(28.8)	(18.3)	(7.4)	堺か	
40	陶器	擂鉢	17.7	18.1	8.8	6.2	明石か	
41	陶器	擂鉢	25.6	27.0	(13.2)	9.0	堺か	
42	陶器	擂鉢	－	(21.1)	15.8	(6.6)	肥前	18c
43	陶器	擂鉢	－	(24.7)	(10.6)	(10.3)	中国地方の窯	18c
44	陶器	壺	(15.9)	(17.3)	―	(5.9)	福岡か山口	18・19c
45	陶器	甕	(19.6)	(22.2)	－	(11.9)		18・19c
46	磁器	壺	－	(18.1)	14.1	(9.5)	信楽か	18・19c
47	陶器	甕	－	－	－	(12.0)	中国地方の窯か	19c
48	陶器	甕	(31.4)	(34.6)	－	(11.0)	肥前	17c後半～18c前半
49	陶器	甕	―	(38.8)	(20.0)	(27.5)	肥前	17c後半～18c前半
50	磁器	小碗	－	(5.6)	(3.7)	(4.3)	肥前染付	17c後半頃

No,	器種	器形	口径	最大径	底径	高さ	産地	時期
51	磁器	小碗	(7.2)	(7.4)	(2.6)	3.7	肥前染付	1770～1810年代
52	磁器	小碗	－	(6.6)	3.3	(1.5)	肥前系染付	1780～1810年代
53	磁器	小碗	7.7	8.2	3.3	5.2	肥前系染付	1780～1810年代
54	磁器	小碗	8.8	9.0	3.8	5.7	肥前系染付	1780～19c初頭
55	磁器	小碗	8.2	8.4	3.4	4.9	肥前系染付	1780～1810年代
56	磁器	小碗	(8.2)	(8.5)	3.3	5.6	肥前系染付 (肥前の可能性高い)	1780～1810年代
57	磁器	小碗	(7.9)	(8.6)	3.5	5.3	肥前系染付	1780～19c前半
58	磁器	小碗	－	(6.6)	3.3	(2.2)	肥前系染付	18c末～19c前半
59	磁器	小碗	(9.2)	(9.4)	－	(4.1)	肥前系染付	19c前半
60	磁器	碗蓋	(9.6)	(9.8)	(3.9)	3.0	肥前白磁	18c後半
61	磁器	碗蓋	－	(6.4)	3.4	(1.8)	肥前青磁染付	18c後半
62	磁器	碗蓋	9.3	9.5	3.9	3.7	肥前青磁染付	18c後半
63	磁器	碗蓋	(10.2)	(10.4)	(5.8)	2.7	肥前染付	1780～1810年代
64	磁器	碗	(10.2)	(10.8)	－	(5.3)	肥前	18c前半頃
65	磁器	碗	(11.0)	(11.1)	－	(3.8)	肥前	18c後半
66	磁器	碗	(11.0)	(11.2)	4.4	6.2	肥前白磁	18c後半
67	磁器	碗	(10.8)	(11.0)	－	(5.5)	肥前白磁	18c後半
68	磁器	碗	(11.0)	(11.2)	4.0	6.3	肥前青磁染付	18c後半
69	磁器	碗	(10.6)	(10.8)	(6.1)	6.5	肥前白磁	18c後半
70	磁器	碗	(10.6)	(10.7)	(4.2)	6.2	肥前染付	18c後半
71	磁器	碗	－	(10.3)	(3.9)	3.7	肥前系	18c後半～19c前半
72	磁器	碗	(9.2)	(9.4)	3.4	4.7	肥前系染付	18c第4四半期～19c初頭
73	磁器	碗	－	(6.6)	5.2	(2.3)	肥前系染付	18c第4四半期～19c前半
74	磁器	碗	(10.0)	(10.2)	(6.2)	6.0	肥前染付	1780～1810年代
75	磁器	碗	(11.0)	(11.2)	(6.0)	6.5	肥前系	1780～19c初頭
76	磁器	碗	(10.2)	(10.4)	－	(4.7)	肥前系染付	1780～1840年代
77	磁器	碗	(11.7)	(12.0)	－	(4.2)	肥前系染付	1780～19c前半
78	磁器	碗	(9.8)	(10.0)	5.4	5.6	肥前系染付 (砥部可能性含む)	1780～19c前半
79	磁器	碗	(10.4)	(10.6)	5.6	6.6	肥前系染付	1780～19c前半
80	磁器	碗	10.3	10.6	5.0	6.3	肥前系染付で近場の窯	1780～19c前半
81	磁器	碗	(9.5)	(9.6)	－	(4.8)	肥前系染付	1820～1860年代
82	磁器	碗	(10.6)	(10.8)	－	(4.5)	肥前系染付	1820～1860年代
83	磁器	碗	(11.8)	(12.0)	－	(5.6)	肥前系染付	1820～1860年代
84	磁器	紅猪口	7.2	7.4	3.2	3.8	肥前染付	18c
85	磁器	紅猪口	(6.6)	(6.8)	2.4	3.5	肥前白磁	18c前半頃
86	磁器	変形小皿	(8.4)	(8.6)	5.0	2.4	肥前染付	18c前半～中葉
87	磁器	皿	(14.2)	(14.4)	(7.9)	3.1	肥前波佐見系	18c後半
88	磁器	皿	(17.5)	(17.8)	(9.4)	3.6	肥前波佐見系	18c後半
89	磁器	皿	－	(10.8)	7.0	(0.8)	肥前系染付	18c後半～19c初頭
90	磁器	皿	－	(10.7)	8.2	(1.1)	肥前系染付 (肥前の可能性高い)	1780～1790年代 (寛政期の可能性高い)
91	磁器	皿	(13.2)	(13.4)	(8.4)	2.9	肥前系染付	18c後半～19c初頭
92	磁器	角鉢	(16.5)	(16.9)	－	(6.5)	肥前染付	1780～1820年代
93	磁器	段重	(13.2)	13.6	8.2	5.7	肥前染付	1780～幕末
94	磁器	蓋	(6.4)	(7.6)	－	(1.7)	肥前系染付	18c後半頃
95	磁器	蓋	(6.9)	(7.7)	－	(1.4)	肥前染付	18c後半～19c初頭
96	磁器	火入	(8.7)	(9.0)	(4.8)	5.1	肥前系染付	18c後半頃
97	磁器	瓶	－	(8.7)	(6.6)	(8.1)	肥前青磁	18c
98	磁器	瓶	－	7.4	5.6	(5.8)	肥前青磁(波佐見辺り)	18c後半
99	土師質	火鉢	(21.0)	(26.7)	―	(16.2)		
100	瓦質	鉢か	(12.3)	(14.2)	－	(4.0)		

No,	器種	器形	口径	最大径	底径	高さ	産地	時期
101	瓦質	火鉢か	–	–	–	(3.3)		
102	瓦質	火鉢	(25.8)	(27.6)	–	(4.1)		
103	瓦質	火鉢か	(25.4)	(27.3)	–	(7.8)		
104	瓦質	羽釜	–	–	–	(5.5)		
105	瓦質	羽釜	(16.7)	(21.5)	–	(4.1)		
106	瓦質	羽釜	(19.8)	(23.7)	–	(8.6)		
107	瓦質	羽釜	(19.9)	(27.8)	–	(7.3)		
108	瓦質	羽釜	(21.0)	(27.6)	–	(7.3)		
109	瓦質	羽釜	(15.0)	(21.0)	–	(4.5)		
110	瓦質	羽釜	(20.6)	(27.7)	–	(8.3)		
111	瓦質	羽釜	(18.2)	(25.4)	—	(5.0)		
112	瓦質	羽釜	(18.0)	(24.4)	–	(6.6)		

第 2 表　土器・陶磁器観察表 (北東調査区 埋甕 11)

No,	出土地点	器種	器形	口径	最大径	底径	高さ	産地	時期
117	上層	陶器	灯明皿	(9.1)	(9.3)	–	(1.4)	関西系	19c
118	上層	陶器	鉢	–	(12.8)	9.4	(3.1)	肥前	17c末～18c前半
119	上層	磁器	香炉か	(16.7)	(17.0)	–	(7.7)	肥前青磁(波佐見の可能性高い)	17c後半頃
120	掘方	磁器	鍋蓋	–	(10.0)	4.3	(2.2)	関西系	19c
129	埋甕	土師質	大甕	60.6	65.6	—	(41.3)		

第 3 表　土器・陶磁器観察表 (南調査区 各遺構)

No,	出土地点	器種	器形	口径	最大径	底径	高さ	産地	時期
130	SK26	土師質	皿	5.0	5.1	4.1	1.0		
132	SK27	土師質	皿	(7.4)	(7.6)	(3.5)	1.5		
133	SK27	陶器	土瓶	–	(16.6)	(10.0)	(1.7)		
134	SK27	陶器	擂鉢	–	–	–	(3.9)	関西系	
135	SK27	磁器	碗	–	(5.8)	4.1	(1.7)	肥前青磁	18c
141	SK29	瓦質	鍋	–	–	–	(1.1)		
143	SK30	土師質	甕	–	–	–	(5.1)		
148	SK31	土師質	皿	(9.0)	(9.2)	(5.3)	1.5		
149	SK31	土師質	皿	(8.7)	(8.8)	(5.2)	1.3		
150	SK31	陶器	土瓶蓋	7.0	10.5	–	4.1		18c前半か
151	SK31	磁器	碗	(8.8)	(9.0)	(4.1)	4.1	肥前系白磁	
152	SK31	磁器	碗	–	(12.4)	(5.3)	(2.8)	肥前系染付	17cか
153	SK31	磁器	皿	–	(8.4)	4.2	(2.0)	肥前波佐見系染付	17c後半
154	SK31	磁器	瓶	1.8	7.6	(5.0)	12.3	肥前染付	18c前半
155	SK31	磁器	瓶	3.4	(5.0)	–	(9.9)	肥前系染付	18c前半か
161	SK32	土師質	皿	–	(6.8)	(4.3)	(1.1)		
162	SK33	陶器	鉢	–	–	–	(9.8)	肥前	1690～1770年代
165	SK35	瓦質	鍋	–	–	–	(1.8)		
167	SK37	陶器	皿	(10.4)	(10.8)	(6.0)	2.0	瀬戸美濃	1590～1610
168	SK37	陶器	擂鉢	–	–	–	(7.1)	関西系	
169	SK37	陶器	擂鉢	–	(26.9)	(16.8)	(6.7)	関西系	
172	SK38	土師質	皿	(13.6)	(13.7)	(7.2)	2.0		
173	SK38	土師質	皿	(10.8)	(11.0)	(6.4)	1.8		
174	SK38	陶器	碗	–	(7.8)	(4.6)	(2.7)	肥前	1594～1610年代
175	SK38	陶器	碗	–	(8.9)	4.5	(2.0)	肥前	1580～1610年代
176	SK38	陶器	碗	–	(7.9)	4.2	(1.9)	肥前	1594～1610年代

No.	出土地点	器種	器形	口径	最大径	底径	高さ	産地	時期
177	SK38	陶器	皿	−	(7.8)	4.2	(1.4)	肥前	1594〜1610年代
178	SK38	陶器	皿	−	(14.7)	(9.3)	(2.9)	肥前	1594〜1610年代
179	SK38	陶器	擂鉢	−	−	−	(4.4)	備前	17c
180	SK38	陶器	擂鉢	−	−	−	(5.5)	関西系	
181	SK38	陶器	花活	−	(18.4)	(16.2)	(8.3)	備前	17c
182	SK39	陶器	甕	−	−	−	(7.0)	備前	15c前半〜中葉
183	SK38	磁器	碗	(8.8)	(9.0)	3.8	5.0	肥前系染付	
184	SK38	磁器	碗蓋	−	(8.9)	4.2	(2.7)	肥前青磁	1760〜1780年代
185	SK38	瓦質	擂鉢	−	−	−	(5.1)		
186	SK38	瓦質	釜	−	−	−	(5.3)		
187	SK38	瓦質	甕	−	−	−	(5.7)		
190	SK39	磁器	猪口	(6.2)	(6.4)	(2.3)	2.4	肥前系染付	
193	SK40	土師質	皿	5.4	5.5	3.9	1.6		
194	SK40	陶器	皿	−	(7.7)	6.0	(0.8)	瀬戸美濃	
195	SK40	陶器	皿	(12.0)	(12.2)	−	(1.6)		
196	SK40	陶器	皿	−	(13.2)	(5.2)	(4.0)	肥前	1594〜1610年代
197	SK40	陶器	擂鉢	−	−	−	(9.8)	関西系	〜18c前葉か
198	SK40	磁器	皿	(13.1)	(13.3)	5.5	2.6	肥前染付	17c
199	SK40	土師質	甕	(18.0)	(22.1)	−	(4.9)		
200	SK40	瓦質	鍋	−	−	−	(3.0)		
201	SK40	瓦質	甕	−	−	−	(18.0)		
204	SK41	土師質	皿	(9.0)	(9.2)	(5.8)	1.0		
205	SK41	磁器	碗	(10.4)	(10.6)	−	(3.1)	肥前波佐見系染付	1750〜1770年代
206	SK41	土師質	焙烙	(17.1)	(17.8)	(13.4)	3.6		
208	SK42	磁器	碗	(9.0)	(9.3)	−	(2.3)	肥前系染付	18c前半
209	SK42	瓦質	甕	−	−	−	(26.8)		
211	SK45	陶器	碗	−	(9.4)	4.6	(3.0)	瀬戸美濃天目	16c後半〜17c第3四半期
215	石組15	陶器	土瓶	−	(13.3)	(10.2)	(1.5)		
217	石組15	陶器	皿	−	(13.4)	6.8	(2.5)	関西系	17〜18c

第４表　土器・陶磁器観察表（東調査区 石積み裏込め）

No.	器種	器形	口径	最大径	底径	高さ	産　地	時　期
218	土師質	皿	(4.7)	(5.1)	(3.0)	1.5		
219	土師質	皿	−	(5.0)	4.0	(1.1)		
220	陶器	碗	−	−	−	(3.2)	瀬戸美濃	16c〜17c前半
221	陶器	小鉢か	(7.9)	(8.6)	(5.1)	4.2	備前	16c末頃
222	陶器	擂鉢	−	(20.3)	(12.4)	(5.0)	備前	16c第4四半期〜17c第1四半期
223	瓦質	羽釜	(15.4)	(25.0)	−	(6.8)		
224	瓦質	鍋	−	−	−	(3.2)		
225	瓦質	鍋	(23.0)	(24.0)	−	(3.4)		

第５表　土器・陶磁器観察表（遺物包含層）

No.	出土地点	器種	器形	口径	最大径	底径	高さ	産地	時期
228	北東調査区北西側	陶器	鉢か皿	−	(12.3)	(6.0)	(5.7)	肥前	18c頃
229	北東調査区北西側	陶器	灯明皿	(8.7)	(8.9)	−	1.2	関西系	19c
230	北東調査区西側	陶器	瓶	−	8.6	7.0	(2.0)	近場の窯	18c〜19c前半
231	北東調査区 西側・北西側	陶器	瓶	−	(11.4)	9.0	(7.1)	肥前の可能性あり	17c末〜18c中葉
232	北東調査区西側	陶器	火入か	−	(11.2)	(11.0)	(5.8)	瀬戸美濃	江戸中期か
233	北東調査区西側	磁器	碗蓋	(7.8)	(8.0)	(3.1)	2.3	肥前染付	19c前半頃
234	北東調査区北西側	磁器	碗蓋	(9.2)	(9.4)	(4.2)	2.5	肥前白磁	18c後半
235	北東調査区西側	磁器	碗蓋	(10.8)	(11.0)	(6.2)	3.0	肥前系染付	1780〜1840年代

No.	出土地点	器種	器形	口径	最大径	底径	高さ	産地	時期
236	北東調査区北西側	磁器	碗蓋	8.1	8.2	3.7	3.3	肥前青磁染付	18c後半
237	北東調査区 旧試掘坑周辺	磁器	碗蓋	9.8	10.0	4.1	3.3	肥前青磁染付	18c後半
238	北東調査区西側	磁器	蓋物の蓋	(13.8)	(15.4)	(5.3)	(3.8)	肥前	1780～19c前半
239	北東調査区西側	磁器	蓋	(10.8)	(11.0)	－	(1.8)	肥前系青磁	
240	北東調査区西側	磁器	小碗	(8.2)	(8.4)	(3.1)	5.6	肥前系染付	19c前半
241	北東調査区北西側	磁器	碗	8.8	9.0	4.0	4.9	肥前波佐見系か	18c後半
242	北東調査区西側	磁器	碗	(11.6)	(11.8)	(4.6)	6.4	肥前	18c後半
243	北東調査区 西側・北西側	磁器	碗	11.6	11.9	5.0	5.2	肥前白磁か	18c中葉～末
244	北東調査区北西側	磁器	碗	－	(7.4)	3.1	(3.2)	肥前系染付	18c後半
245	北東調査区西側	磁器	碗	－	(9.5)	4.5	(3.1)	肥前染付	18c後半
246	北東調査区西側	磁器	紅猪口	7.0	7.2	2.4	3.2	肥前白磁	18c代
247	北東調査区西側	磁器	紅猪口	(6.3)	(6.5)	2.6	3.5	肥前染付・色絵	18c
248	北東調査区西側	磁器	紅皿	4.5	4.6	0.9	1.6	肥前	18c後半～19c初頭
249	北東調査区北西側	磁器	瓶	－	(8.3)	6.2	(4.5)	肥前系青磁	18c
250	北東調査区西側	磁器	瓶	－	(8.0)	5.2	(2.4)	肥前系(波佐見	江戸後期頃
251	東調査区東端	磁器	袋物の瓶	－	(8.4)	(5.5)	(4.2)	肥前染付	1730～1770年代
252	北東調査区西側	磁器	仏飯器	－	6.2	4.0	(5.4)	肥前	18c後半
253	北東調査区西側	磁器	香炉	(20.4)	(22.7)	－	(3.0)	肥前系	1780～幕末
255	東調査区東	陶器	碗	－	(7.1)	4.0	(2.3)	肥前	1590～1630年代
256	東調査区南端	陶器	皿	－	(13.6)	5.8	(3.0)	肥前	1590～1610年代
257	東調査区	磁器	碗	－	(7.8)	4.9	(2.1)	漳州	16c末～17c初頭
258	東調査区東	磁器	碗	(11.0)	(11.1)	－	(5.6)	肥前青磁	1630～1640年代
259	東調査区東	陶器	鉢	(29.0)	(31.3)	－	(5.6)	備前	16c第4四半期～ 17c第1四半期
260	東調査区東端	土師質	鍋	(21.5)	(23.1)	－	(4.1)		
261	東調査区南端 貝層	土師質	皿	8.5	8.6	4.9	1.4		
262	南調査区南東端 貝層	陶器	碗	－	(11.4)	(5.4)	(2.8)	肥前	1580～1610年代
263	南調査区南東端 貝層	陶器	擂鉢	－	－	－	(6.6)	備前	16c第4四半期 ～17c第1四半期
264	南調査区南東端 貝層	陶器	擂鉢	－	－	－	(4.7)	備前	
265	南調査区南東端 貝層	磁器	碗	－	(8.3)	4.2	(3.4)	肥前白磁	1610～1630年代
266	東調査区南端 貝層	土師質	鍋	(26.6)	(27.0)	－	(6.5)		
270	南調査区南東端 貝層直下	土師質	皿	(6.0)	(6.2)	(4.3)	1.3		
271	南調査区南東端 貝層直下	磁器	皿	－	(10.2)	(5.4)	(1.7)	肥前染付	1610～1650年代か
273	南調査区北端 トレンチ貝層	陶器	皿	(12.3)	(12.6)	－	(1.6)	肥前	1610～1650年代
274	南調査区北端 トレンチ床SK上面	土師質	皿	－	(11.5)	(7.8)	(1.2)		

第６表　土製品観察表

No.	出土地点	器種	最大長	最大幅	最大厚	孔の幅	重量(g)	備考
165	石積み裏込め	土錘	4.6	0.9	0.9	0.3	3.0	
131	SK26	土錘	4.0	1.2	1.0	0.3	6	手づくね
136	SK27	円盤状土製品	4.9	5.4	1.6	－	51	平瓦の破片を加工
156	SK31	円盤状土製品	5.3	5.1	1.3	－	51	備前焼甕の破片を加工
157	SK31	土製独楽	2.6	2.6	(1.6)	0.2	7	梅に唐草文(上面)
158	SK31	土製独楽	2.7	2.7	1.5	0.3	7	桜に唐草文(上面)
267	南調査区南東 端貝層	土錘	3.5	1.0	0.9	0.4	3	手づくね
272	南調査区南東 端貝層直下	土錘	3.6	1.2	1.0	0.5	4	手づくね

第７表　瓦製品観察表

No.	出土地点	器形	最大長	最大幅	最大厚	その他計測値（cm）
113	SK24	丸瓦	(12.1)	14.6	1.7	玉縁長:1.7
114	SK24	軒平瓦	(5.2)	(15.2)	(3.4)	脇区右:4.0　周縁高:4.1　紋様区上下幅:1.9 周縁幅:上部1.0　下部:0.8　顎部厚1.7　平瓦厚さ1.1
115	SK24	軒平瓦	(4.8)	(15.0)	(3.7)	脇区右:3.2　周縁高:3.8　紋様区上下幅:1.7 周縁幅:上部1.3　下部:0.7　顎部厚1.0　平瓦厚さ1.1
188	SK38	軒丸瓦	(2.4)	(6.4)	(4.5)	外区外縁幅2.1高さ1.4　外区内縁幅1.1 巴文？珠文(6)径0.5高さ0.4
202	SK40	軒平瓦	(3.3)	(4.1)	(2.9)	文様区上下幅2.0　周縁幅下部0.8　顎部厚2.3 花弁文？
207	SK41	軒丸瓦	(2.6)	(6.1)	(7.3)	外区外縁幅2.2高さ0.5　外区内縁幅1.3 三ツ巴文(右巻き)珠文(4)径0.4高さ0.1

第８表　石製品観察表

No.	出土地点	器種	最大長	最大幅	最大厚	材質	重量(g)	備考
116	SK24	砥石	7.8	7.3	3.7	細粒珪長岩	366	研面3面
121	埋甕11掘方	砥石	(3.5)	(5.6)	(2.2)	細粒珪長岩	63	研面3～4面
159	SK31	茶臼(上臼)	(14.2)	(14.2)	9.8	凝灰岩	876	横打穴あり
191	SK39	砥石	9.0	6.6	1.8	珪質凝灰岩	125	仕上げ用砥石2面使用
210	SK42	浮	9.1	7.3	4.5	流紋岩質軽石	96	径0.6cmの孔
212	SK45	砥石	(6.3)	3.9	1.0	細粒凝灰岩	38	2面使用
214	石組15	砥石	9.2	6.7	5.4	細粒珪長岩	331	荒砥4面使用
254	遺物包含層	石臼(上臼)	(17.7)	(8.8)	8.6	角閃玢岩	1150	横打穴あり

第９表　金属製品観察表

No.	出土地点		最大長	最大幅	最大厚	材質	重量(g)	特　徴
122	埋甕11第1層	飾り金具	2.3	(2.3)	0.05	銅	2	五弁の花形　孔の径:0.35mm
123	埋甕11第1層	飾り金具？	1.9	0.8	0.5	銅	2	釘や鋲の頭部を覆う飾り金具か
124	埋甕11第1層	鎹	(5.8)	2.1	0.7	鉄	13	木質付着
125	埋甕11第1層	鎹	(3.5)	2.4	0.5	鉄	9	木質付着
126	埋甕11第1層	釘	(3.5)	0.9	0.3	鉄	3	頭部は折り曲げにより一体整形
127	埋甕11第1層	釘	6.4	0.6	0.5	鉄	10	断面方形　頭部は錆により細部不明
128	埋甕11第1層	板	3.1	4.4	1	鉄	9	圭状の鉄板の片方を折り曲げている
137	SK27	簪	11.5	(1.3)	0.1	銅	5	
144	SK30	釘	4.9	0.7	0.4	銅	7	頭部折り曲げ
145	SK30	釘	3.4	0.6	0.3	鉄	2	頭部折り曲げ
146	SK30	釘？	7.4	0.9	0.5	鉄	13	頭部折り曲げか
147	SK30	不明製品	(3.7)	2.8	0.3	鉄	9	
160	SK31	不明製品	(6.8)	1.0	0.6	鉄	12	
163	SK33	釘	1.9	2.1	0.3	鉄	3	頭部折り曲げ、L字状に曲がる
164	SK33	鋲	0.9	0.2	0.2	銅	＜1	
170	SK37	釘状製品	4.0	0.7	0.2	鉄	2	網などをつくろう針か
171	SK37	鎹？	(3.9)	0.8	0.3	鉄	4	
189	SK38	鎹	(6.8)	(2.4)	0.3	鉄	26	木質付着
192	SK39	板	5.2	4.7	0.1	鉄	20	用途不明
203	SK40	留金具	2.2	0.6	0.1	銅	＜1	銅線を曲げたもの
213	SK45	煙管(吸口)	5.7	0.4	0.4	銅	5	
216	石組15	釘	4.9	0.5	0.3	鉄	4	頭部叩き出し

第 10 表　古銭観察表

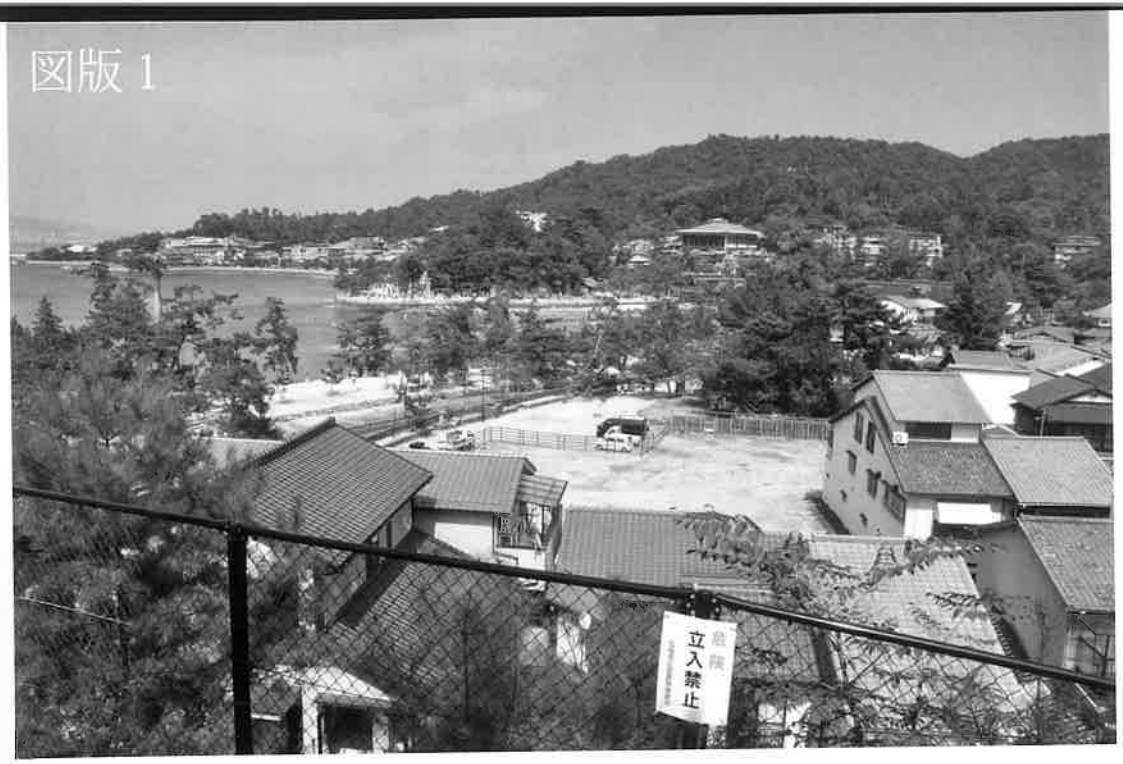
No.	出土地点	銭貨名	銭径(cm)	内径(cm)	銭厚(cm)	材質	重量(g)	備考
138	SK27	不明	縦:2.55 横:2.6	縦:0.6 横:0.55	0.15	銅	4	銭名判読難しい
139	SK27	不明	縦:2.45 横:2.45	縦:0.6 横:0.6	0.10	銅	4	状態悪い
140	SK27	不明	縦:2.5 横:2.4	縦:0.6 横:0.6	0.15	銅	3	状態悪い
142	SK29上層	寛永通寶	縦:2.25 横:2.25	縦:0.6 横:0.6	0.07	銅	2	裏に「足」
166	SK36	寛永通寶	縦:− 横:2.2	縦:− 横:0.6	0.10	銅	1	下半部欠損
268	南調査区 南東端貝層	元豊通寶	縦:2.4 横:2.4	縦:0.7 横:0.7	0.10	銅	3	
269	南調査区 南東端貝層	元豊通寶	縦:2.4 横:2.4	縦:0.65 横:0.65	0.07	銅	3	

第 11 表　骨角器観察表

No.	出土地点	器種	最大長	最大幅	最大厚	材質	重量(g)	備考
227	石積み裏込め	加工片	4.0	1.2	1.0	鹿角	4	加工後に不要部分として廃棄か

写真図版

図版 1



a．調査前遠景
（西から）

b．調査前近景
（東から）

c．調査区全景
（西から）

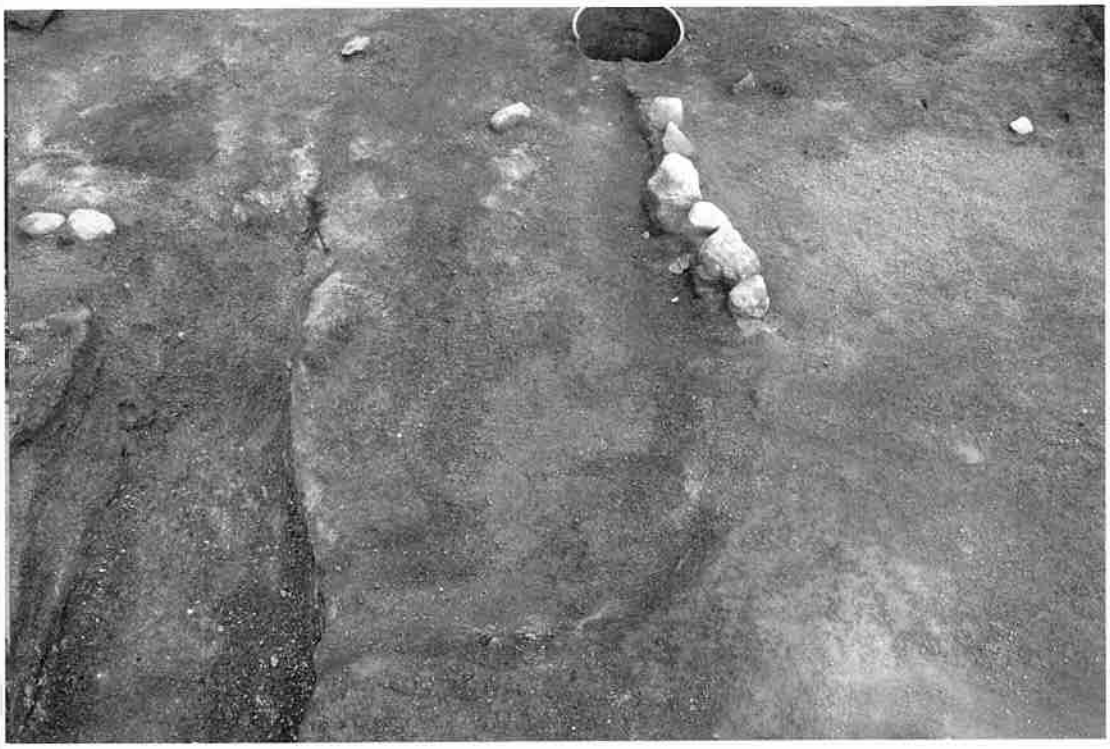
a. 北東調査区完掘状況（南から）

b. 北東調査区完掘状況（西から）

c. 北東調査区土層断面（南から）

図版3

a．北東調査区土層断面（西から）



b．SK24 完掘状況（北から）

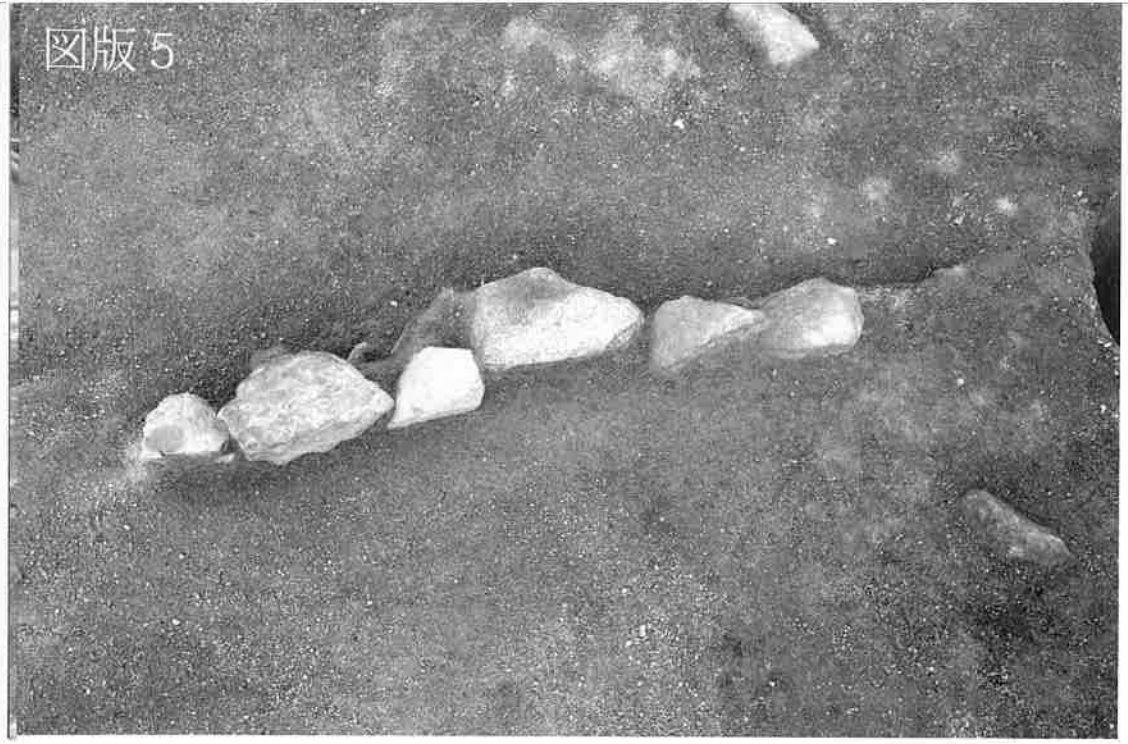
c．SK24 完掘状況（西から）

a. 埋甕 11 半裁状況
（南から）

b. 埋甕 11 内部完掘
状況（西から）

c. 石列 7 検出状況
（南から）

図版 5



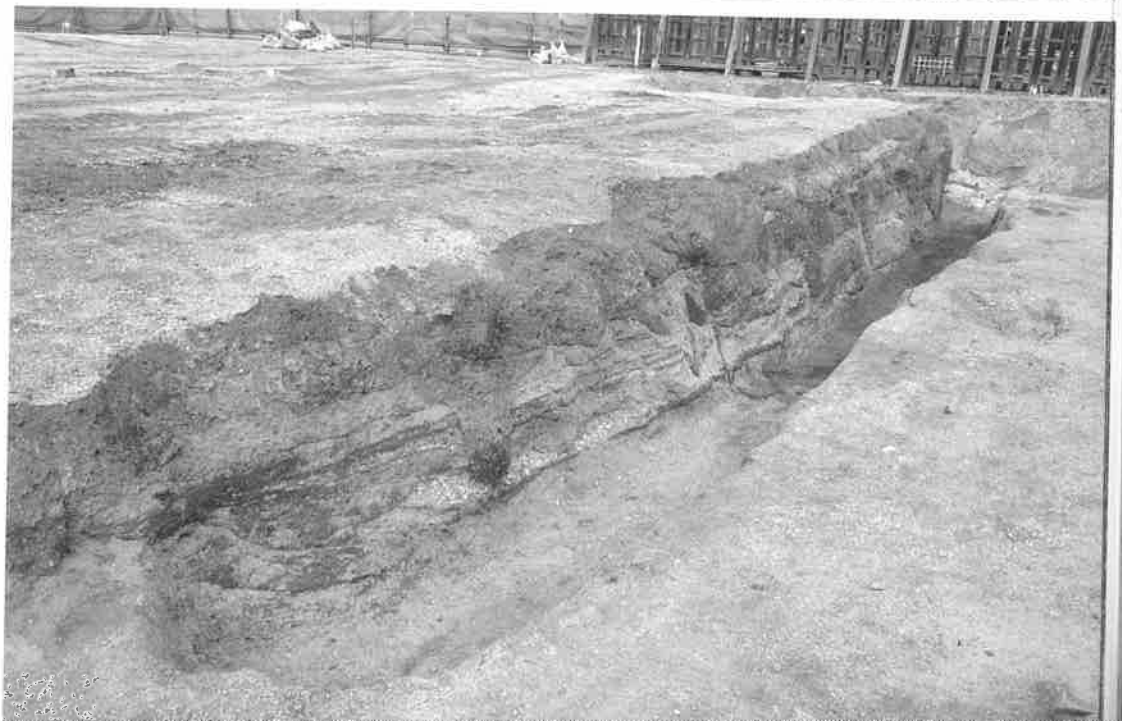
a．石列 8 検出状況
（南から）

b．石列 8 検出状況
（西から）

c．石列 9 完掘状況
（南から）

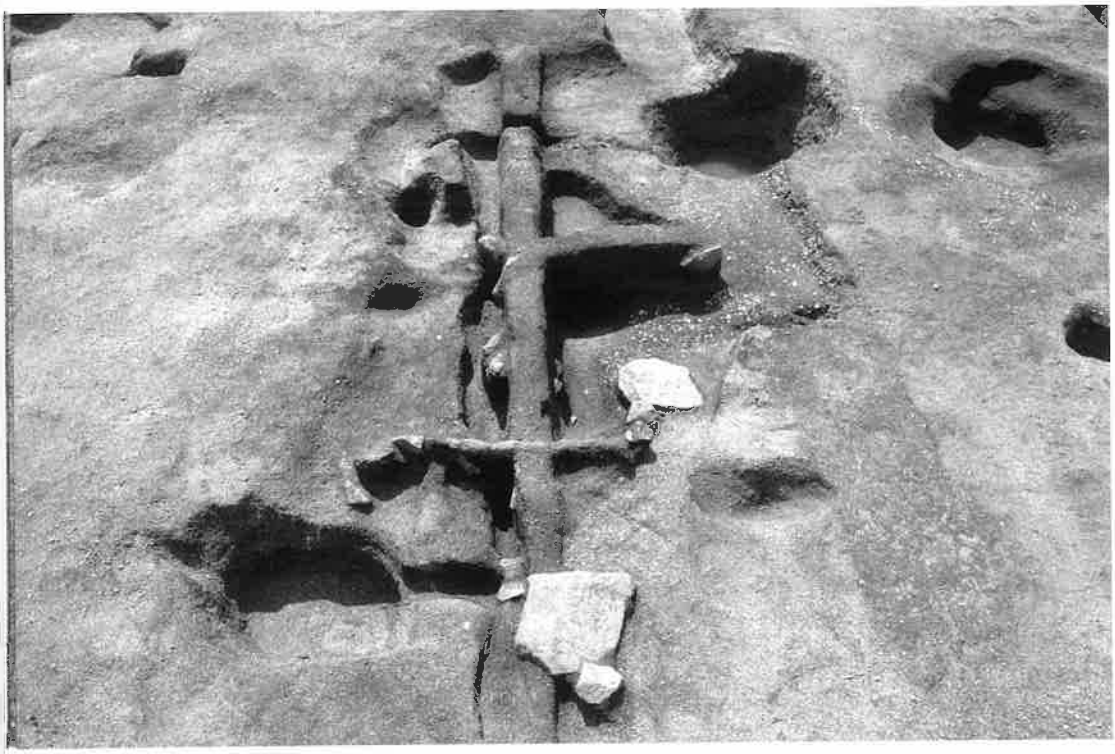
a. 石列９完掘状況
（西から）

b. 南調査区調査
状況（南東から）



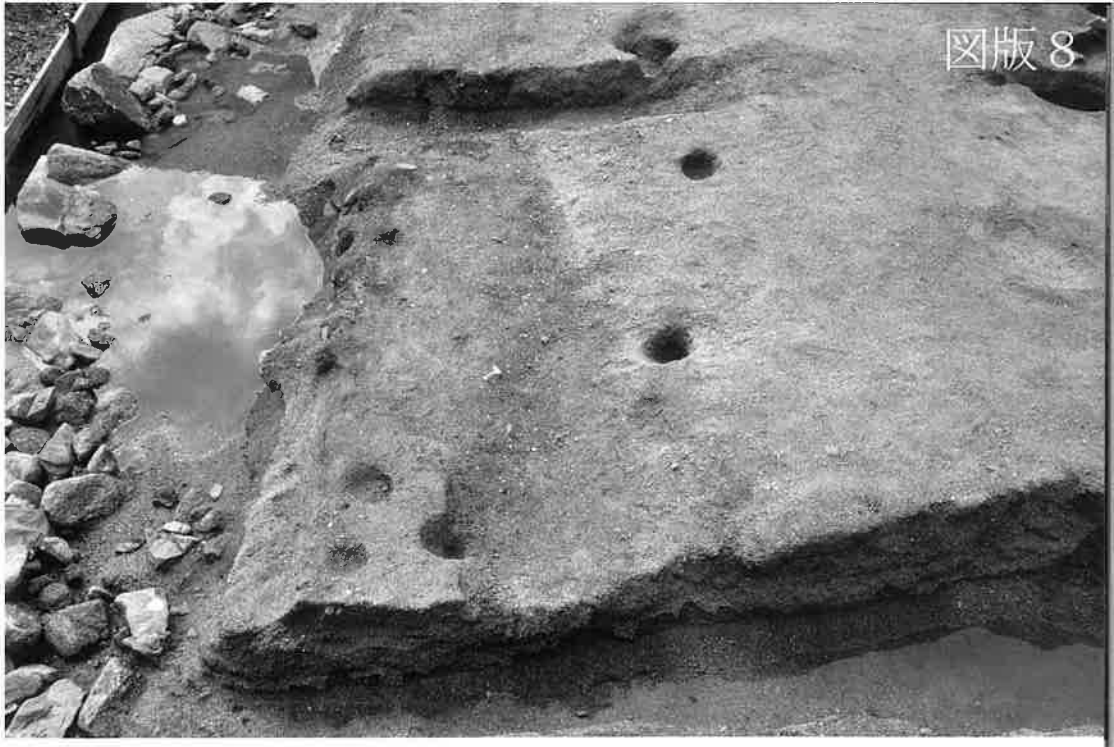
c. 南調査区北端土層
堆積状況（南西から）

a．南調査区西側
完掘状況（北から）



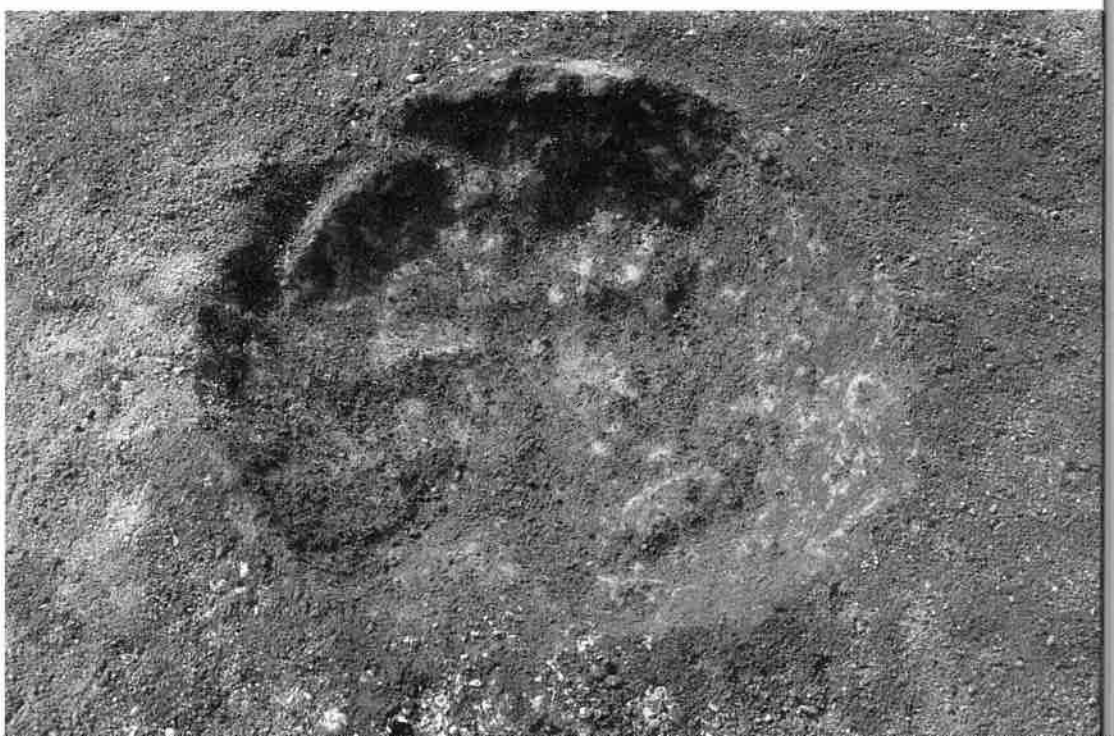
b．南調査区中央
調査状況（北から）

c．南調査区南東側
完掘状況（北から）

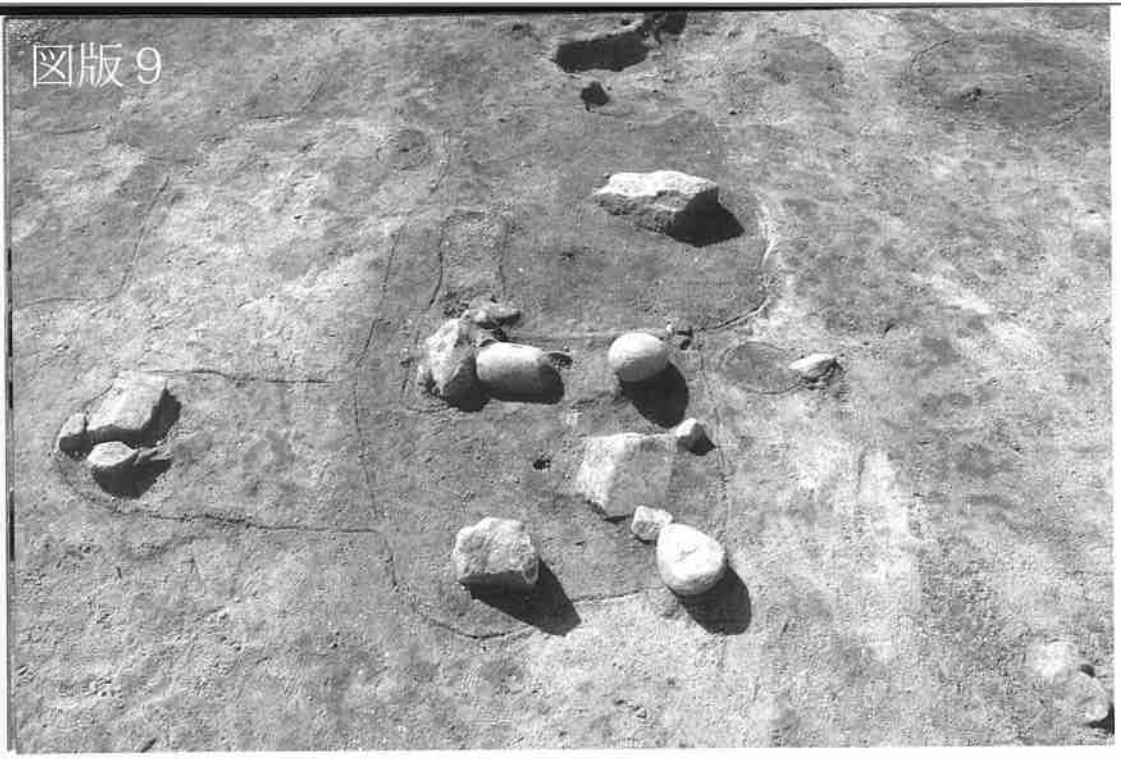


a．南調査区北東側
完掘状況（北から）

b．南調査区北側
完掘状況（北から）



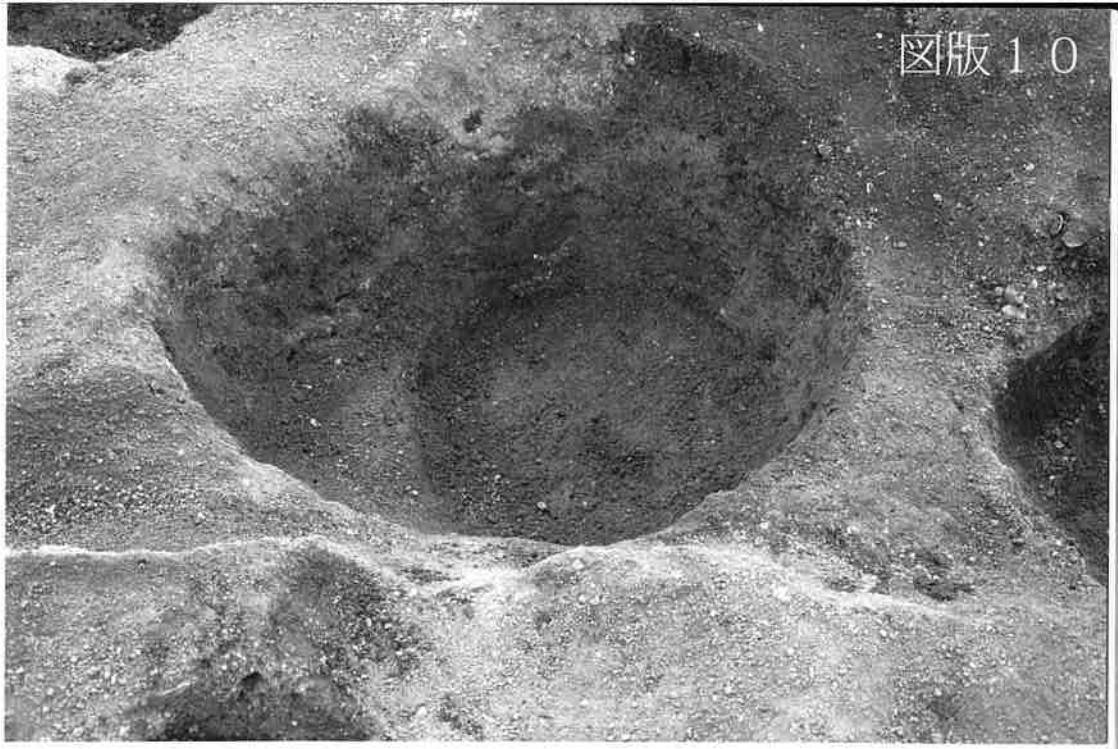
c．SK30 貼床検出
状況（北から）



a．南調査区中央遺構検出状況（北から）

b．南調査区中央調査状況（北東から）

c．SK40 土層堆積状況（東から）

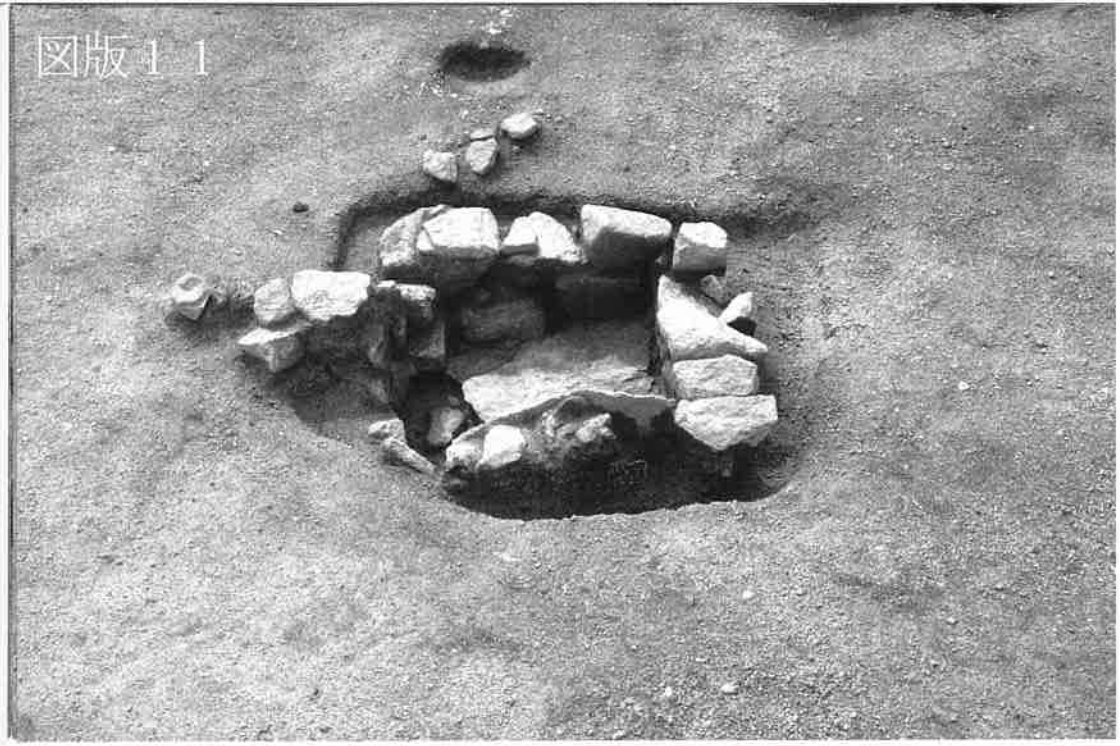


a．SK44 完掘状況
（東から）

b．SK45 完掘状況
（東から）

c．石組 15 検出状況
（北から）

図版 1 1



a．石組 15 内部完掘
状況（北から）

b．石積み検出状況
（南東から）

c．石積み検出状況
（北東から）

a．石積み土層堆積
状況（北から）

b．石積み北東端
検出状況（北から）

c．石積み北東端
矢穴痕（北から）

SK24

SK24 出土遺物 1

SK24 出土遺物２

SK24 出土遺物３

50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
65
64
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
79
80
78
81
82
83

SK24 出土遺物 4

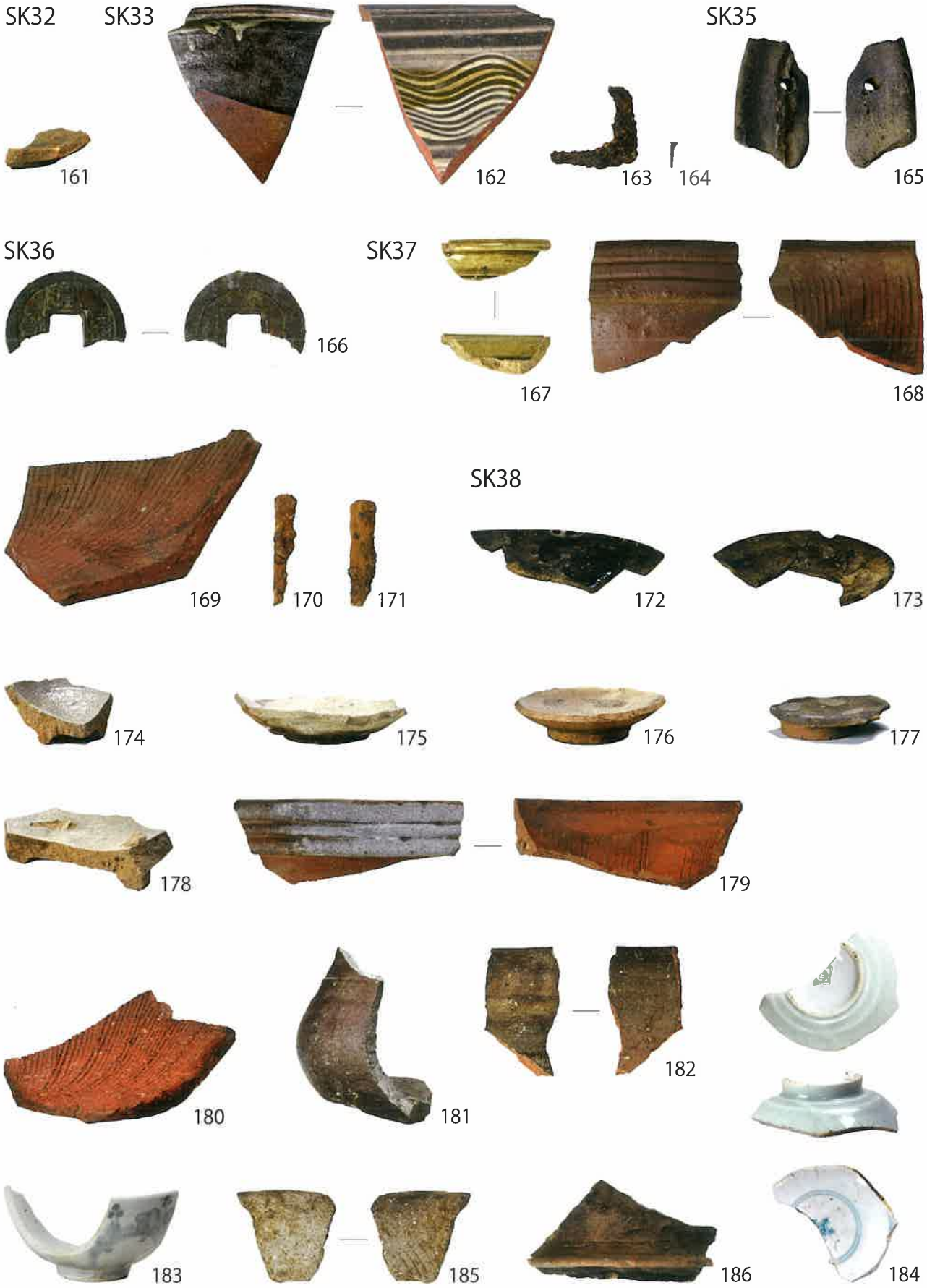
SK24 出土遺物 5

SK24 出土遺物 6

埋甕 11

SK24 出土遺物 7・埋甕 11 出土遺物

SK26・SK27・SK29・SK30・SK31 出土遺物



SK32・SK33・SK35・SK36・SK37・SK38 出土遺物

SK38

187

188

189

SK39

190

191

192

SK40

193

194

195

196

197

198

199

200

201

202

203

SK41

204

205

206

207

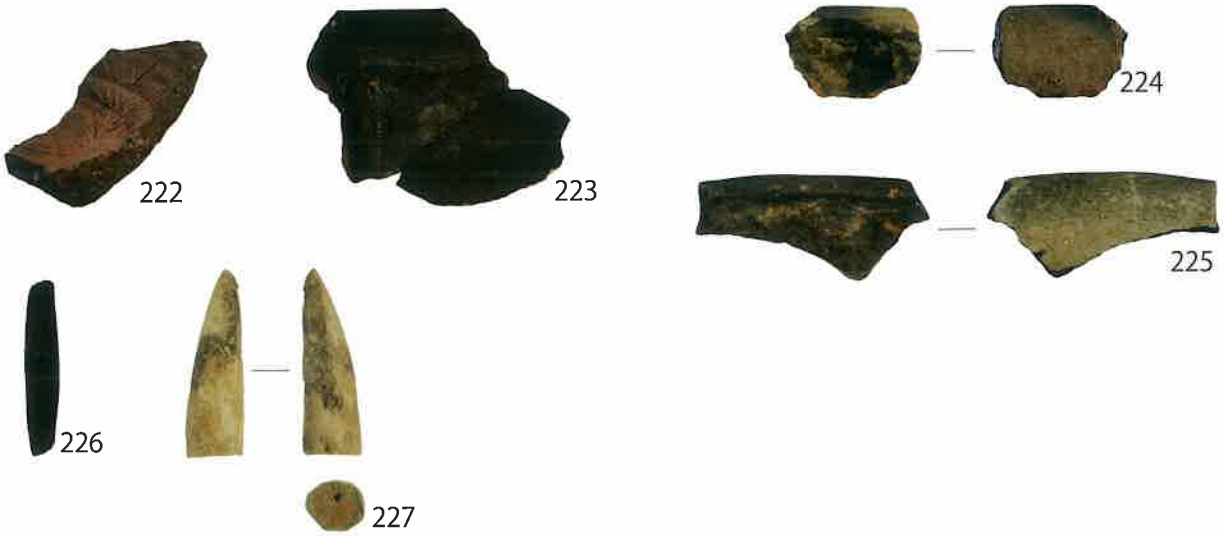
SK38・SK39・SK40・SK41 出土遺物

SK42

SK45

石組 15

石積み



SK42・SK45・石組 15・石積み出土遺物

遺物包含層

228

229

230

233

234

231

232

235

239

236

237

238

240

241

242

243

244

245

246

247

248

249

250

251

252

253

254

包含層出土遺物 1

255
256
257
258
259
260
南調査区南東端貝層
261
262
263
264
265
266
267
268
269
貝層直下
270
271
272
南調査区北端トレンチ
273
274

包含層出土遺物２

報告書抄録

ふりがな	みやじままちやあと にしおおにしまち だいいちちてん はっくつちょうさほうこくしょ	
書　　名	宮島町屋跡 西大西町 第1地点 発掘調査報告書3	
副 書 名	（仮称）厳島美術館建設に伴う発掘調査の記録	
シリーズ名		
シリーズ番号		
編著者名	藤田広幸・重森正樹・株式会社古環境研究所	
編集機関	廿日市市教育委員会事務局 教育部 文化スポーツ課	特定非営利活動法人広島文化財センター
所 在 地	〒738-8501 広島県廿日市市下平良一丁目11番1号 TEL 0829-30-9205　FAX 0929-32-5163	〒732-0052 広島県広島市東区光町二丁目9番22－601号 TEL 082-299-7413　FAX 082-299-7413
発行機関	廿日市市教育委員会事務局 教育部 文化スポーツ課	
所 在 地	〒738-8501　広島県廿日市市下平良一丁目11番1号 TEL 0829-30-9205　FAX 0829-32-5163	
発行年月日	2012年3月31日	

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
みやじままちやあと 宮島町屋跡 にしおおにしちょう 西大西町 だいいちちてん 第1地点	ひろしまけん 広島県 はつかいちし 廿日市市 みやじまちょう 宮島町 にしおおにしちょう 西大西町	34213	34327 -25	34°　17′　45″	132°　19′　02″	20110823 ～ 20120330	372㎡	確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宮島町屋跡 西大西町 第1地点	町屋	中世 近世	石列・埋甕・土坑・石組・石積み	土師質土器・瓦質土器・国産陶磁器（肥前陶磁器・肥前系陶磁器・萩焼・備前焼・関西系陶器・瀬戸美濃焼）・土製品（円盤状土製品・独楽・土錘）・瓦・石製品（砥石・石臼・浮）・金属製品（飾金具・鎹・釘・笄・煙管）・古銭（寛永通寶・元豊通寶）・骨角器	前回調査の中世石積みの延長線上で、南側に伸びる石積みを検出

要　約	宮島町屋跡西大西町第1地点ではこれまでに過去2年にわたって調査が行われ、近世の町屋跡と中世の石積みが検出されている。今回の調査は第1地点の北東側で、19世紀前半の廃棄土坑や石列を検出した。また南側では18世紀後半から19世紀にかけての小鍛冶と考えられる遺構を検出した。さらに東側では前回の調査で検出した中世石積みの延長部分を検出し、さらに石積みが南に続いていることも判明した。西大西町の形成過程の一端を伺い知ることができた。

特別史跡及び特別名勝　厳島

宮島町屋跡 西大西町 第１地点地 発掘調査報告書３

―(仮称)厳島美術館建設に伴う発掘調査の記録―

発行日　平成２４年３月３１日

発　行　廿日市市教育委員会事務局 教育部 文化スポーツ課
広島県廿日市市下平良一丁目１１番１号
〒 738-8501　TEL 0829-30-9205

編　集　廿日市市教育委員会事務局 教育部 文化スポーツ課
広島県廿日市市下平良一丁目１１番１号
〒 738-8501　TEL 0829-30-9205
特定非営利活動法人広島文化財センター
広島県広島市東区光町二丁目９番２２－６０１号
〒 732-0052　TEL 082-299-7413

印　刷　株式会社フジワラ